

# 岸尾遺跡・島田遺跡

—一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区V—

1997年3月

建設省松江国道工事事務所  
島根県教育委員会

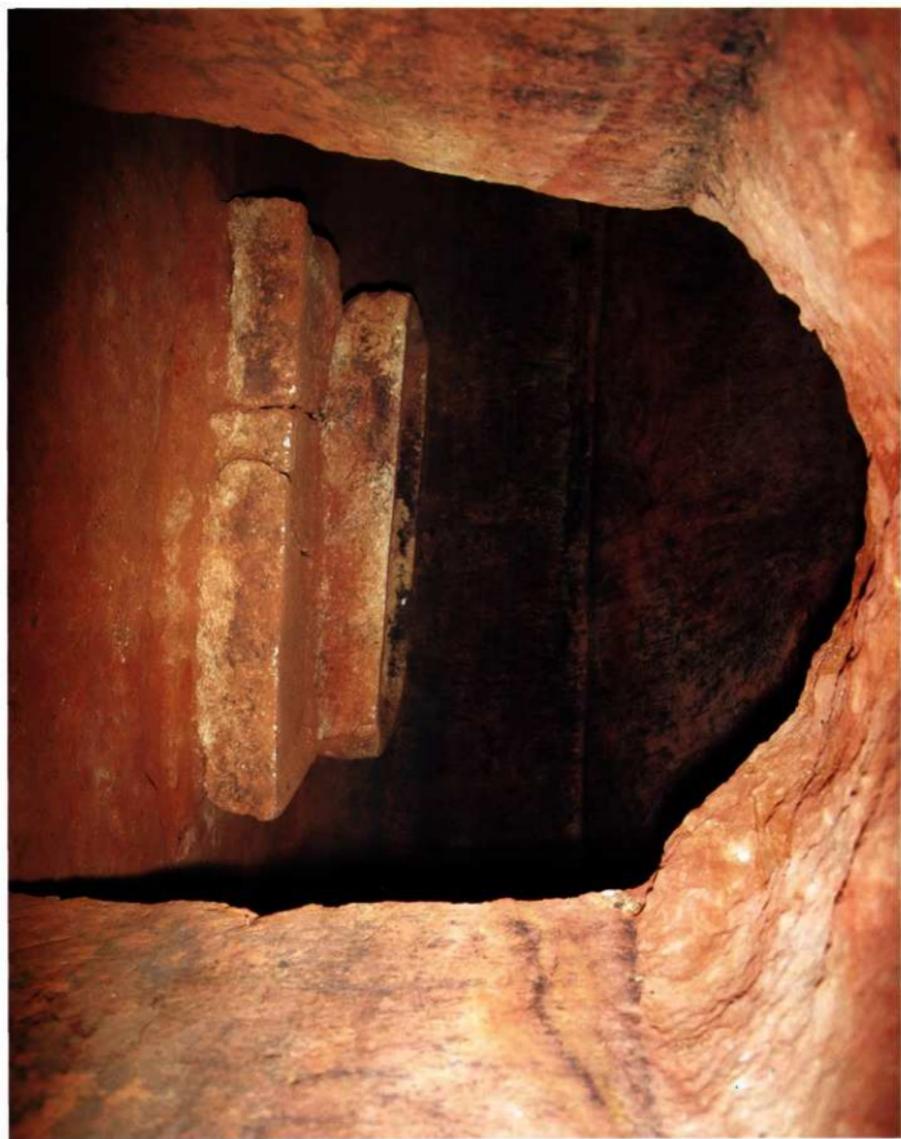
# 岸尾遺跡・島田遺跡

—一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区V—

1997年3月

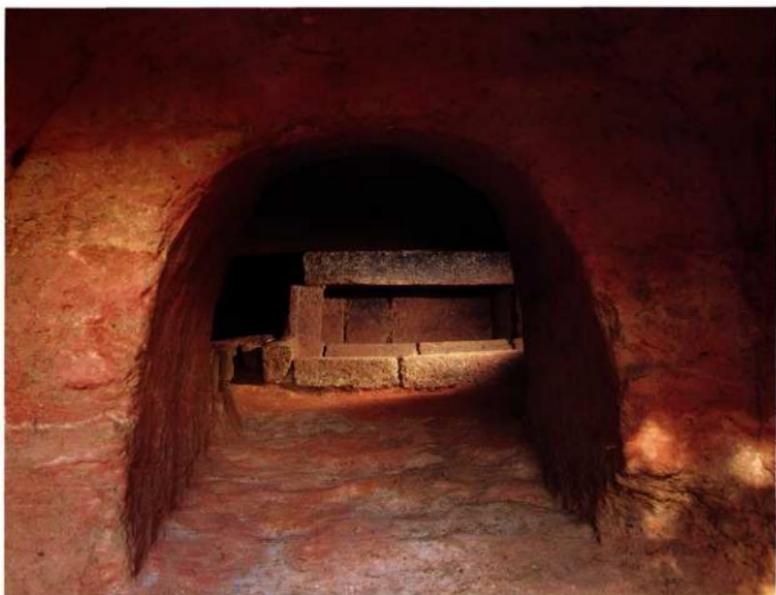
建設省松江国道工事事務所  
島根県教育委員会







島田遺跡 第4号横穴墓 石床



島田遺跡 第1号横穴墓 玄室内

## 序

建設省松江国道工事事務所においては、安来地区の一般国道9号の交通混雑を緩和して、円滑な交通を確保し、地域社会の発展に資するため、一般国道9号のバイパスとして安来道路の建設を進めています。

道路整備に際しては、埋蔵文化財の保護にも充分留意しつつ関係機関と協議しながら進めていますが、避けることのできない埋蔵文化財については、道路事業者の負担によって、必要な調査を実施し、記録保存を行っています。

当安来道路においても道路建設予定地内にある文化財について島根県教育委員会と協議し、同委員会の御協力のもとに平成元年度から発掘調査を行っています。

本報告書は、平成7年度に実施した遺跡調査の成果をとりまとめたものであります。本書が郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術ならびに教育のため広く活用されることを期待すると共に、道路事業が埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ進められていることへのご理解を頂きたいものと思っております。

最後に、今回の発掘調査及び本書の編集に当たり、ご指導ご協力いただいた島根県教育委員会並びに関係各位に対し深甚なる謝意を表すものであります。

平成9年3月

建設省中国地方建設局松江国道工事事務所

所長 大石 龍太郎



## 序

島根県教育委員会では、建設省中国地方建設局の委託を受けて、平成4年度より、一般国道9号安来道路建設予定地内（西地区）に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施してきておりますが、このほど報告書第V集を刊行する運びとなりました。

本報告書は、東出雲町出雲郷に所在する岸尾遺跡及び島田遺跡での調査成果を取りまとめたものです。この調査では、出雲地方でも最大級の規模を誇る横穴墓や特殊な石床、人物埴輪を持つ古墳など大きな発見がありました。この地域は、古代出雲の中枢部である意宇平野の東側に隣接する所でもあり、この地域のみならず出雲地方全体の歴史を解明していく上でも貴重な資料になるものと思われまます。

なお、調査にあたりご協力いただきました建設省松江国道工事事務所、東出雲町をはじめ、関係のみなさまに厚くお礼申し上げます。

平成9年3月

島根県教育委員会

教育長 清原茂治



## 例 言

- 1 本書は、建設省中国地方建設局の委託を受けて、島根県教育委員会が平成7年度に実施した一般国道9号安来道路建設予定地内（西地区）埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。
- 2 平成4年度から着手した「安来道路2-2T区」（安来市荒島町～八東郡東出雲町出雲郷）を、便宜上「安来道路西地区」と呼称する。
- 3 平成7年度は、「安来道路西地区」のうち八東郡東出雲町地内の下記2遺跡の発掘調査を実施した。  
岸尾遺跡（八東郡東出雲町出雲郷岸尾ほか）  
島田遺跡（八東郡東出雲町出雲郷島田ほか）
- 4 調査組織は次のとおりである。

〔事務局〕 勝部 昭（文化財課長） 宍道正年（埋蔵文化財調査センター長） 森山洋光（課長補佐） 佐伯善治（課長補佐） 澁谷昌宏（企画調整係主事）

〔調査員〕 宮澤明久（文化財課主幹・調査第一係長） 林 健亮（同主事） 中川 寧（同主事） 亀井彰子（同講師兼主事） 田中強志（同臨時職員） 松近正巳（同臨時職員）

〔遺物整理〕 荒川あかね 内海紀子 小原理香 影山光子 勝部麻里子 佐々木満寿美  
菅井国江 瀬川恭子 高木 潤 多久和登紀子 立脇由美 中島美穂子  
吉岡朋子 吉田典子

- 5 発掘作業（発掘作業員雇用・測量発注・重機借上・プレハブハウス借上・発掘用具調達など）については、建設省中国地方建設局・社団法人中国建設弘済会・島根県教育委員会の三者協定に基づき、島根県教育委員会から（社）中国建設弘済会へ委託して実施した。

（社）中国建設弘済会島根支部

〔現場担当〕 布村幹夫（技術員） 木村昌義（技術員） 小川剛史（技術員）

〔事務担当〕 高木由佳 高崎増美 加藤道恵

〔発掘作業員〕 井口 清 井口トミ子 石倉春枝 小原本衛 加藤英夫 加藤八重子 小林敬一  
近藤静代 佐藤恵子 坂根 栄 須山卓郎 田川博之 田部 茂 出都千重子  
田淵春雄 高松平比己 竹谷敦史 沼田幸夫 長谷部 武 古川絵里  
三澤キミ子 山田康史 吉儀 傳 池田 朗 石井利次 石倉喜八郎 石田長一  
稲田教子 大久佐 二 大久佐孟子 加藤明子 加藤益江 梶村 緑 越野愛子  
杉原満里子 祖田岩夫 祖田弥生 竹内督子 野々内敦子 二岡シズエ  
細田鈴子 細田雪枝 松本光司 峯山一義 山本敏信 山本博美 湯浅和栄  
湯浅重夫 湯浅晃子 与倉波江 吉田盛一 吉野 賢 渡部品子 渡部敏行

- 6 報告書の作成にあたっては、以下の方々から有益なご助言をいただいた。記して感謝の意を表させていただく。（敬称略）

明石 新（平塚市博物館）

池邊千太郎（大分市教育委員会）

江藤 和幸（宇佐市教育委員会）

木越 邦彦（学習院大学理学部名誉教授）

國見 徹（大磯町郷土資料館）

坂本 嘉宏（大分市歴史博物館）

高木 恭二 (宇土市教育委員会)	高橋 徹 (大分県教育庁文化課)
棚田 昭人 (豊前市教育委員会)	永野 康洋 (別府市教育委員会)
山本 清 (島根県文化財保護審議会会長)	和田 晴吾 (立命館大学文学部教授)
渡辺 貞幸 (島根大学法文学部教授)	井上 晃孝 (鳥取大学医学部助教授)

- 7 挿図中の方位は国土調査法による第Ⅲ系座標軸X軸の方向を指す。従って磁北より7°12′(真北より0°32′)東の方向を示す。
- 8 本報告書に掲載した「遺跡位置図」は建設省国土地理院のものを利用した。
- 9 本報告書の作成は以下の者が行った。  
[遺物・遺構の実測・整図] 林 中川 亀井 田中 松近 中島 吉岡 吉田  
[遺物・遺構の写真撮影] 林 中川
- 10 本報告書の執筆は林と中川が行ない、目次にその分担を記した。
- 11 本報告書の編集は、林と中川が協議して行った。
- 12 出土遺物及び実測図、写真は島根県教育委員会(埋蔵文化財調査センター)で保管している。

# 目 次

第I章	岸尾遺跡・島田遺跡の位置と歴史的環境	(林・中川)	1
第II章	調査に至る経緯と調査の経過	(林・中川)	7
第III章	岸尾遺跡	(中川)	11
	1 遺構		11
	2 遺物		22
	3 小 結		25
第IV章	島田遺跡	(林)	29
	1 トレンチ調査の概要と調査区の設定		29
	2 I区の遺構		35
	3 II区の遺構		35
	4 III区東部の遺構		36
	5 III区中部の遺構		39
	6 古 墳		50
	7 横穴墓		56
	8 遺物の概要		78
	9 小 結		104

# 挿図目次

第1図	岸尾遺跡・島田遺跡の位置	1
第2図	岸尾遺跡・島田遺跡の位置と周辺の遺跡	3~4
第3図	安来道路（西地区）のルート予定地と調査を実施した遺跡	5
第4図	岸尾遺跡調査前測量図・調査区配置図	9
第5図	岸尾遺跡	10
第6図	SB01・SH01・SK07実測図	11
第7図	SB01実測図	12
第8図	SH01実測図	13
第9図	SK01・SK02・SK03・SK04・SK05・SK08実測図	14
第10図	SK07・SX02実測図	16
第11図	SX01実測図	17
第12図	SX03・SD02実測図	18
第13図	SX04・SK06実測図	19
第14図	落とし穴・土器溜実測図	20
第15図	岸尾遺跡出土土器実測図	23
第16図	岸尾遺跡出土右器実測図	24
第17図	島田遺跡（調査前）地形測量図・トレンチ配置図	30
第18図	島田遺跡土層断面図	31
第19図	島田遺跡Ⅰ区遺構配置図	32
第20図	SK2平面図・土層断面図	33
第21図	島田遺跡Ⅱ区・Ⅲ区東部遺構配置図	34
第22図	SA1・2平面図・断面図	35
第23図	SA3付近平面図・断面図	36
第24図	島田遺跡Ⅲ区中部遺構配置図	37
第25図	ピット1~6平面図・断面図	38
第26図	ピット群平面図・断面図	38
第27図	SK4平面図・土層断面図	39
第28図	SK3平面図・土層断面図	39
第29図	SK6平面図・土層断面図	40
第30図	SD1平面図・土層断面図	41
第31図	島田遺跡Ⅲ区中部（調査前）地形測量図・トレンチ配置図	42
第32図	SK9平面図・断面図	43
第33図	SK1平面図・土層断面図	44
第34図	SK7平面図・土層断面図	45

第35図	S K 8 平面図・土層断面図	46
第36図	島田遺跡Ⅲ区西部(調査前)地形測量図	47
第37図	島田遺跡Ⅲ区西部遺構配置図・セクションベルト配置図	48
第38図	島田遺跡Ⅲ区西部土層断面図	49
第39図	島田1号墳主体部平面図・断面図	51
第40図	島田1号墳遺物出土状況	52
第41図	島田1号墳付近地形測量図	53
第42図	島田3号墳地形測量図	54
第43図	第1・4号横穴墓前庭部平面図	55
第44図	第1号横穴墓土層断面図	57~58
第45図	第1号横穴墓閉塞状況	59
第46図	第1号横穴墓玄室内平面図・立面図	60
第47図	第1号横穴墓玄室内立面図	61
第48図	家形石棺実測図	62
第49図	第1号横穴墓完掘状況	63
第50図	第4号横穴墓前庭部土層断面図	65~66
第51図	羨道部土層断面図・玄室内遺物検出状況	67
第52図	第4号横穴墓閉塞状況	68
第53図	第4号横穴墓玄室内石群検出状況	69
第54図	第4号横穴墓石床実測図	70
第55図	第4号横穴墓玄室内実測図	71
第56図	第4号横穴墓玄室内完掘状況	72
第57図	第3号横穴墓前庭部平面図・土層断面図	73~74
第58図	第3号横穴墓閉塞状況	75
第59図	第3号横穴墓玄室内実測図	76
第60図	島田遺跡出土石器実測図	79
第61図	島田遺跡出土石器実測図	80
第62図	S K 8 出土遺物実測図	81
第63図	島田1号墳出土遺物実測図(1)	81
第64図	島田1号墳出土遺物実測図(2)	82
第65図	島田1号墳付近出土遺物実測図	83
第66図	島田1号墳出土遺物実測図(3)	84
第67図	島田1号墳出土遺物実測図(4)	85
第68図	島田1号墳出土遺物実測図(5)	86
第69図	島田1号墳出土遺物実測図(6)	87
第70図	島田1号墳出土遺物実測図(7)	88
第71図	第1号横穴墓出土遺物実測図(1)	89

第72図	第1号横穴墓出土遺物実測図(2)	90
第73図	第1号横穴墓出土遺物実測図(3)	91
第74図	第1・4号横穴墓出土遺物実測図(4)	91
第75図	第4号横穴墓出土遺物実測図(1)	92
第76図	第4号横穴墓出土遺物実測図(2)	93
第77図	第4号横穴墓出土遺物実測図(3)	93
第78図	第3号横穴墓出土遺物実測図	94
第79図	島田遺跡(調査後)地形測量図(1:600)	109~110

## 図版目次

図版1	岸尾遺跡遠景 SB01・SD01検出状況
図版2	SB01・SD01完掘状況 柱穴5・土器出土状況
図版3	SH01完掘状況 SB01・SH01・SD01完掘状況
図版4	SK01検出状況 SK03検出状況 SK04完掘状況
図版5	SK02検出状況 SK02完掘状況
図版6	SK02完掘状況 SK06完掘状況 SK04検出状況
図版7	SK07検出状況 同 上
図版8	SK07土器出土状況 SK07完掘状況
図版9	SX01検出状況 SX01石検出状況 SX01完掘状況
図版10	SX02検出状況 SX02黒褐色土(3層)検出状況 SX02完掘状況

- 図版11 落し穴完掘状況  
土器溜検出状況
- 図版12 岸尾遺跡出土土器(1)
- 図版13 岸尾遺跡出土土器(2)
- 図版14 岸尾遺跡出土土器(3)
- 図版15 岸尾遺跡出土土器(4)
- 図版16 岸尾遺跡出土土器(5)  
石器・黒曜裂片

#### 島田遺跡

- 図版17 島田遺跡調査前全景(北から)  
島田遺跡調査前近景(南から)
- 図版18 島田遺跡調査後近景(Ⅲ区東から)  
島田遺跡調査後全景(北から)  
島田遺跡調査後近景(南から)
- 図版19 N1トレンチ北壁土層堆積状況  
第3号横穴墓土層堆積状況(南から)  
第3号横穴墓上層炭竈(東から)
- 図版20 Ⅲ区ビット群(SA-5・6)完掘状況  
(東から)  
SK-9検出状況(西から)  
SK-9完掘状況(西から)
- 図版21 SK-4完掘状況(東から)  
SK-3土層堆積状況  
SK-3完掘状況
- 図版22 SK-7土層堆積状況  
SK-7作業風景  
SK-7完掘状況(東から)
- 図版23 島田遺跡5Bトレンチ土層堆積状況  
(SK-1付近)  
SK-1検出状況(西から)  
SK-1土層堆積状況(西から)
- 図版24 SK-1完掘状況(東から)  
SK-1完掘状況(西から)
- 図版25 SK-8検出状況(西から)  
SK-8石材の状況(南から)  
SK-8完掘状況(南から)
- 図版26 島田1号墳土層堆積状況

- (主体部付近北から)
- 島田1・2号墳土層堆積状況  
(周溝内 南から)
- 図版27 島田1号墳主体部大刀出土状況  
(南から)
- 島田1号墳主体部土層堆積状況  
(東から)
- 島田1号墳主体部刀子出土状況  
(南から)
- 図版28 島田1号墳作業風景(北から)
- 島田1号墳遺物出土状況(東から)
- 図版29 島田1号墳完掘状況(東から)
- 島田1・2号墳完掘状況(東から)
- 図版30 島田3号墳七層堆積状況  
(周溝内 南から)
- 島田3号墳完掘状況(西から)
- 図版31 第1・4号横穴墓(南から)
- 第1号横穴墓土層堆積状況(南から)
- 第1号横穴墓土層堆積状況(東から)
- 図版32 第1号横穴墓付近遺物出土状況  
(南から)
- 第1号横穴墓閉塞状況
- 第1号横穴墓閉塞石除去状況
- 図版33 第1号横穴墓家形石棺  
同 右から
- 図版34 第1号横穴墓石床
- 第1号横穴墓玄室天井
- 第1号横穴墓玄室・玄門
- 図版35 第4号横穴墓土層堆積状況(南から)
- 第4号横穴墓土層堆積状況(東から)
- 第4号横穴墓閉塞状況
- 図版36 第4号横穴墓前庭部
- 第4号横穴墓羨道部
- 第4号横穴墓玄門 玄室内
- 図版37 第4号横穴墓玄室内石列検出状況  
同 (左から)
- 同 (右から)

- 図版38 第4号横穴墓2号石床上面  
第4号横穴墓玄室内右袖付近  
人骨出土状況  
第4号横穴墓玄室内左袖付近  
人骨出土状況
- 図版39 第4号横穴墓石床  
同 (右から)  
第4号横穴墓玄室内天井 壁面
- 図版40 2号石床設置状況  
2号石床台石  
第4号横穴墓石床付近完掘状況
- 図版41 第3号横穴墓閉塞状況  
第3号横穴墓羨道玄門
- 図版42 第3号横穴墓前庭部  
第3号横穴墓玄室内壁面  
第3号横穴墓玄室内完掘状況
- 図版43 島田遺跡3区出土遺物
- 図版44 島田1号墳出土須恵器
- 図版45 島田1号墳出土遺物
- 図版46 島田1号墳出土埴輪
- 図版47 島田1号墳出土埴輪
- 図版48 島田1号墳出土遺物
- 図版49 第1号横穴墓出土土器
- 図版50 第4号横穴墓出土遺物
- 図版51 島田遺跡出土遺物
- 図版52 島田遺跡出土遺物



## 第I章 岸尾遺跡・島田遺跡の位置と歴史的環境

一般国道9号安来道路建設予定地の内、安来道路西地区は、安来市荒島町から八束郡東出雲町にわたる。東は鳥取県米子市、西は松江市に接しており、南には京羅木山(473.0m)を始めとする山々が連なり、北には中海が広がっている。現在の集落は概ね平地に散在するが、その平地は中海に面した北側と京羅木山をはじめとする山々から北方向に派生する尾根が形成するいくつかの谷に限られる。現在の湖岸線は、揚屋干拓地を除き、約6000～5000年前のいわゆる「縄紋海進」の後の縄紋晩期を中心とする時期(約3000～2400年前)に湖岸線が海側に退いて形成されたものと考えられる。

つぎに今回の調査報告にあたり、東出雲町内の遺跡について時代ごとに述べる。

### 周辺の遺跡

#### 〈縄紋時代〉

縄紋時代の遺跡は少ないが、前期から晩期の土器が出土した竹ノ花上遺跡(178)、晩期の土器を出土した春口遺跡(172)、大木権現山2号墳下層(198)が挙げられる。

#### 〈弥生時代〉

弥生時代の主な遺跡として、前期～中期の竪穴住居址が検出された寺床遺跡(197)、中期の壺や打製石斧、榎殻痕のある土器や土鍾などが出土した磯近遺跡(223)、後期末の墳丘墓である大木権現山1号墓(198)などがある。

縄紋時代・弥生時代の遺跡は、古墳時代以降に比べると少ない。

#### 〈古墳時代〉

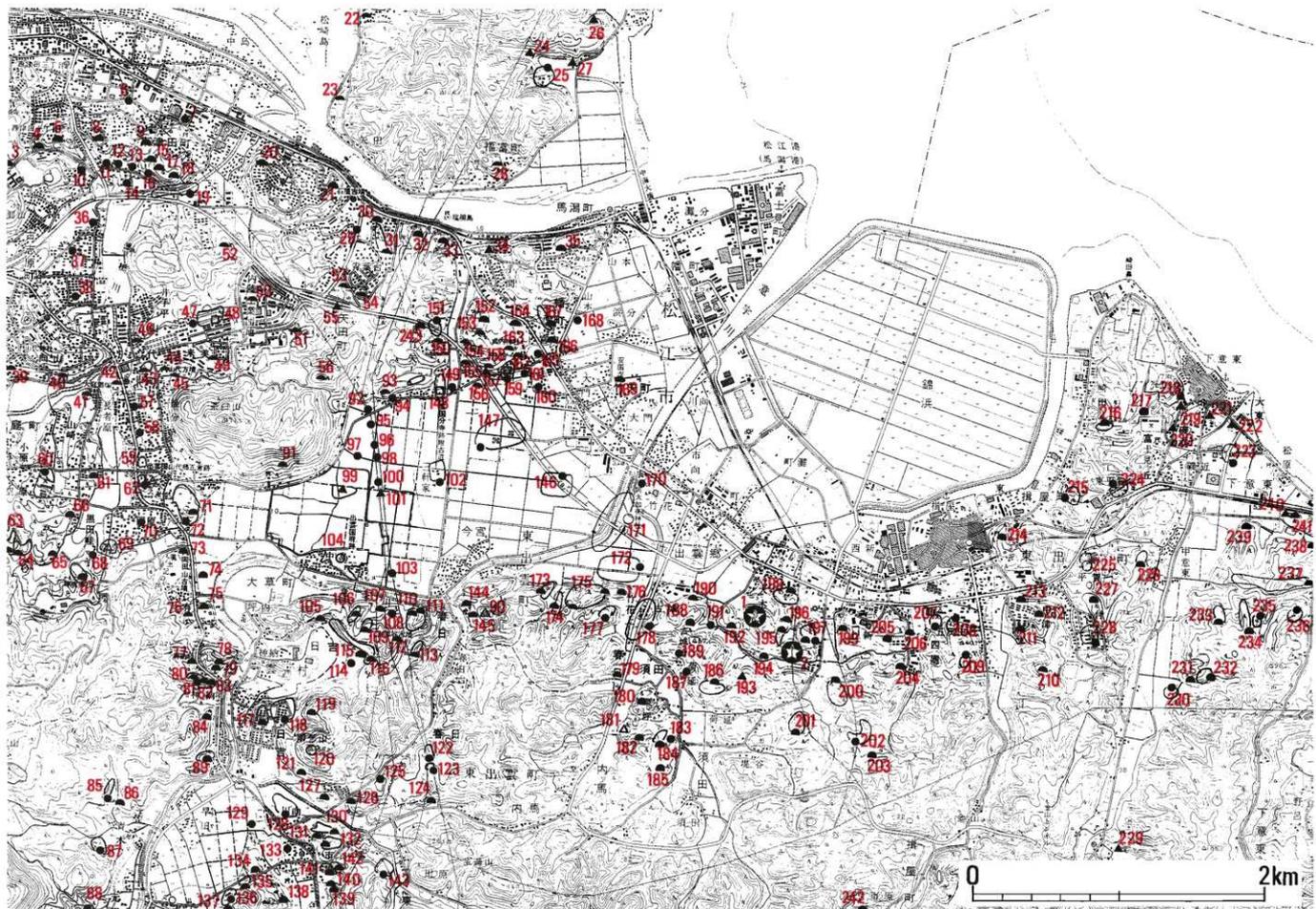
平野に面した丘陵上を中心に古墳が築かれるようになる。前期には、礫礫に割竹形木棺が納められており、斜縁神獸鏡などの豊富な副葬品が出土した寺床1号墳(197)、内行花文鏡が出土した古城山2号墳(188)などがある。中期には箱式石棺の大木権現山2号墳(198)、舟形に造られた主部を持つ大草岩船古墳(112)などがある。後期には石棺式石室を持つ栗坪古墳群(180)、箱式石棺を持つ焼田古墳群(234)がある。島田池古墳群(196)や浜山池古墳群(200)のように丘陵上に築かれる古墳群も一部は中期から後期にかけて築かれたものであろう。

また、この地域は四柱式家形の横穴墓の多い地域であり、組合式の家形石棺を持つ浜山池横穴墓群(200)、家形石棺や後背墳丘を持つ島田池横穴墓群(195)の他に、古城山横穴墓群(190)、高井横穴墓群(211)、四ツ廻横穴墓群などがある。

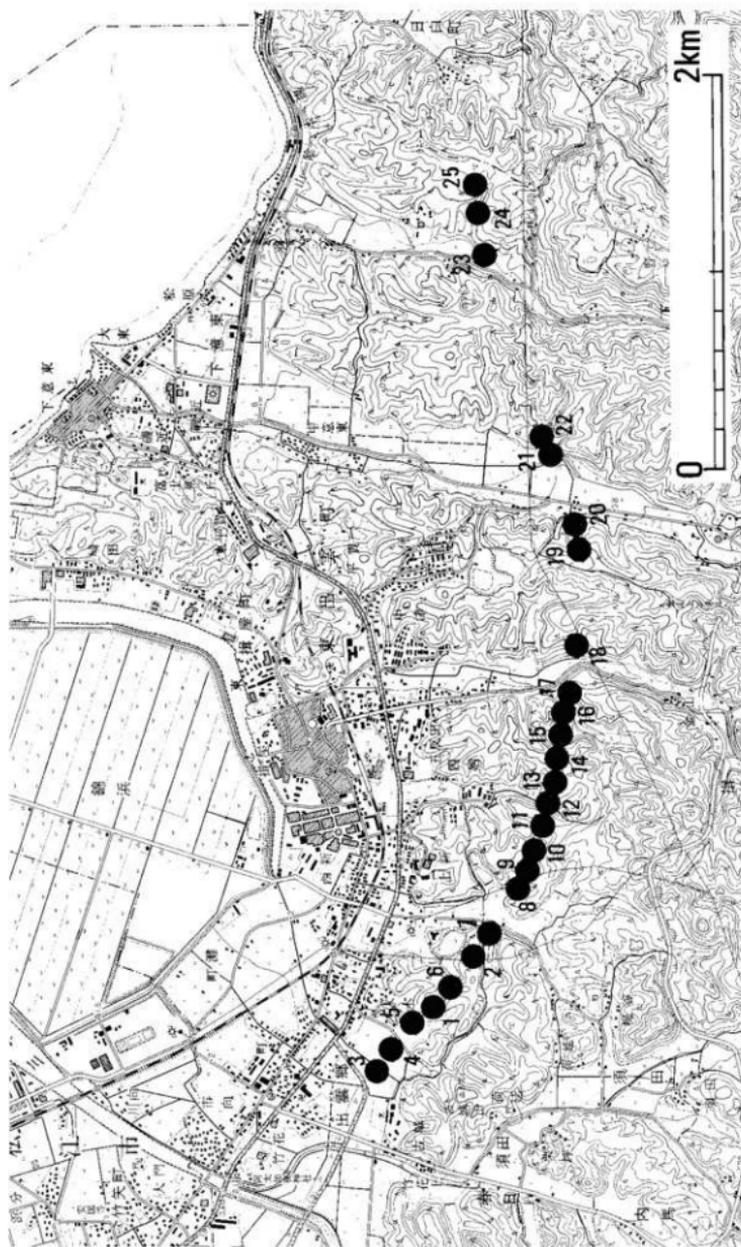


第1図 岸尾遺跡・島田遺跡の位置





第2図 岸尾遺跡・島田遺跡の位置と周辺の遺跡



第3回 ルート予定地と調査を実施した遺跡

この時代の集落は前期～後期の集落で玉作りも行なわれた勝負遺跡（3-15）の他に、栗坪遺跡（183）、桃田遺跡（235）などがあり、生産遺跡では須恵器の窯跡である古屋窯跡（229）がある。

#### 〈奈良～平安時代〉

意字平野の意字川沿いは、航空写真によって条里制が敷かれていたことが推定されている。意字平野には出雲国庁、出雲国分寺（148）、国分尼寺などの址が確認されており、これに隣接する東出雲町内の出雲郷地区が出雲国の政治的中心地と深くかかわっていた様子がうかがえる。

#### 〈鎌倉時代～室町時代〉

町内の城址は、春日城址（90）、古城山城址（191）、京羅木山城址、福良城址（117）などが知られている。春日城址は下河原氏の居城であったが、尼子氏との激しい攻防を繰り返した末、落城したと記録されている。現在でも本丸・出丸・空堀が残っている。古城山城址は、暫として利用されていたと考えられ、現在でも井戸や郭が残されている。京羅木山城址からは、広瀬町にある月山高田城を望むことができ、毛利氏が尼子氏を攻める際に重要な城であったと考えられる。福良城址は急峻な山腹に郭が設けられているが、この城は尼子氏の家臣である作間左衛門入道の居城と考えられており、この城も尼子氏と毛利氏との攻防の際の重要な城であったと推定される。

## 参 考 文 献

東出雲町教育委員会 『東出雲町の遺跡』 1988

原田敏照・勝瀬利栄ほか 1993 『一般国道9号安米道路建設予定地内埋蔵文化財調査報告書 西地区Ⅰ』 島根県教育委員会・建設省松江国道工事事務所

同 1994 『中山遺跡 巻林遺跡 一般国道9号安米道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書西地区Ⅱ』 島根県教育委員会・建設省松江国道工事事務所

## 調査を実施した遺跡

- |           |          |
|-----------|----------|
| 1 岸尾遺跡    | 16 堂床古墳  |
| 2 島田遺跡    | 17 堂床遺跡  |
| 3 恵比須遺跡   | 18 受馬遺跡  |
| 4 鶴貫遺跡    | 19 毛無遺跡  |
| 5 島田池遺跡   | 20 毛無古墳  |
| 6 長廻遺跡    | 21 土元遺跡  |
| 7 長廻古墳群   | 22 御崎谷遺跡 |
| 8 渡山池古墳群  | 23 清水遺跡  |
| 9 渡山池遺跡   | 24 巻林遺跡  |
| 10 原ノ前遺跡  | 25 巻林横穴  |
| 11 四ツ廻Ⅱ遺跡 |          |
| 12 四ツ廻Ⅰ遺跡 |          |
| 13 大島遺跡   |          |
| 14 林廻り遺跡  |          |
| 15 勝負遺跡   |          |

## 第II章 調査に至る経緯と調査の経過

昭和47年、建設省松江国道工事事務所から県教委委員あてに国道9号線バイパス建設の基本設計資料作成のため、安来市古佐町から松江市乃白町に至る30.3km区間における埋蔵文化財の有無について照会があった。これを受けて、県教育委員会で昭和47年と48年にこの区間の分布調査を実施した。

その後、昭和61年度に安来市島田町から同赤江町に至る延長6.9km区間が「安来バイパス」として事業化されたが、昭和63年度には、既に部分共用を行っている「米子道路」と「松江道路」を接続する延長18.7kmの高規格幹線道路（自動車専用道路）の「安来道路」に計画変更された。この変更に伴い昭和62年度と63年度に再度分布調査を実施した。

**平成7年度までの経過** 安来道路西地区については、平成4年度から調査を開始している。安来市荒島町から八束郡東出雲町出雲郷に至る西地区（2-2工区）の発掘調査は、この年度に、東出雲町内の御崎谷遺跡・土元遺跡・清水遺跡の発掘調査と町内の22遺跡のトレンチ調査を実施し、平成5年度には、東出雲町内の四つ廻II遺跡・林廻り遺跡・受馬遺跡・巻林遺跡・鶴見遺跡、安来市内の桐の木I遺跡・桐の木II遺跡・亀尻I遺跡・亀尻II遺跡・中山遺跡の発掘調査を実施した。

平成6年度は、4月13日より安来市内の塩津山遺跡、東出雲町内の島田池遺跡の発掘調査を開始した。続いて4月18日より5月13日まで竹ヶ崎遺跡のトレンチ調査を実施した。その後、9月8日より22日まで柳II遺跡、9月26日より10月5日まで小久白遺跡、10月6日より18日まで柳I遺跡、10月18日より11月16日まで神庭谷遺跡、11月5日より12月22日まで柳古墳群のトレンチ調査を実施するとともに、小久白古墳の踏査を行った。

調査の結果、竹ヶ崎遺跡・柳古墳群・柳古墳群・柳II遺跡・神庭谷遺跡では、住居跡やピットが検出され、土師器や須恵器が出土した。また、小久白古墳では伐開後詳細な踏査を行ったところ、列石を伴う盛土をした高塚が確認された。しかし、柳I遺跡・小久白遺跡では遺物も遺構も検出されなかった。竹ヶ崎遺跡は、12月8日から翌年1月10日まで本調査が実施され、塩津山遺跡は1月20日に、島田池遺跡は同23日に一旦調査を終了した。一方、東出雲町の浪山池古墳群でも12月12日よりトレンチ調査が開始され、続いて本調査が翌年1月13日まで実施された。

平成7年度は、4月12日から島田池遺跡の、4月17日からは堂床古墳・勝負遺跡・浪山池遺跡・浪山池古墳群・島田遺跡・岸尾遺跡の、4月25日からは神庭谷遺跡・柳遺跡・竹ヶ崎遺跡の全面調査を開始した。このうち島田池遺跡では35穴にも及ぶ横穴墓群を、勝負遺跡では、古墳時代の玉作遺跡を調査した。また、浪山池古墳群では県内でも数例しかない陶棺を取めた横穴墓を検出している。安来市の小久白古墳は9月5日に一旦調査を終えた。また、堂床古墳が11月22日に、勝負遺跡・原ノ前遺跡・浪山池遺跡は12月22日に測量の一部を除き現地での作業を終えた。

**岸尾遺跡・島田遺跡の調査の経過** 岸尾遺跡は、八束郡東出雲町出雲郷に、島田遺跡は同町出雲郷から掛屋に所在する。一般国道9号（安来道路）の建設に伴い、建設省を事業主体として埋蔵文化財の発掘調査を行った。

岸尾遺跡は、平成7年4月11日から調査を開始し、27日にはSX-01を、6月21日には、SB-01やそれに伴う遺構を検出している。8月に入ると7日にSK-07を、翌8日に土器溜を、11日には落し穴を検出している。主な遺構を検出し終えた9月5日にはラジコンヘリによる航空写真撮影

を行い、9月25日に調査を終了した。

発掘は、丘陵斜面は一部機械で、その他の部分は人力で掘削を行った。

一方、島田遺跡は4月10日より丘陵頂部の平板測量を開始し、同17日より掘削を開始した。同25日には1号墳について掘削を開始し、5月8日には須恵器・埴輪片が出土し始めた。6月16日には第1号横穴墓を7月14日には第3号横穴墓を検出した。この時点で横穴墓は2穴のみと考えていたが、第1号横穴墓隣にトレンチを設定し、8月4日に第4号横穴墓の存在を確認した。

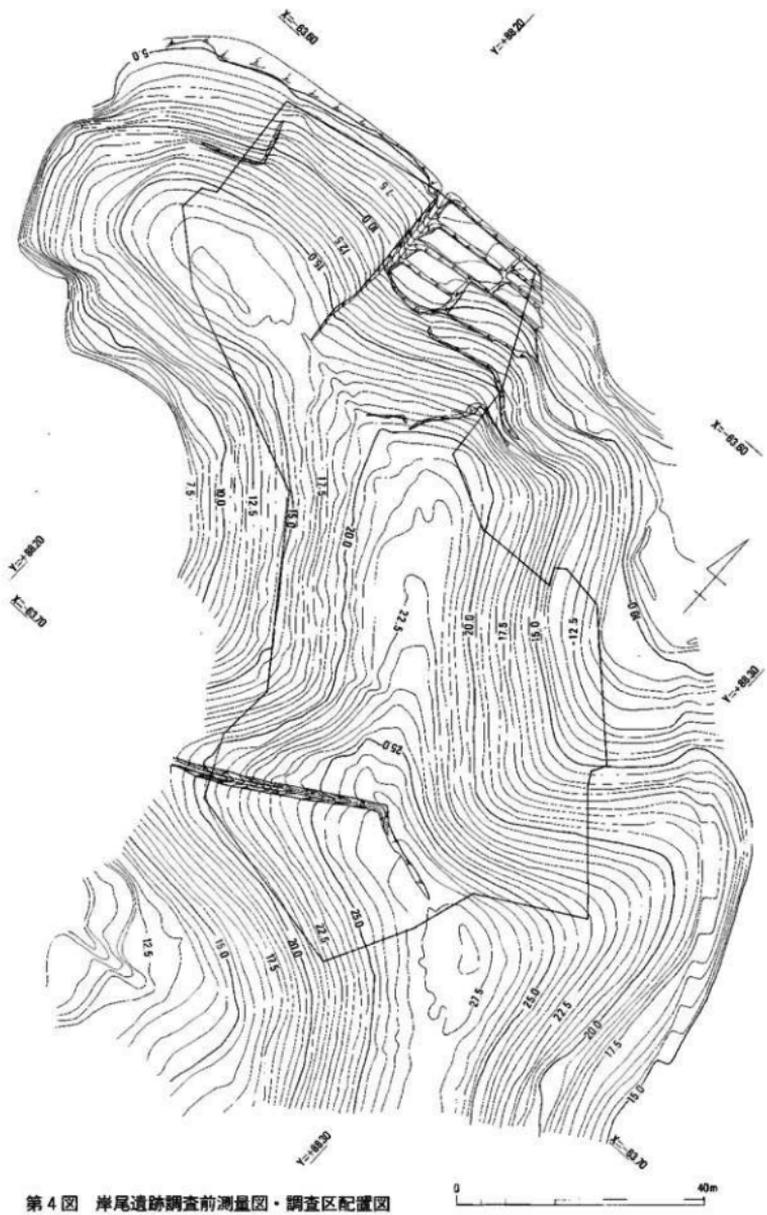
その後の調査は横穴墓を中心に掘削を行い、全ての横穴墓をほぼ完掘した10月17日には、第4号横穴墓出土の人骨を、鳥取大学井上先生の指導で取り上げた。

これに先立つ10月13日には、島田1号墳周溝から人物埴輪が出土している。

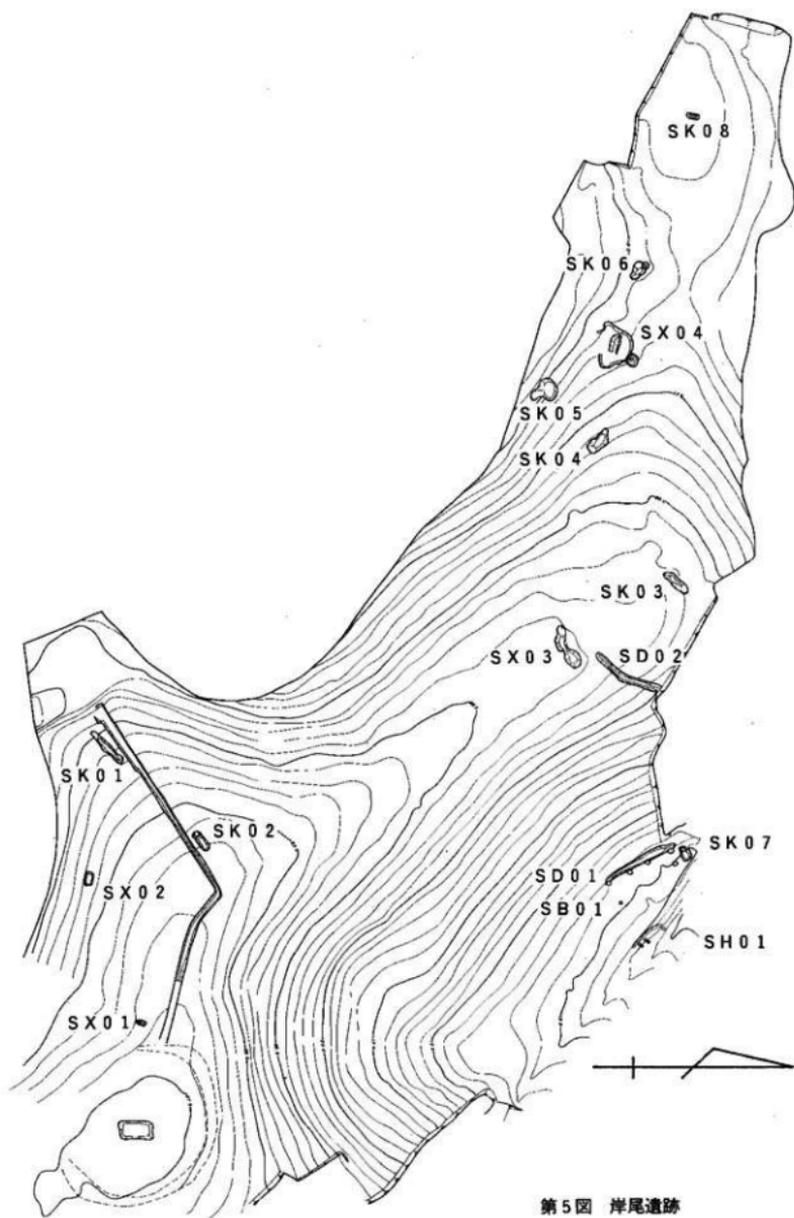
こうした状況について、11月6日には、山本清・池田満大岡先生に、翌7日には和田晴吾立命館大学教授・渡邊貞幸島根大学教授に調査指導を受け、それを受けて、11月11日に現地説明会を開催している。現地説明会には地元を中心に約150人が参加した。

11月7日には掘削等ほとんどの作業は終了し、11月17日に実測・測量も終了した。これを受け、12月18日には第1・4号横穴墓の石棺・石床の持ち出し作業を行った。

岸尾遺跡・島田遺跡で出土した遺物の整理・検討から報告書の作成は、平成8年1月から開始し、岸尾遺跡については3月末まで、島田遺跡については12月末までを要した。



第4图 岸尾遺跡調査前測量図・調査区配置図



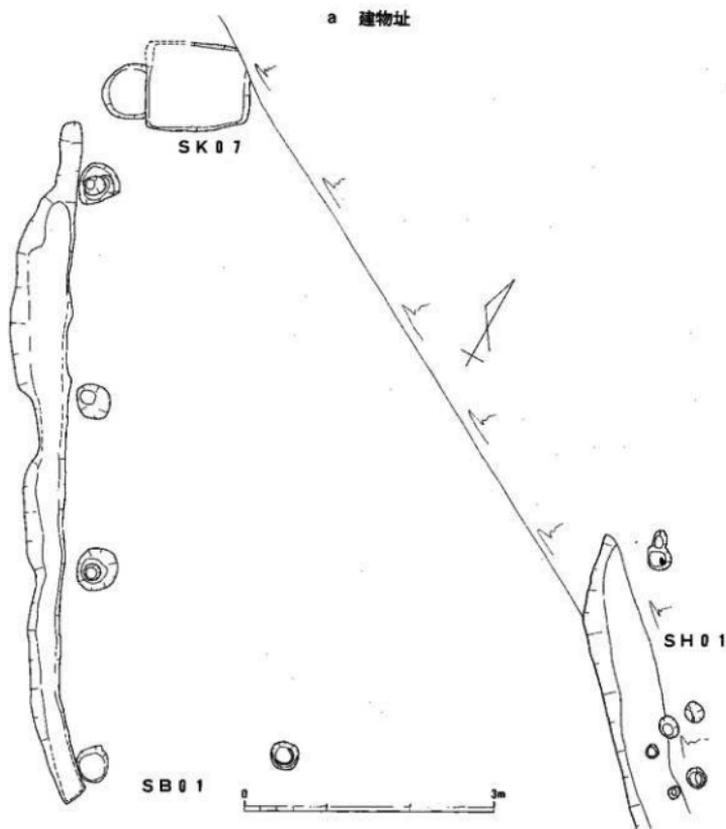
第5圖 岸尾遺跡

### 第三章 岸尾遺跡

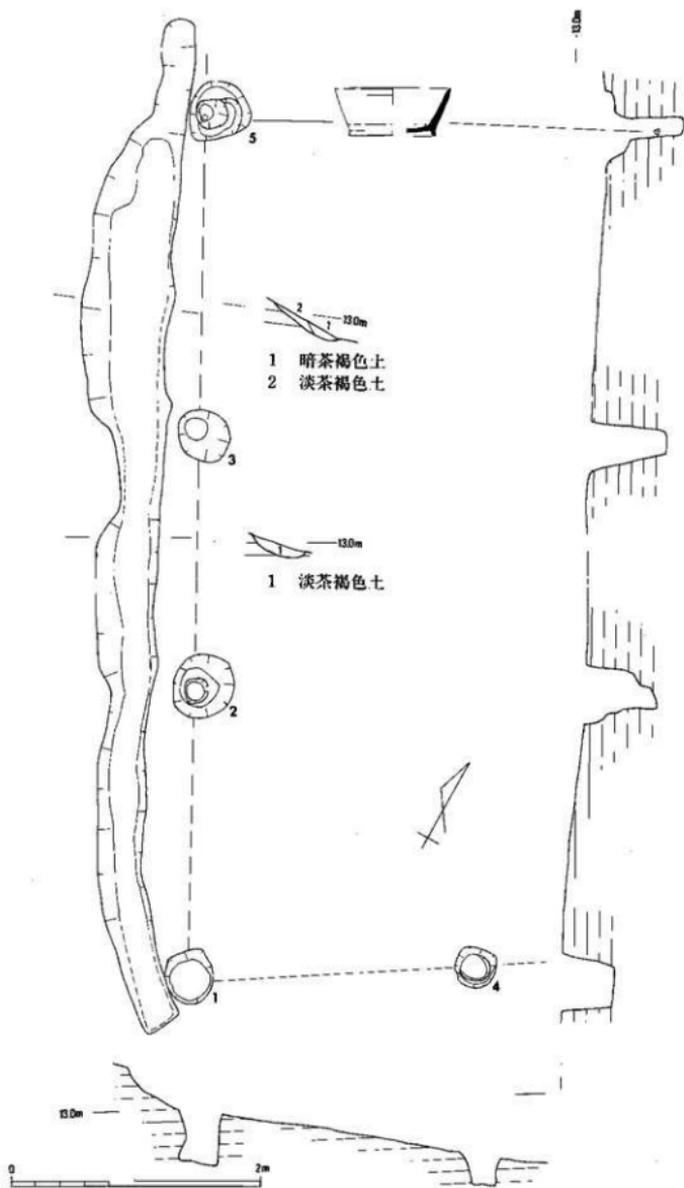
#### 1 遺構

岸尾遺跡は意字平野を西に望む低丘陵の先端部に位置する。岸尾遺跡の尾根は、標高25.00m付近までと22.50m付近から20.20m付近までは削平が激しく、表土のすぐ下に地山である赤褐色土が堆積しているが、稜線の主軸が北西方向から西へ変わる地点より下の、標高20.00mより下の丘陵頂部付近は後世の改変をあまり受けていないのではないか、と考えられる。

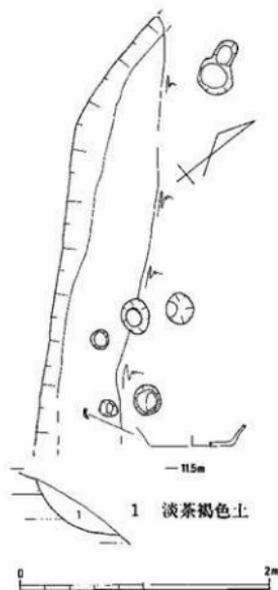
遺構の存在する位置は、丘陵稜線付近と丘陵東側斜面下方が中心である。建物址2棟、溝2、土壇8基、基壇2基、落し穴1、その他の遺構2が検出された。



第6図 SB-01、SH-01、SK-07実測図



第7图 SB-01实测图



第8図 SH-01実測図

### S B01 (第7図)

丘陵東側斜面の下方、緩斜面になったところ位置しているが、工事用道路の設置によって削平されており、現存する規模は1間×3間(7.1m×2.3m)以上の掘立柱建物址である。柱間の寸法は2.2~2.6m×2.3mである。床面は確認できなかった。柱穴は平面が円形(1・2・4)、楕円形(3)、不整形形(5)で、検出面の規模は直径約0.4~0.5m前後、深さ約0.5~0.6m前後であるが、柱穴4のみ直径約0.3m、深さ約0.3mである。柱穴2と5は二段になっている。いずれも埋土は淡茶褐色である。柱根は認められなかったが、柱穴の底面から推定して柱の直径は約15cm程度であったと考えられる。

斜面側にS B01に伴うと考えられる溝S D01を検出した。

柱穴1から土師器小片が、柱穴5の埋土から須恵器坏片(第15図1)が出土し、この遺構の時期は8世紀後半と考えられる。

### S H01 (第8図)

丘陵東側斜面の下方、S B01の下方に位置しているが、工事用道路の斜面で検出されたので、殆ど削平されており、わずかに3.54m×0.7mの規模で残存していた建物址であり、検出面より最大で約0.4mの深さを持つ。埋土は淡茶褐色である。この建物址に伴うと考えられるピットが7つ検出されている。

埋土から須恵器の甕の小片や土師器坏片が出土し(第15図2・3)、ピットからも土師器細片が出土した。土層による観察が出来なかったので、S B01との先後関係は不明であるが、8世紀後半を中心とする時期に属するのではないかと考えられる。

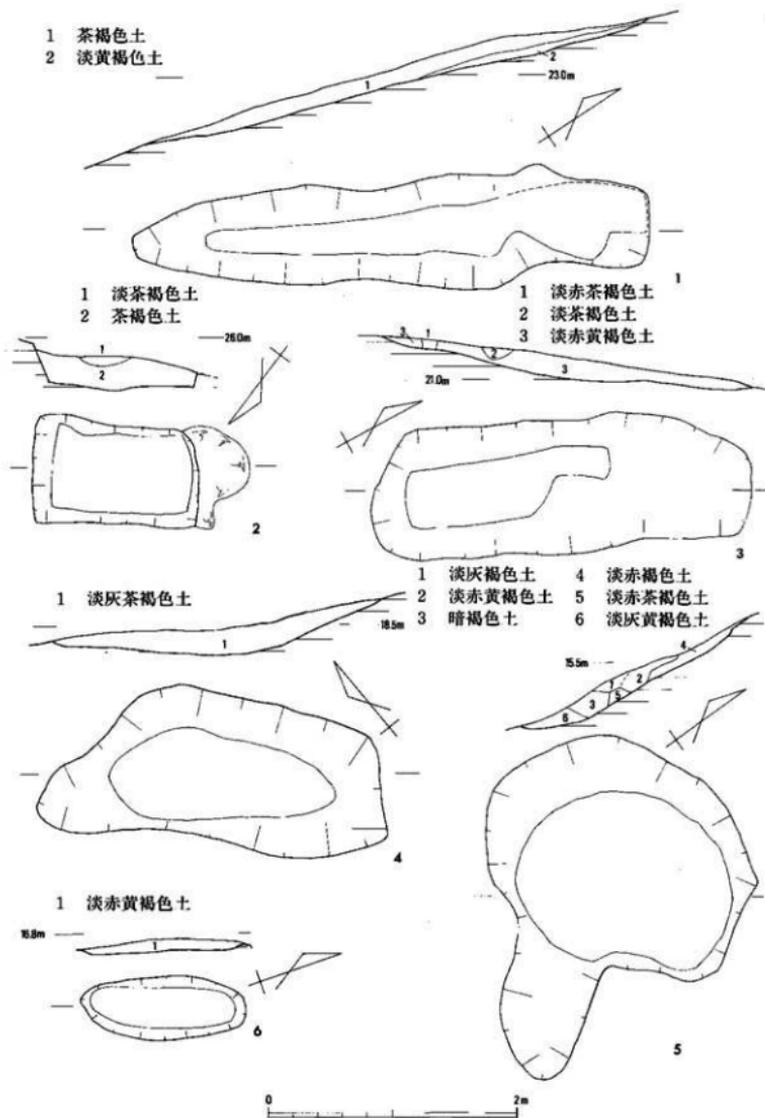
## b 溝

### S D01 (第7図)

S B01の斜面側で検出した、断面U字形の溝である。若干蛇行しながらほぼ直線上にのびており、規模は長さが8.3m、幅は最大で0.66m、最小で0.34mを計り、深さは削平のため現存で0.16mである。埋土は下層に淡茶褐色土、上層に暗茶褐色土が堆積しており、淡茶褐色土から土師器片が出土したが細片のため実測はしていない。

### S D02 (第12図2)

標高20.00m~21.50m付近の丘陵の主軸方向が変わる地点で検出した、断面J字形の溝である。やや蛇行しており、規模は長さが7.5m、幅は0.44~0.52mを計り、深さは0.62mである。埋土は淡茶褐



第9图 SK-01、SK-02、SK-03、SK-04、SK-05、SK-08实测图  
(1·SK-01、2·SK-02、3·SK-03、4·SK-04、5·SK-05、6·SK-08)

色上が堆積した後、暗茶褐色土が堆積した。

遺物が出土しなかったため、時期は不明である。

### c 土 壌

#### SK01 (第9図1)

標高22.00m～23.00m付近の丘陵斜面のやや下方で検出した、平面が隅丸長方形、断面はゆるいU～V字状の土壌である。規模は長さが4.16m、幅は0.7～0.9mを計り、深さは0.2mである。埋土は茶褐色土であり、一部に淡黄褐色土が堆積している。

遺物が出土しなかったため、時期は不明である。

#### SK02 (第9図2)

標高26.00m付近の丘陵のほぼ稜線上で検出した、平面が長方形の土壌である。一部攪乱を受けているので、検出面での長さが現存で1.33m、幅は0.82m、底面の長さが1.13m、幅は0.65mを計り、深さは0.28mである。埋土は下層に淡茶褐色土、上層に茶褐色土が堆積している。

遺物が出土しなかったため、時期は不明である。

#### SK03 (第9図3)

標高21.00m付近の丘陵稜線の方向が変わる部分で検出した、平面が隅丸長方形の土壌である。検出面の長さが3.05m、幅は1.1mを計り、深さは0.19mである。埋土は淡赤黄褐色土が中心で、一部に淡茶褐色土や濁赤褐色土が堆積している。

遺物が出土しなかったため、時期は不明である。

#### SK04 (第9図4)

標高18.00m付近の丘陵稜線の付近で検出した、平面が長楕円形、断面が船底状の土壌である。検出面の長さが2.78m、幅は1.2mを計り、深さは0.3mである。埋土は淡灰茶褐色土が堆積している。

遺物が出土しなかったため、時期は不明である。

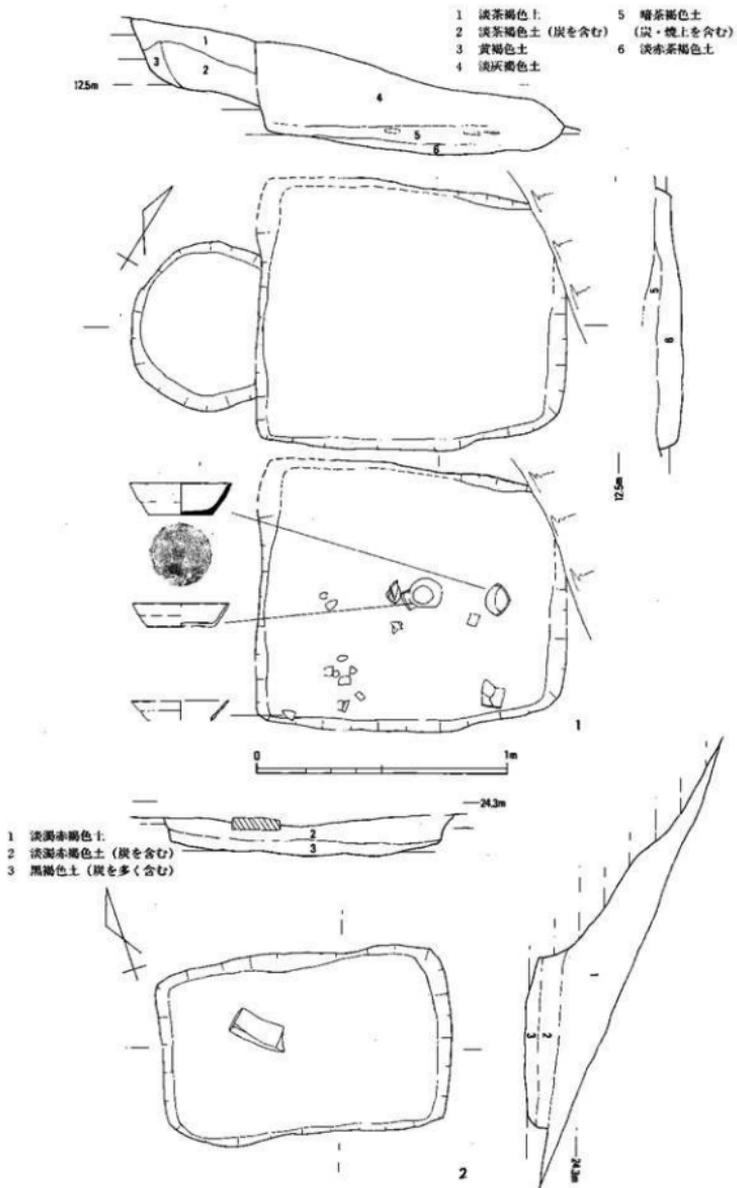
#### SK05 (第9図5)

標高15.00m～15.50m付近の丘陵斜面の下方で検出した土壌である。平面は楕円形の一边が突出したような形である。検出面の長径が2.78m、短径は2mを計り、深さは0.15～0.3mである。埋土は風化礫を若干含むもの(2・4・5)と含まないものに大別される。

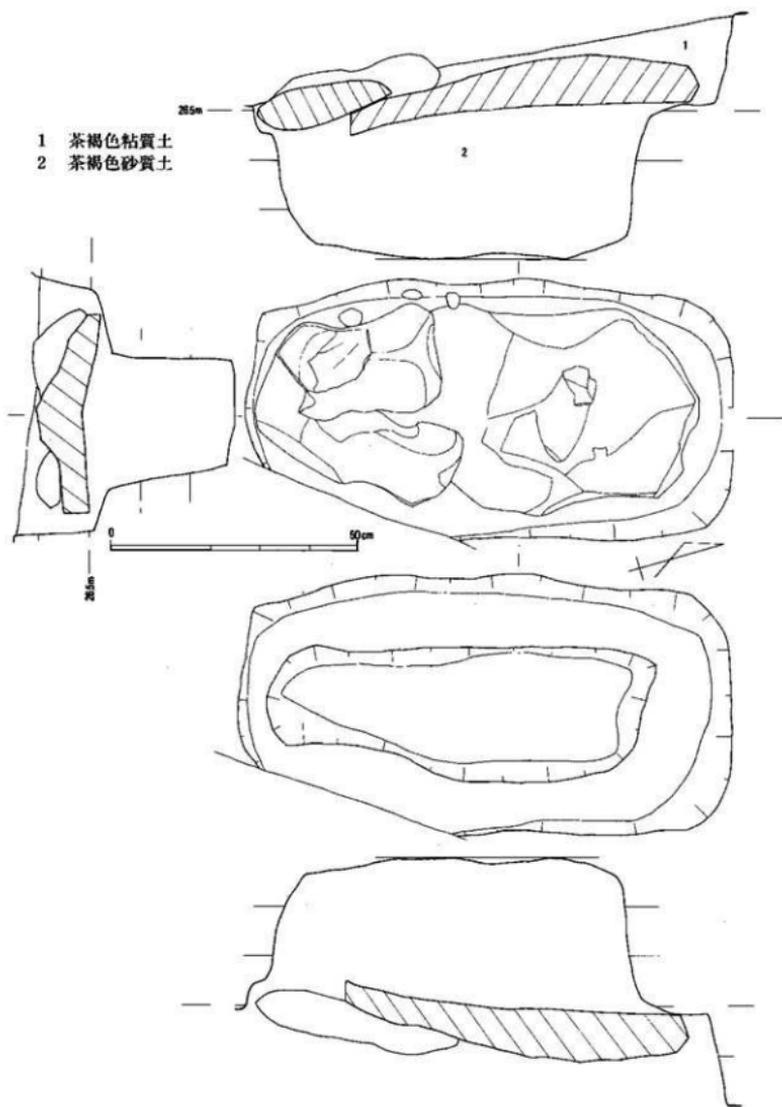
遺物が出土しなかったため、時期は不明である。

#### SK06 (第13図2)

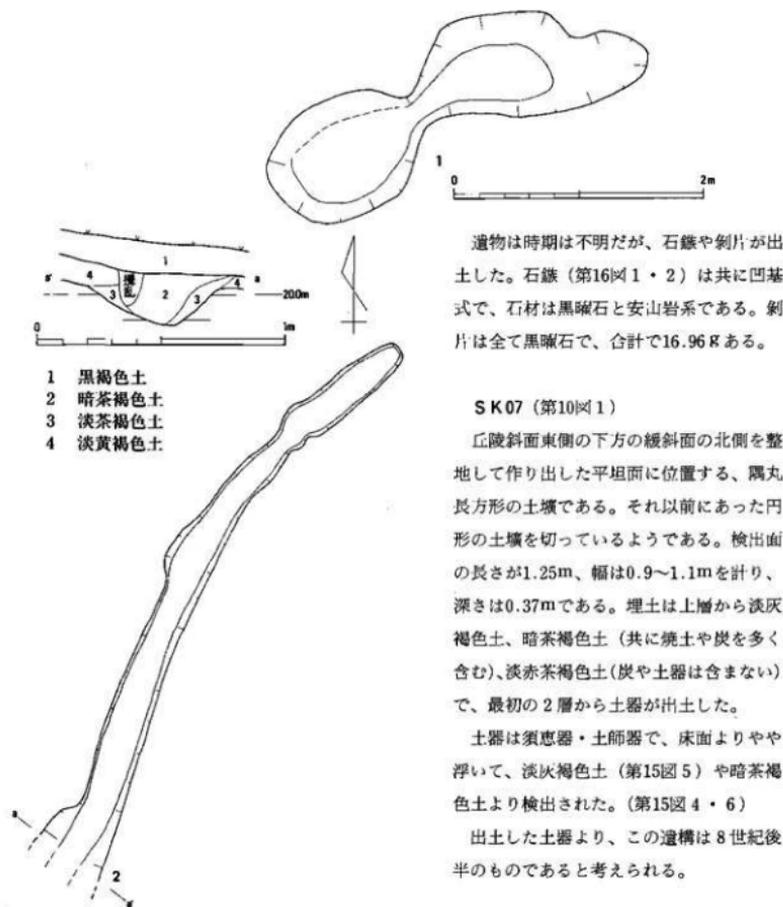
標高15.00m～15.50m付近の丘陵稜線のやや下ったところで検出した、不整形の土壌の一端に楕円形のビットが伴う。検出面の長さが長辺が2.08m、短辺は1.3mを計り、ビットの規模は径が0.58～0.74m、深さが0.81mである。埋土は2層あり、赤褐色土に淡黄褐色土が堆積したような様相を呈す。



第10図 SK-07、SX-02実測図 (1: SK-07、2: SX-02)



第11圖 SX-01実測図



第12図 S X-03、S D-02実測図  
(1 : S X-03、2 : S D-02)

した、長楕円形の土壌である。検出面の長さが1.26m、幅は0.52mを計り、深さは0.1mである。埋土は淡赤黄褐色土である。

遺物が出土しなかったため、時期は不明である。

#### d 墓塚・その他

##### S X01 (第11図)

丘陵稜線付近で検出した、石蓋土壌である。3個の石を用いており、一番大きい石を最初に置き、

遺物は時期は不明だが、石鏃や剣片が出土した。石鏃(第16図1・2)は共に凹基式で、石材は黒曜石と安山岩系である。剣片は全て黒曜石で、合計で16.96gある。

##### SK07 (第10図1)

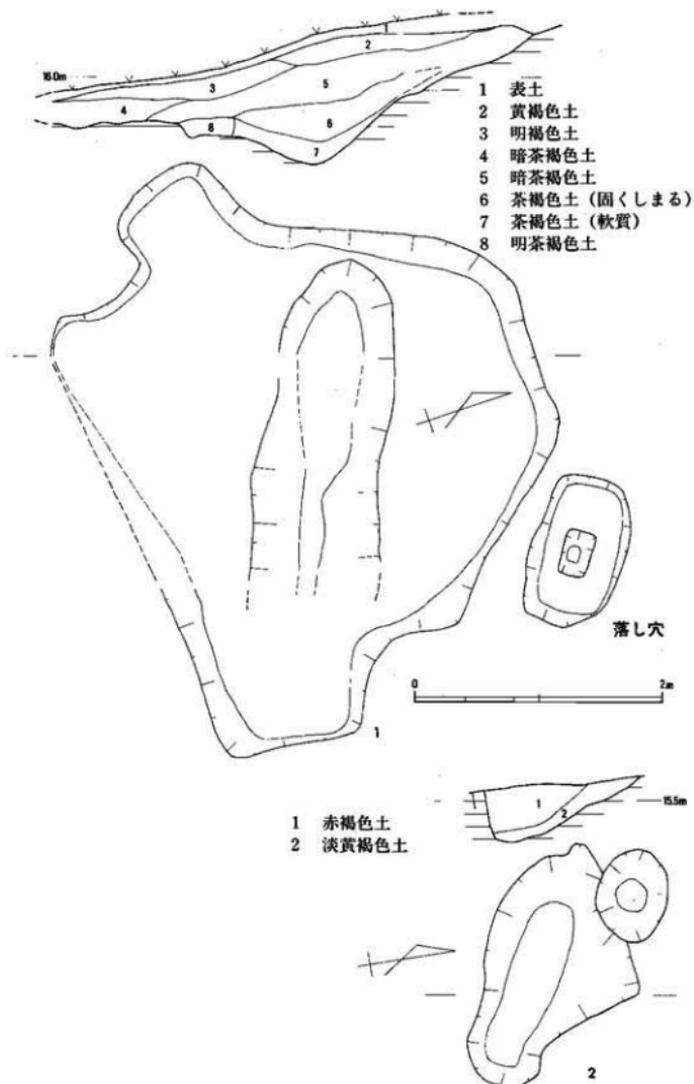
丘陵斜面東側の下方の緩斜面の北側を整地して作り出した平坦面に位置する、隅丸長方形の土壌である。それ以前にあった円形の土壌を切っているようである。検出面の長さが1.25m、幅は0.9~1.1mを計り、深さは0.37mである。埋土は上層から淡灰褐色土、暗茶褐色土(共に焼土や炭を多く含む)、淡赤茶褐色土(炭や土器は含まない)で、最初の2層から土器が出土した。

土器は須恵器・土師器で、床面よりやや浮いて、淡灰褐色土(第15図5)や暗茶褐色土より検出された。(第15図4・6)

出土した土器より、この遺構は8世紀後半のものであると考えられる。

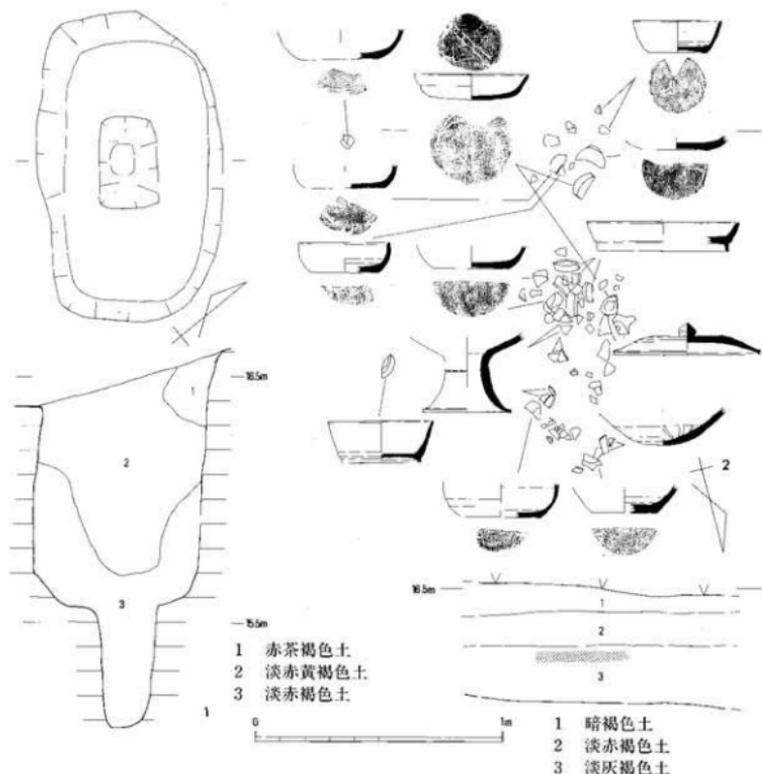
##### SK08 (第9図6)

標高16.50m付近の丘陵稜線付近で検出



第13図 SX-04、SK-06実測図 (1 : SX-04、2 : SK-06)

隙間を2個の石で覆うように石を置いている。石材は凝灰岩系で、どの石も地面に接していた面はほぼ平らである。土壌の検出面の長さが0.97m、幅は0.52mを計り、土壌の内法の長さは0.71m、幅は北側が0.25m、南側が0.2mを計り、内法の底面は長さ0.68m、幅は北側が0.21m、南側が0.1mを計



第14図 落とし穴、土器溜実測図（1. 落とし穴、2. 土器溜）

る。深さは約0.5mである。石の下には茶褐色土が堆積していた。

このS X 01の南東側には島田池5号墳（円墳）が存在しており、位置的には周溝の外側に当たるので、この石蓋土壇は古墳に伴う可能性があり、もしそうならばこの遺構は古墳時代前半代（4～5世紀）の時期が与えられ、北側に頭があったと思われる。

#### S X 02（第10例2）

標高23.50m付近の丘陵斜面の途中で検出した。検出面の規模は長さが1.17m、幅は0.71m、深さは0.13mで、底面の規模は長さが1.07m、幅は0.68mである。埋土は淡濁赤褐色土、暗褐色土で、共に炭や焼けた土を多く含み、底面にも一部焼けた部分が存在した。また、上面からは標石と思われる石を検出した。

遺物は伴わなかったので、時期の特定は出来なかったが、放射性炭素を用いた理科学的年代測定（後述）から、江戸時代前半代の可能性がある。

#### S X 03 (第12図1)

標高22.00m付近の丘陵稜線上、S D02の南側で検出した、平面形が瓢形の遺構である。検出面の規模は長さが4.8m、幅は狭い部分で0.42m、広い部分で1.55mを計り、深さは上面が削平されたのか0.13mと浅い。埋土は茶褐色土である。

黒曜石の剥片が出土したが、土器を伴わないので時期や性格は不明である。あるいはS D02と関連があるのかもしれない。

#### S X 04 (第13図1)

標高15.50m～16.50m付近の丘陵斜面の上位で検出した、不整形の遺構である。一部二段になっている。検出面の規模は長さが4.9m、幅は3.9mを計り、二段目の部分は長さが2.7m、幅は1.0mを計る。深さは最も深い部分で1.1mである。埋土は二段になっている部分は茶褐色土が堆積している。

遺物が出土しなかったので、時期や性格は不明である。

#### e 落とし穴 (第14図)

丘陵稜線付近で検出した、隅丸長方形の落とし穴である。検出面の長さが1.26m、幅は0.76mを計り、更に底には長さが0.37m、幅は0.24mの掘り込みがある。掘り込みの底までの深さは1.67mである。埋土は掘り込みの部分を中心に淡赤褐色土が、その上位に淡赤黄褐色土が堆積している。

遺物を伴わなかったが形態から考えて、縄紋時代の落とし穴であると考えられる。

#### f 土器溜 (第14図)

標高16.50m付近の丘陵頂部から若干下った地点で、淡灰褐色土中の上方から土器が密集して出土した。周囲に遺構は無く、上の方から流れてきた様子も見受けられない。

遺物は全て須恵器である(第15図7～27)。完形になるものは少なく、一部～半分程度を欠損しているものが殆どであり、上方からの流れ込みを完全に否定出来る根拠は薄い。

## 2 遺 物

岸尾遺跡からはコンテナ 6 箱分の遺物が出上した。遺物は須恵器、土師器の他、石鏃や黒曜石の剥片がある。遺構に伴う遺物は少なかった。

**S B01柱穴 5 出土遺物** (第15図 1) 高台が付く須恵器の杯である。直線的に体部が伸び、口縁に近い所と高台に近いところにロクロ整形時の稜を持つ。口縁部先端は先細りでやや尖り気味に丸くおさめる。

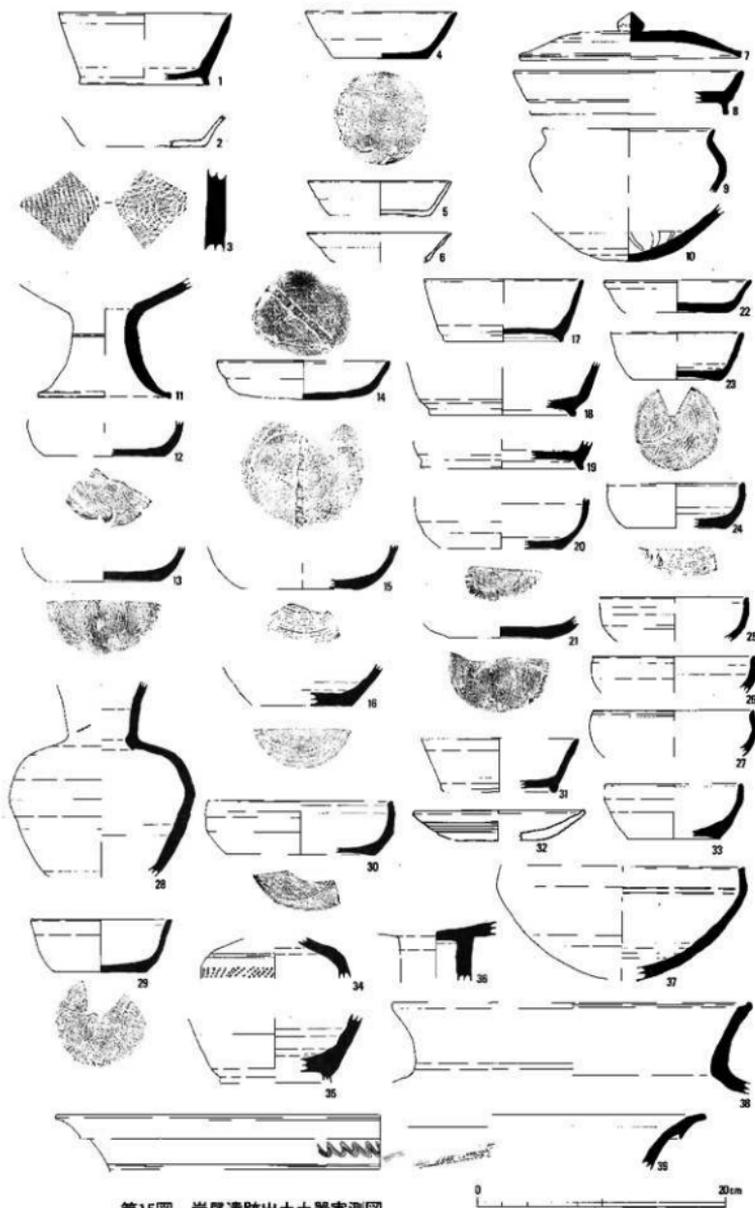
**S H01出土遺物** (第15図 2・3) 2 は土師器の杯である。摩滅しているため調整は不明で、糸切りの有無は不明である。全体に薄手である。3 は須恵器の甕片である。

**S K06出土遺物** (第16図 1・2) 石鏃が 2 点が出上した。石鏃は共に凹基式である。1 は安山岩系の石材を用いており、長さ 2.9cm、幅 1.8cm、厚さ 3mm、重さ 1.05g である。先端を若干欠き、薄手である。2 は黒曜石製で、長さ 1.8cm、幅 1.6cm、厚さ 3mm、重さ 0.54g である。先端と基部の一片を欠く。他に凶化は行なわなかったが黒曜石の剥片が出上した。剥片の総重量は 16.96g である。

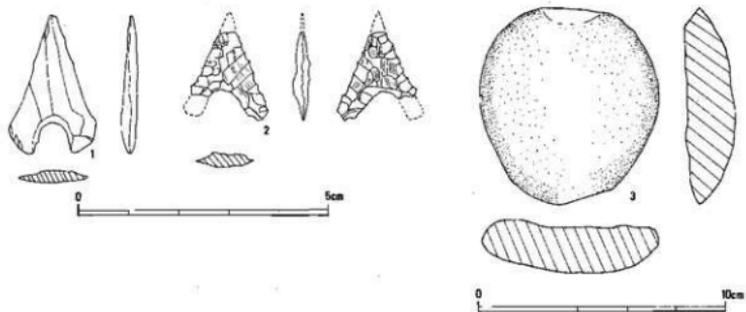
**S K07出土遺物** (第15図 4～6) 須恵器・土師器が出上した。須恵器の 4 は坏で、直線的に口縁部が伸び、その中程にロクロ整形時の稜を持つ。土師器の 5・6 は共に坏で、ほぼ同様の形態である。全体に薄手で直線的に口縁部が伸び、その中程に稜を持つ。他に土師器の甕が遺構の全体から出土したが、復元は出来なかった。1 個体以上あったと考えられる。

**土器溜出土遺物** (第15図 7～27) 実測可能な個体は全て実測を行なった。全て須恵器である。蓋 1 点、高坏 1 点、鉢 1 点、皿 1 点、盤 1 点の他は、全て坏で 15 点出土した。蓋 7 は宝珠つまみを持ち、端部にはわずかに面を持つ。盤 8 は高台を持ち、体部は直線的に伸び、口縁部端部は丸く収める。坏部内面は平らである。鉢 9 は口径が前後する可能性があるが、膨らんだ体部から短く外反する口縁部へ続く。高坏 11 は坏部を欠くが、坏部と脚部との境にヘラ描沈線を一条施す。皿 14 は平底で、体部中程が若干屈曲する。口縁部端部は丸く収める。坏部内面に「井」字形のヘラによると思われる記号を持つ。坏には高台を持つものと持たないものがある。数は後者が多い。前者の 16 は体部が直線的に伸びるが、17 は若干体部が丸みを帯びる。後者には口縁部へ丸みを持って移行する 12・24～27 と身からやや直線的に口縁部へ至る 13・15・22・23 の 2 者がみられる。糸切りの痕はそのまま、底面が凹面状になるものが多い。26・27 の口縁部端部はわずかに外反し、口縁部直下に凹線状の屈曲を持つ。10 は底部ではないかと考えられるが、どのような器形になるかは不明である。外面にはロクロ整形時の稜を残す。

**遺構に伴わない遺物** (第15図 28～39、第16図 3) 丘陵の表土より出土した遺物がほとんどである。直口甕 28 は球形の体部を持ち、体部外面にはロクロ調整の痕を残す。須恵器の坏には高台を持つ 31 と持たない 29・30・32・33 がある。31 の体部は直線的に伸び、端部はやや尖り気味に収める。32 は体部に 3 条の凹線文風の稜を持ち、口縁部端部は肥厚して上方に立ち上げる。34 は屈曲部に 2 条の凹線状の沈線を持ち、その下の最大径の部分に刺突列点文を施すのではないかと考えられる。35 は高台を持つ須恵器の底部で、鉢になるのかもしれない。36 は須恵器の高坏の坏底部で、11 とは異なり直線的に脚部がつくようである。鉢 37 は鉄鉢形の土器である。口縁部は若干内湾し、底部は若干尖り気味である。口縁部端部には面を持つ。丘陵上の表土の下層から出土した。38・39 は須恵器の大甕である。38



第15图 岸尾遺跡出土土器実測図



第16図 岸尾遺跡出土石器実測図

の口縁部端部は上方に立ち上げる。39は口縁部に段を持ち、その下に波状文を施す。波状文の下には凹線が2条（以上）施されている。他に土師器片が出土したが、図化できるものは見られなかった。また、黒曜石の剥片が、特に標高20.00m以下の北西側斜面から多く出土した。剥片の総重量は128.67gである。

### 3 小 結

岸尾遺跡の発掘調査によって明らかになった点は以下の通りである。

1. 落し穴は、土器を伴ってはいないが、その形態から縄紋時代の落し穴ではないかと考えられる。  
SK06も同様に縄紋時代に属するのではないかと考えられる。黒曜石の剥片が今回の調査では合計145.63g出土し、試験調査で出土したものと合わせて、岸尾遺跡全体では合計173.6g出土した。東出雲町では黒曜石製の石器（スクレイパー）が長廻古墳群<sup>①</sup>（トレンチ調査）や受馬遺跡<sup>②</sup>（包含層？）で出土している。
2. 石蓋土壌であるSX01は、その規模から乳児や幼児を埋葬したのではないかと推測される。  
東出雲町で検出された石蓋土壌は、他に後述する島田遺跡で検出されている。
3. SB01、SH01、SK07、土器溜は8世紀後半の遺構である。この時期の遺構は隣接する島田池遺跡でも検出されており、一続きの居住域であったと考えられる。  
町内におけるこの時期の遺構は、林廻り遺跡SB01<sup>③</sup>で検出されている他、周辺では松江市出雲国府跡<sup>④</sup>、中竹久遺跡Ⅲ区SD07、SK06周辺<sup>⑤</sup>、オノ峠遺跡<sup>⑥</sup>、出雲国分寺跡<sup>⑦</sup>などで遺構・遺物が検出されている。また、安来市高広遺跡の報告における編年<sup>⑧</sup>と比較すると、1や16のように高台を持つ坏の高台は底面外周部にあり、体部が直線的に伸びている。坏には口縁が内傾するものや体部が丸みを帯び、底部は糸切り未調整のものがほとんどであることから、高広ⅣA期に相当すると思われるが、1点しか出土していないが、蓋には宝珠つまみを持ち、口縁部端部は屈曲して面を持つ、という特徴は高広ⅣB期に相当すると考えられるので、岸尾遺跡のこの時期の遺構は、高広ⅣA～B期に相当すると考えたい。  
土器溜の資料が、高広ⅣA～B期という幅を持つ資料なのか、それともⅣA～B期の間を埋める資料となるのかについては、今後の資料の増加を待って検討したい。
4. SX02は、土器を伴ったわけではないが、炭素14による年代では江戸時代に属する可能性が出ており、江戸時代前半期の遺構と考えたい。

#### 注

- ①勝瀬利栄・原田敏昭ほか 1993「7 長廻古墳群」『一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区Ⅰ』建設省松江国道事務所・島根県教育委員会 pp.36-37
- ②上同 1994「5 受馬遺跡」『一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区Ⅱ 中山遺跡 巻林遺跡』建設省松江国道事務所・島根県教育委員会 pp.73~78
- ③上同 「6 林廻り遺跡」上同 pp.79~84
- ④町田章編 1970『出雲国庁跡発掘調査概報』松江市教育委員会
- ⑤広江耕史・内田律雄ほか「Ⅳ中竹久遺跡」島根県教育委員会編 1983『国道9号線バイパス予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』建設省松江国道事務所・島根県教育委員会
- ⑥内田律雄「Vオノ峠遺跡」上同
- ⑦飯塚康行・遠藤正樹 1995『出雲国分寺跡発掘調査報告書』『松江市文化財調査報告』第61集 松江市教育委員会・（財）松江市教育文化振興事業所
- ⑧足立克己・丹羽野裕編 1984『高広遺跡発掘調査報告書』島根県教育委員会 pp.230~235

器種	挿図番号	図版番号	法 量	調 整	胎 土	色 割	残存率	備 考
須恵器 杯	第15図1	図版12 - 1	口径：13.9cm 器高：5.9cm	強いヨコナデ	きめ細かい	暗褐色	約20%	高台を持つ
土師器 杯	2	- 2	現高：2.4cm	摩滅して不明	きめ細かい	淡赤褐色	約30%	
須恵器 壺	3	図版15 - 3		タタキ/当て 具痕	きめ細かい	暗灰色		
須恵器 杯	4	図版12 - 4	口径：12.1cm 器高：3.9cm	強いヨコマデ	細かい	灰褐色	約70%	
土師器 杯	5	- 5	口径：11.6cm 器高：2.9cm	摩滅して不明	きめ細かい	黄褐色	約90%	
土師器 杯	6	- 6	口径：11.6cm 現高：2.4cm	摩滅して不明	細かい	淡赤褐色	約20%	
須恵器 蓋	7	- 7	蓋径：18.0cm 器高：3.8cm	回転ヘラケズ リ/ヨコナデ	細かい	暗紫灰色	約45%	宝珠ツマミを持つ
須恵器 壺	8	- 8	口径：18.3cm 器高：3.6cm	ヨコナデ	きめ細かく、 軟質	暗赤褐色	約60%	高台を持つ
須恵器 鉢	9	図版15 - 9	口径：13.8cm 現高：5.3cm	ヨコナデ	きめ細かい	暗灰色	10%未満	
須恵器 底部?	10	図版12 - 10	現高：4.5cm	回転ヘラケズ リ/ヨコナデ	きめ細かく、 軟質	淡赤褐色	約20%	
須恵器 高 杯	11	- 11	底径：10.6cm 現高：9.8cm	内面：ヨコナ デ	きめ細かい	暗灰褐色	約60%	脚部にヘラ描沈線 1条
須恵器 杯	12	- 12	底径：9.6cm 現高：2.9cm	ヨコナデ	きめ細かい	灰褐色	約20%	
須恵器 杯	13	- 13	底径：9.2cm 現高：2.8cm	ヨコナデ	きめ細かい	淡灰色	約55%	
須恵器 皿	14	図版13 - 14	口径：13.8cm 器高：3.2cm	ヨコナデ	きめ細かい	淡灰褐色	約80%	杯内面に「井」字 状の記号
須恵器 杯	15	- 15	底径：9.6cm 現高：3.6cm	ヨコナデ	きめ細かい	淡灰色	約20%	
須恵器 底 部	16	- 16	底径：8.0cm 現高：3.5cm	ナデか?	細かい	淡灰色	約20cm	底器内面が若干凹 む
須恵器 杯	17	- 17	口径：11.6cm 器高：5.1cm	ヨコナデ	細かい	淡灰色	約80%	高台を持つ
須恵器 杯	18	- 18	底径：11.6cm 現高：4.3cm	ヨコナデ	細かい	淡灰黄褐 色	約20%	高台を持つ
須恵器 杯	19	- 19	底径：13.2cm 現高：2.4cm	ヨコナデ	きめ細かい	淡灰色	約20%	高台を持つ
須恵器 杯	20	- 20	底径：9.8cm 現高：4.1cm	ヨコナデ	きめ細かい	淡灰褐色	約20%	

器種	挿図番号	図版番号	法 量	調 整	胎 土	色 調	残存率	備 考
須恵器 杯	第15図21	図版13 -21	口径：8.4cm 現高：1.6cm	ナデ?	細かい	淡灰褐色	約55%	
須恵器 杯	22	-22	口径：11.7cm 器高：2.7cm	ヨコナデ	細かい	淡灰褐色	約20%	
須恵器 杯	23	-23	口径：10.5cm 器高：3.9cm	ヨコナデ	細かい	淡灰褐色	約40%	
須恵器 杯	24	-24	口径：11.0cm 器高：3.7cm	ヨコナデ	きめ細かい	淡 灰 色	約25%	
須恵器 杯	25	図版15 -25	口径：11.8cm 現高：3.6cm	ヨコナデ	きめ細かい	暗 灰 色	約20%	
須恵器 杯	26	-26	口径：13.8cm 現高：3.0cm	ヨコナデ	きめ細かい	暗 灰 色	約20%	口縁部直下が沈線状に凹む
須恵器 杯	27	-27	口径：12.9cm 現高：3.8cm	ヨコナデ	きめ細かい	淡 灰 色	約15%	口縁部直下が沈線状に凹む
須恵器 直口甕	28	-28	口径：15.0cm 現高：10.4cm	回転ヘラケズリ/ヨコナデ	きめ細かい	濁灰褐色	約30%	頸部にヘラの痕
須恵器 杯	29	図版14 -29	口径：11.2cm 器高：4.3cm	ヨコナデ	細かい	淡灰白色	約30%	
須恵器 杯	30	-30	口径：14.6cm 器高：4.4cm	ヨコナデ	きめ細かい	淡灰褐色	約20%	
須恵器 杯	31	-31	口径：12.8cm 器高：4.4cm	ヨコナデ	きめ細かい	淡灰褐色	約20%	高台を持つ
須恵器 瓜	32	-32	口径：13.2cm 器高：2.5cm	ナデ?	きめ細かく、軟質	灰茶褐色	約20%	坏部に4条の凹線文風の文様
須恵器 杯	33	-33	口径：11.0cm 器高：4.5cm	ヨコナデ	きめ細かい	暗 褐 色	約20%	
須恵器 ハソウ	34	-34	口径：12.0cm 現高：3.3cm	ヨコナデ	きめ細かい	淡 灰 色	約30%	屈曲部に2条の凹線文・刺突列点文
須恵器 底 部	35	35	口径：9.0cm 現高：5.3cm	回転ヘラケズリ/ヨコナデ	細かい	暗灰褐色	約15%	高台を持つ
須恵器 高 杯	36	図版16 -36	口径：6.0cm 現高：4.8cm	ヨコナデ	きめ細かい	暗灰褐色	約50%	
須恵器 鉢	37	図版14 -37	口径：19.6cm 現高：9.3cm	ヨコナデ	きめ細かい	淡灰褐色	約70%	底部付近はナデが余り施されない。
須恵器 甕	38	図版16 38	口径：28.8cm 現高：7.5cm	タタキ・ナデ/ヨコナデ	きめ細かい	暗灰褐色	10%未満	口縁端部内面にアタセント
須恵器 甕	39	図版15 -39	口径：52.0cm 現高：4.6cm	ヨコナデ/ハケメ	きめ細かい	暗 灰 色	10%未満	波状文の下に2条以上の凹線文

### 放射性炭素年代測定について

岸尾遺跡より出土した炭化物の年代測定を学習院大学年代測定室に依頼し、以下の結果を得た。

Code-No.	試料	年代 (1950年よりの年数)
Gak-19068	岸尾遺跡 SX02 第3層内	270±80 (A.D.1680)
Gak-19069	S K07 埋土	1710±80 (A.D.240)

年代値の算出には<sup>14</sup>Cの半減期としてLIBBYも半減期5570年を使用しています。また、付記した誤差はβ線の計数値の標準偏差σにもとづいて算出した年数で、標準偏差(ONE SIGMA)に相当する年代です。また、試料のβ線計数率と自然計数率の差が2σ以下のときは、3σに相当する年代を下限の年代値(B. P.)として表示してあります。また試料のβ線計数率と現在の標準炭素(MODERN STANDARD CARBON)についての計数率との差が2σ以下のときは、Modernと表示し、<sup>14</sup>C%を付記してあります。

#### <年代測定結果について>

岸尾遺跡SX02については、他に年代を特定する遺物が出土しなかったため、遺構の年代についてはこの測定結果に依拠せざるをえない。一方、SK07については、出土した遺物から遺構の時期が8世紀後半と考えられるのに対して、測定結果では3世紀中葉を前後する時期が出ている。

この節は、学習院大学年代測定室の測定結果報告書にもとづいて中川寧が記述した。

## 第IV章 島田遺跡

### 1 トレンチ調査の概要と調査区の設定

**島田遺跡の位置** 島田遺跡は東出雲町出雲郷から西掛屋にかけての標高約30mの東西に延びる尾根とその南北斜面からなる。島田遺跡の位置する尾根は、西に意宇平野を見おろす岸尾遺跡付近から始まり、30穴以上の横穴墓を検出した島田池遺跡を経て島田遺跡に続く。尾根の東端は、かつて前期古墳として有名な寺床1号墳などが存在した丘陵で、その付近で尾根が途切れる。島田遺跡の北側は掛屋の集落から中海が望め、南側は山塊が続く。

調査区は尾根を斜めに南東から北西方向に延びている。西側で調査区をはずれる尾根は、その辺りで一旦北向きに曲がるため島田池遺跡で再び調査区内に続く。島田池遺跡では尾根の両側に横穴墓群が並んでいるが、島田遺跡に入ると横穴墓群は極端にその数を減らす。島田池遺跡から続く横穴墓群は北斜面西側の調査区外約20m程の所に最後の1穴が見られ、島田遺跡に入ると見られなくなる。南斜面では、東出雲郷付近で1穴が開いている他、調査区内外に点々と分布しているようである。**トレンチ調査の概要** 島田遺跡は、八東郡東出雲町出雲郷から西掛屋にかけての標高約30mの丘陵上とその南北斜面に位置する。平成5年度にトレンチ調査を行い、尾根上に9本、南斜面に4本のトレンチを設定し、遺構・遺物を検出した。

この内、南斜面に設定した2本のトレンチは、トレンチ調査時に、長廻遺跡と呼んでいた地区に含まれる。島田遺跡の南東側は東出雲町西掛屋字長廻にあたり、更に南東の水田部分も含め、長廻遺跡としてトレンチ調査を行った。この結果、斜面部分からは遺構・遺物を検出したが、水田部分からは遺構が検出されなかった。水田部では、少量の遺物を検出しているが、出土状況より上方からの流れ込みと判断され、全歪調査範囲から外す事とした。こうした経緯から、長廻遺跡の調査範囲は極端に小さくなり、また、直上の島田遺跡とは、遺跡の性格上不可分と考えられる事から島田遺跡を含めて調査を行う事とした。トレンチ配置図(第17図)でN1・2としたトレンチは、長廻遺跡として調査を行ったトレンチである。

長廻遺跡と呼んでいた南斜面東側には、2本のトレンチを設定し、この内、N1トレンチで、人為的な平坦面を検出した。この平坦面付近の土層堆積状況は、炭化物を含む層と含まない層が交互に見られ、人為的な埋め戻しが予想されたが、調査範囲の制約から遺構の性格はつかめなかった。この平坦面は平成7年度の全面調査により、第3号横穴墓の前庭部であった事が判明し、N1トレンチで出土した須恵器が第3号横穴墓に伴うものと想像された。下方のN2トレンチからは遺構は検出出来なかったが須恵器片が出土している。

丘陵頂部には9本のトレンチを設定し、土壌2・ピット多数を検出している。この内、5トレンチでは木棺墓と思われる長さ2.2mの長方形の土壌を検出しているが、遺物は伴っていない。また、12トレンチでは石蓋土壌と思われる遺構を検出したが、これも遺物を伴わなかった。4・5・12トレンチを設定した周囲は、島田遺跡の最高所に当たるところで、古墳が存在する可能性が考えられたが、検出されなかった。特に、4トレンチを設定した場所は、非常に緩やかな斜面であったが、ほぼ均質な橙色の土が非常に厚く堆積しており、人為的な上の移動が想像された。



第17図 島田遺跡（調査前）地形測量図・トレンチ配置図（1：800）

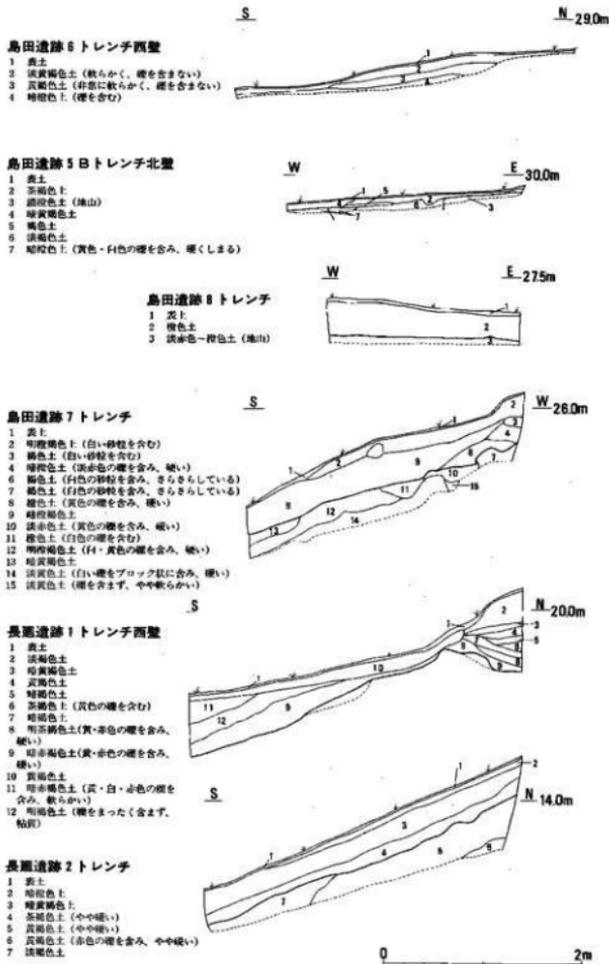
尾根上の6トレンチからは、土人形、陶磁器片、瓦片等が出土しており、トレンチ調査時には遺構に伴う可能性も想定したが、全面調査時には、同様に陶磁器・貝殻などが置かれた場所が点々と見られ、近現代に所有地の境界などに目印としてまかれたものであろうと想像される。

トレンチは設定しなかったが、調査区西端には明瞭なマウンドが見られ、古墳と考えられた。

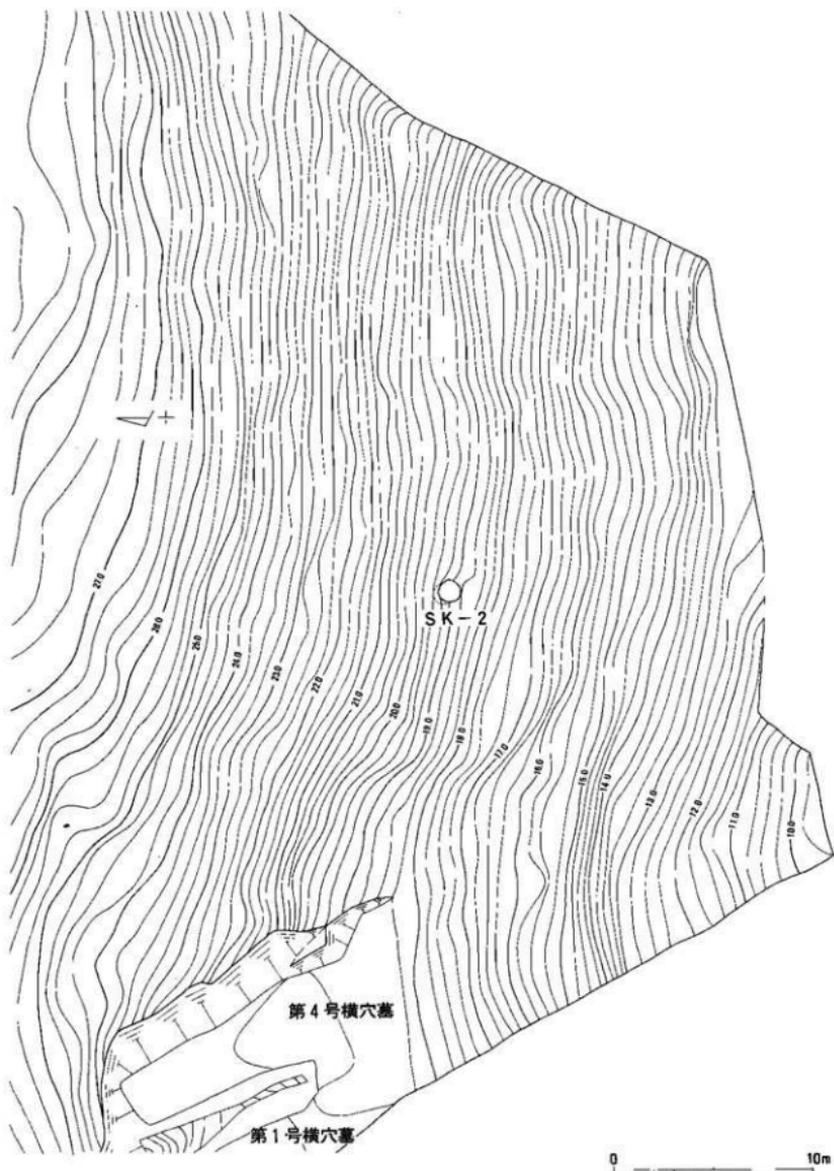
6トレンチは、尾根上の二つのピークの間にあたるやや平坦な位置に設定したが、比較

的浅い埋土に覆われ、多数のピットを検出した。ピット群には遺物は伴っていない。

5トレンチは標高約30mの島田遺跡最高所から尾根上を西へ延びる緩やかな斜面に設定したが、トレンチ南端で遺構を確認し、セクションベルトを残して南側に拡張した。検出された遺構は木棺墓と考えられる土壌で、長さ約2.2m、幅約1.2mを測るほぼ長方形を呈するものである。地山面で検出され、遺物は伴わなかった。同様にピークの東側に設定した12トレンチでは、石蓋土壌と考えられるも



第18図 島田遺跡土層断面図 (1:50)



第19図 島田遺跡Ⅰ区遺構配置図 (1:250)

のを検出しており、このピーク周辺が墳墓群であった可能性が考えられた。

8 トレンチを設定したピークの南側には、緩やかな斜面が広がっていたが、少量の陶磁器片を除き遺構・遺物は検出できなかった。前述の様に橙色土が多量に堆積しており、その状況から自然堆積とは思えない。尾根の東側の埋土が極端に浅かった事と考え合わせ、人為的な土の移動が行われたものと判断される。

7 トレンチは南側の斜面に設定し、須恵器壺を検出した。暗橙褐色土が厚く堆積しているのは、上方の8 トレンチで見られた橙色土と同様のものと判断されるが、その下層に明らかに人為的な土盛りと考えられる土が見られる。後の全面調査時には箱式石棺であるSK-8を検出しており、SK-8を主体部とする古墳の残丘であったと考えられる。

N1 トレンチは、結果として第3号横穴墓の前庭部を検出しており、横穴墓の埋め戻し痕跡を確認した。

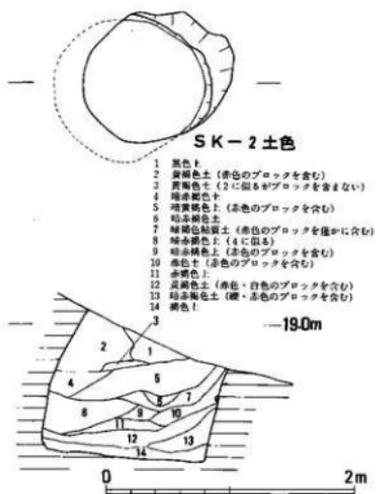
N2 トレンチは南斜面下方に設定したもののだが、基本的には、北側斜面でもほぼ同様の堆積状況で、表土下に黄～橙色の粘土質の土が堆積し、地山は明赤褐色の花崗岩風化土か、褐色の粘質土になる。北側斜面ではほぼ全面が褐色粘質土の地山となり横穴墓は見られないが、南側斜面では両者の土がほぼ交互に見られ、花崗岩風化土の場所には横穴墓が造営されているようである。

**調査区の設定** トレンチ調査の結果や隣接する島田池遺跡の状況から島田遺跡の丘陵にもほぼ全面に遺構が広がる事が予想されたほか、北斜面に横穴墓が続くとの予想があったため、工事予定地のほぼ全面を調査区として、便宜的に南斜面西側をI区、東側のトレンチ調査時に長廻遺跡と呼んでいた範囲をII区、尾根上をIII区、北斜面を東側からIV区・V区と呼んだ。また、III区については、ほぼ全面に遺構が広がったため、更に東部・中部・西部に分けた。

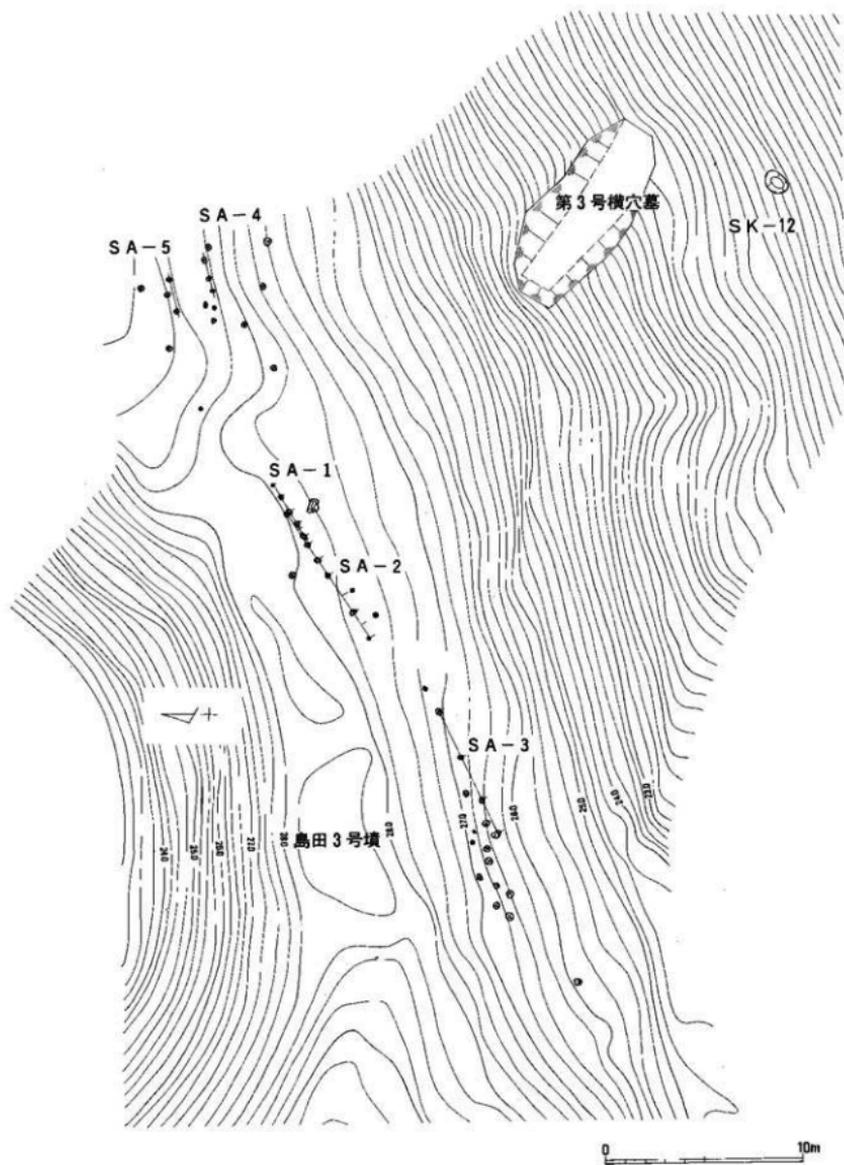
**各調査区の概要** I区は全面的に発掘したが、斜面中央で土壇(SK-2)1基を検出したに留まった。また、調査区西側で黒色土の堆積する落ち込みが見られ、埴輪片や、須恵器器台の破片が出土したため、古墳時代中期の遺構があるものと考え掘削した。結果的には、埴輪片等は上方からの流れ込みで、横穴墓2基を検出する事になる。横穴墓であると言う認識が遅れた原因は、全長10mを越える長大な前庭部に当たったためで、羨道を検出するまで横穴墓である事が信じられなかった。

II区では横穴墓1基を検出したほか、用途不明の土壇(SK-12)1基を検出した。SK-12は斜面中程に単独で存在し遺物も伴わなかった。

III区は、多数のピット・土壇のほか、古墳3基以上を検出した。しかしながら、古墳に伴う



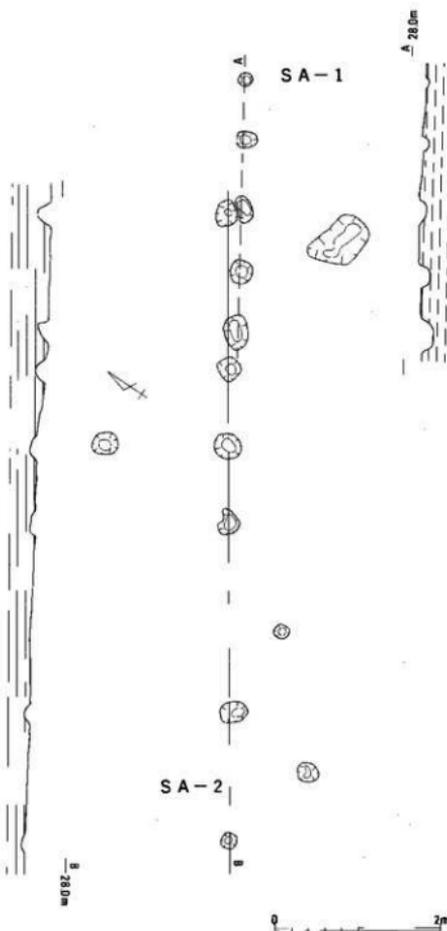
第20図 SK-2平面図・土層断面図(1:40)



第21図 島田遺跡II区・III区東部遺構配置図 (1 : 250)

ものの以外の遺物はきわめて少なく、時期・性格を特定できる遺構は少ない。IV・V区は尾根上の古墳から落ちてきたと考えられる少量の須恵器片を採集した以外、遺構・遺物を検出しなかった。当初は鳥田池遺跡から続く横穴墓群が存在すると考えていたが、鳥田遺跡の北斜面は、横穴墓を掘削するには土質が不適だったようで1穴も見られなかった。

## 2 I区の遺構



第22図 SA-1・2平面図・断面図(1:60)

I区は南に向かう急斜面で、標高約9mから26mまでである。斜面の所々に小さな平坦面があり、尾根に登る古道が何筋かあったようである。検出した遺構は、土壇1基の他、横穴墓2基だが、横穴墓については後述する。

標高19mで検出したSK-2は、検出面でほぼ正円を呈し、山側にわずかにオーバーハングし、平らな床を持つ土壇である。深さ約1m、上面径約1m、底面径約1.4mを測る。埋土はいずれも非常に軟らかく、遺物は伴わなかった。

SK-2は、その形態から近世～近代の座棺を取めた土壇墓とも考えられるが、南側の谷は非常に狭く、人家から離れたところに単独で存在していた可能性が高い。

## 3 II区の遺構

II区では、標高19m付近の調査区中央で土壇(SK-12)・横穴墓の各1基を検出した。横穴墓については後述する。II区は標高約13mから26mまでの南東向き斜面で、I区よりは傾斜が緩い。

SK-12は長径約70cm、短径約40cmの楕円形の土壇で、深さは約60cm

を測る。遺物は検出できなかった。斜面中腹に単独で存在し、第3号横穴墓の前庭部先端からも約5m離れている。埋土は橙色土が中心で、第3号横穴墓埋没以降に掘られたものであろう。

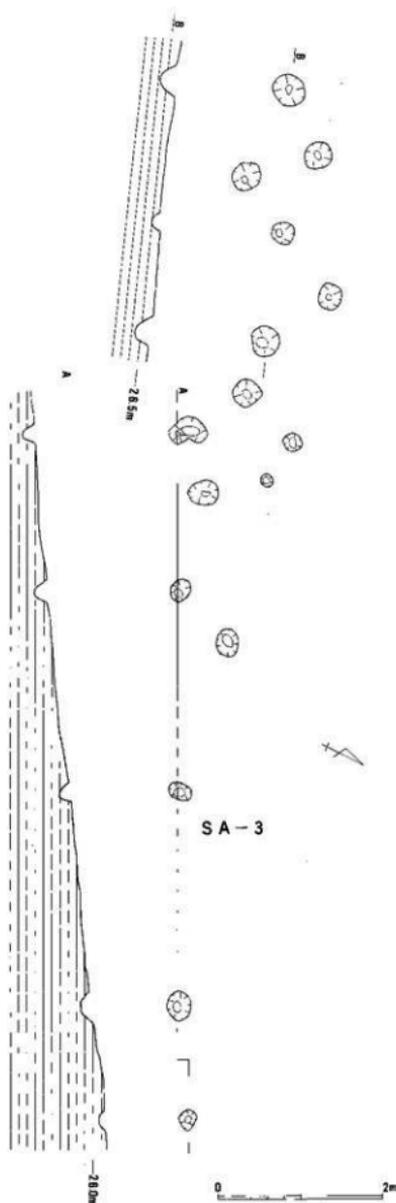
この他には、第3号横穴墓の前庭部の埋土直上に炭窯と思われる痕跡を確認した。炭窯自体は上層断面で確認したもので、直径約80cmの円形を呈すものと思われる。床面はよく焼けており、焼土の厚さは厚いところで10cmにもなる。焼土の上には木炭が残存していた。遺物は伴わず時期は確認できないが、横穴墓埋没後にそれによってできた窪みを利用したものであろう。

II区では、第3号横穴墓前庭部以外からは遺物は出土しなかった。

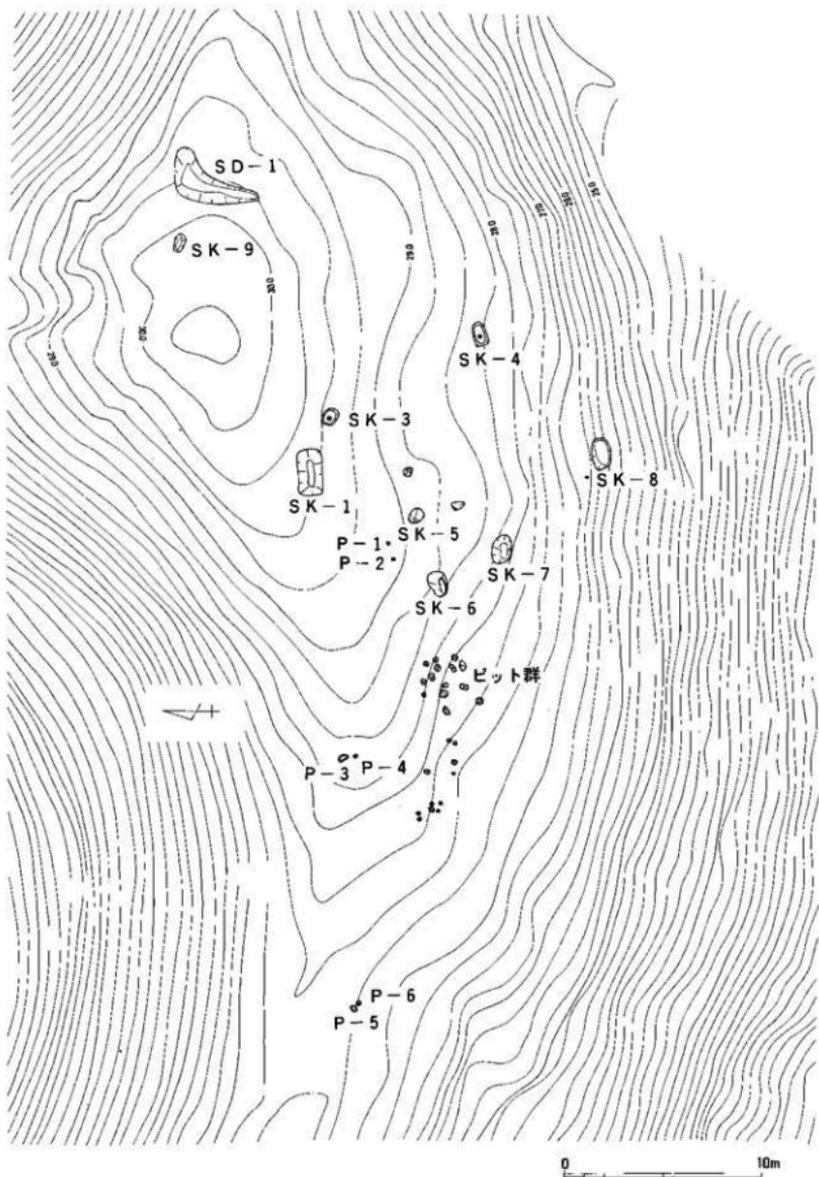
#### 4 III区東部の遺構

III区東部は標高約28mの東西に続く尾根上である。稜線から両側が緩やかな斜面になっており、古墳（島田3号墳）1基のほか、多数のピットを検出した。ピット群は、大きく3つのまとまりに分けられ、東側の一群、中程のピット列、西側の一群がある。

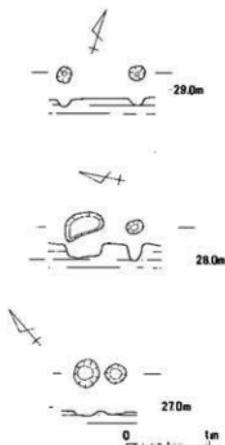
東側のピット群は、標高27～29mで検出し、いずれも直径30cm以下で、深さも10cm程であった。この付近は埋土が浅く、全てのピットを表土直下で検出しており、上面はかなり削平されているものと思われる。SA-4・5として線を引いているものは、互いが平行に位置していることから建物跡の可能性を考えたが、対応するピットは無い。他のピットもまばらに存在しており、対応関係は認められないが、削平による消滅とも考えられるため、建物跡等が存在した可能性がある。遺物はなく、時期は不明であ



第23図 SA-3 付近平面図・断面図（1：60）



第24図 島田遺跡Ⅲ区中部遺構配置図 (1 : 250)



第25図 ビット1～6 平面図・断面図 (1:60)

島田3号墳については後述する。

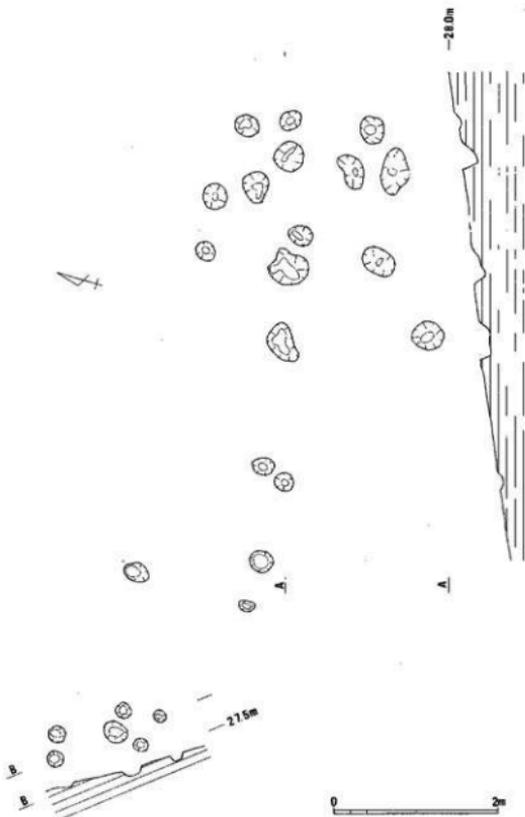
島田3号墳の南側は、やや急斜面になっているが、標高26～27m付近でビットが集中して見られる。この内SA-3は、主軸をSA-1とほぼ等しくし、現状で3間。柱間は、平均で約2.3mと、きわめて広い。SA-1・2と比べ、傾斜がきつく、西側に向かって大きく傾斜しており、建物跡とは思えない。遺物は伴わなかった。

SA-3西側にもビットの集中部分が見られる。このビット群はビットの底部の標高が26.5m付近で共通する事から同一の目的で掘られたものと考えられる。

る。

中程のビット群は尾根をわずかに南に下った標高28m付近で検出した。SA-1・2は一部で重複するものの、明らかに直列しており、現状では櫛列と考えられる。SA-1で柱間約80cm、SA-2で柱間約1mを測る。東側のビット群と同様に表土直下で検出し、いずれも深さは10cm程度ときわめて浅く、深いものでも20cmを超えるものはない。SA-1・2の谷側は、大きく削平が認められる事から、掘立柱建物跡であった可能性もある。SA-1は現状で4間、SA-2は途中何ヶ所かビットを欠くが8間と考えられる。

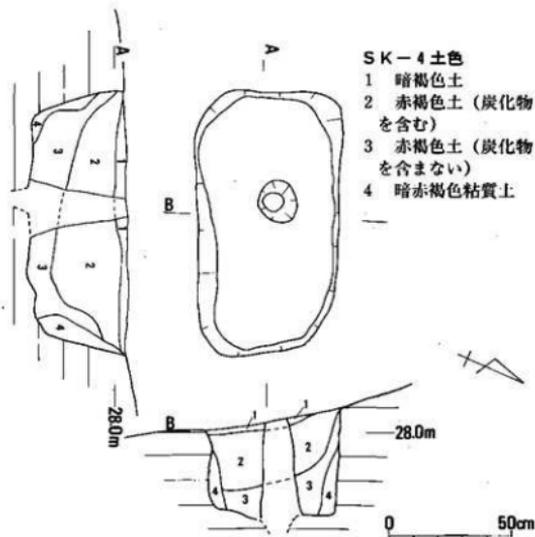
西側では、尾根上の標高28m付近で直径約9mの古墳を確認し、島田3号墳と呼んだ。周溝内から須恵器壺の小片が出土している。



第26図 ビット群平面図・断面図 (1:60)

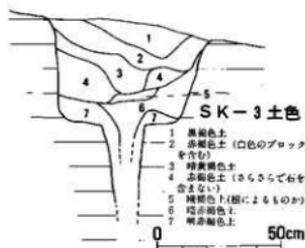
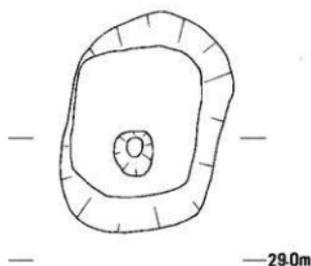
斜面下方側にはピットは残存していないが、ピット列が丸く回っているように見え、堅穴式建物の可能性がある。この付近から遺物は出土していないが、Ⅲ区西部では黒曜石製石鏃等が出土しており、縄紋時代の遺構が存在した可能性もある。

Ⅲ区東部のピットは浅いものがほとんどで、遺物も伴っていない。全てのピットを地山面で検出しているが、暗褐色の埋土が充填した識別の容易なものがほとんどであった。こうした事からⅢ区東部のピット群は、上面をかなり削平され



第27図 SK-4 平面図・土層断面図 (1:20)

ているものと考えられ、ピット自体が深く、更に多くのピットが存在した可能性が伺われる。山城跡等の調査例から尾根上の掘立柱建物は、風圧に耐えるため、非常に深いピットを持つ事が知られており、島田遺跡のものは、掘立柱建物跡とは考えにくい。



第28図 SK-3 平面図・土層断面図 (1:20)

## 5 Ⅲ区中部の遺構

Ⅲ区中部は、島田遺跡の最高所近くで、尾根上では、緩斜面が最も広く広がっている部分である。この部分では、建物跡としてのまとまりを持ちそのようなピット群の他、複数の墳墓、落し穴等が見られた。

**ピット群** ピットは、標高28m付近で大きなまとまりが見られる他、稜線上の3箇所まで2基づつを接近して検出した。

ピット1・2は標高29m付近で検出し、直径約

20cm、深さ10cm程の浅いものであった。付近は比較的緩斜面であるが、表土は浅く後世の削平が考えられる。

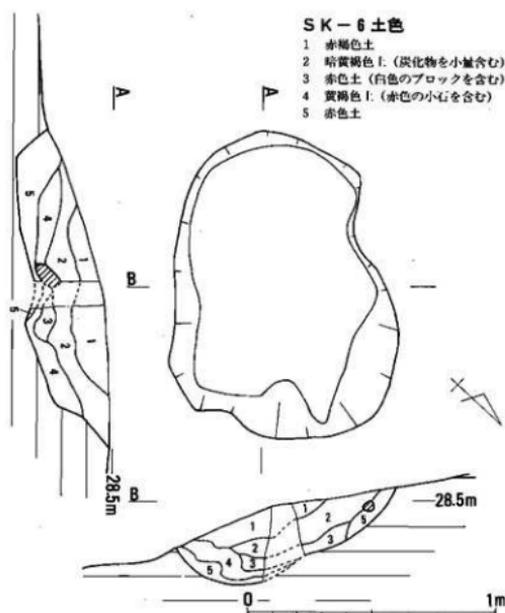
ピット3・4は、不整形な形状であるが、20cm程度の深さがありしっかりしたものであった。標高28m付近で検出し、南側に展開するピット群に近く、関係するものかもしれない。

ピット5・6は、島田2号墳の周溝のすぐ東側の標高27m付近で検出した。きわめて浅く、埋土は非常に軟らかい褐色土であった。

標高28m付近のピット群は大半がトレンチ調査時の6トレンチで検出したもので、尾根上に広く展開するものと予想していたが、この周辺だけに留まった。埋土が浅く、削平の可能性は高いが、現状ではやや急斜面となっている。ピットは直径18~42cmで、深さはいずれも20cmに満たない。比較的硬い褐色土が充填しているが、各壁面はしっかりしており、検出は容易であった。ピット群には円形に展開するまとまりがあり、竪穴建物の存在が推定されるが、復元すると直径3m程となり、きわめて小さい。遺物は検出していない。

III区で検出したピットはいずれも遺物を伴っておらず、削平を受け消滅した部分も多いと考えられる事から、その性格を判断する事ができないものばかりであったが、付近から出土する遺物や調査の状況から時期と性格を推定すると、下記ようになる。

島田遺跡の発掘調査では尾根上から斜面下方まで、ほぼ全域を掘削したが、出土した遺物にはある程度のまとまりがあるようである。出土した土器は大半が須恵器・埴輪で、いずれも古墳・横穴墓に



第29図 SK-6平面図・土層断面図(1:20)

伴うと考えられる。古墳・横穴墓に伴わないものとしては、近世以後の陶磁器類と須恵器磨片しかなく、生活跡を伺わせる煮沸・供膳形態の土器は出土していない。III区中部のピット群については、竪穴建物の存在を推定したが、縄紋・弥生土器は1片も出土しておらず、土師器は横穴墓に伴うものである。遺構に伴わない土器以外の遺物としては石器類しか検出できなかった。成品として認識できる石器には、局部磨製石斧と黒曜石製石鎌が見られ、狩猟や木の伐採など、縄紋人が活動していた痕跡が、後述する落とし穴の時期を示唆するものと思われる。しかし、石斧につい

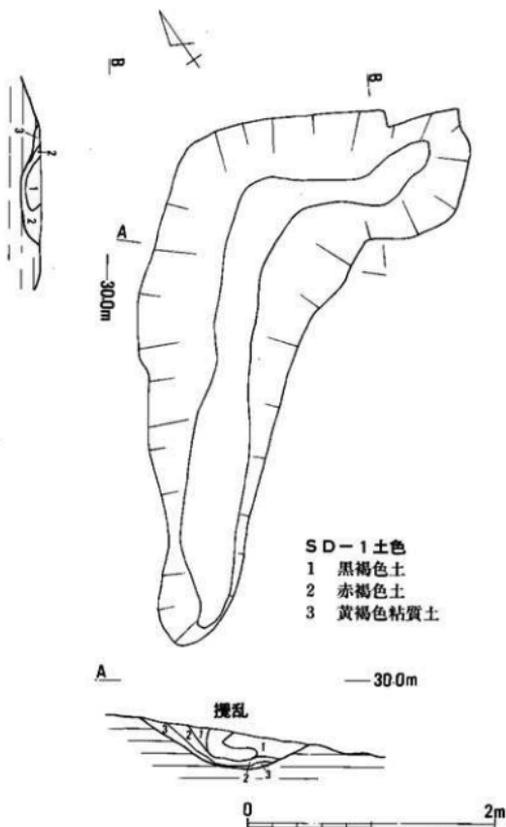
ては、同じ石材を使用し、同じ形態と考えられるものが3点見られる他、黒曜石の切片も数点が出土しており、出土位置もⅢ区中部から西部の狭い範囲に集中している。こうした遺物から考えると、狩猟や伐採のため一時的に山に入ったのではなく、一定期間留まっていた痕跡ではないかと想像させる。以上の事からⅢ区で検出したピットの中には、住居と呼べるほどのものでないにしても、縄紋時代のキャンプサイトの様なものが含まれていたのではないかと想像される。

**落とし穴** SK-3・4は、いずれも南向きの緩やかな斜面の標高28m付近で検出した長方形の土坑で、その形態から落とし穴と考えられるものである。

SK-4は尾根上の緩やかな斜面が南に向かって急に落ちる変換点近くの標高28mの位置で検出した。長さ110cm、幅54cmのほぼ長方形を呈している。検出面から床面までの深さは約40cmで、ほぼ水平に造られた底面は、長さ1m、幅48cmを測る。床面のほぼ中央に直径約15cmのピットが真下に向けて掘られている。ピット部分は、床面より30cm程度までは掘り下げたが、更に続いているようで、ピット径が狭く深いため完掘する事は出来なかった。ピット部分に先を尖らせた杭状のものを逆さに立て、獲物をとらえる落とし穴と考えられる。

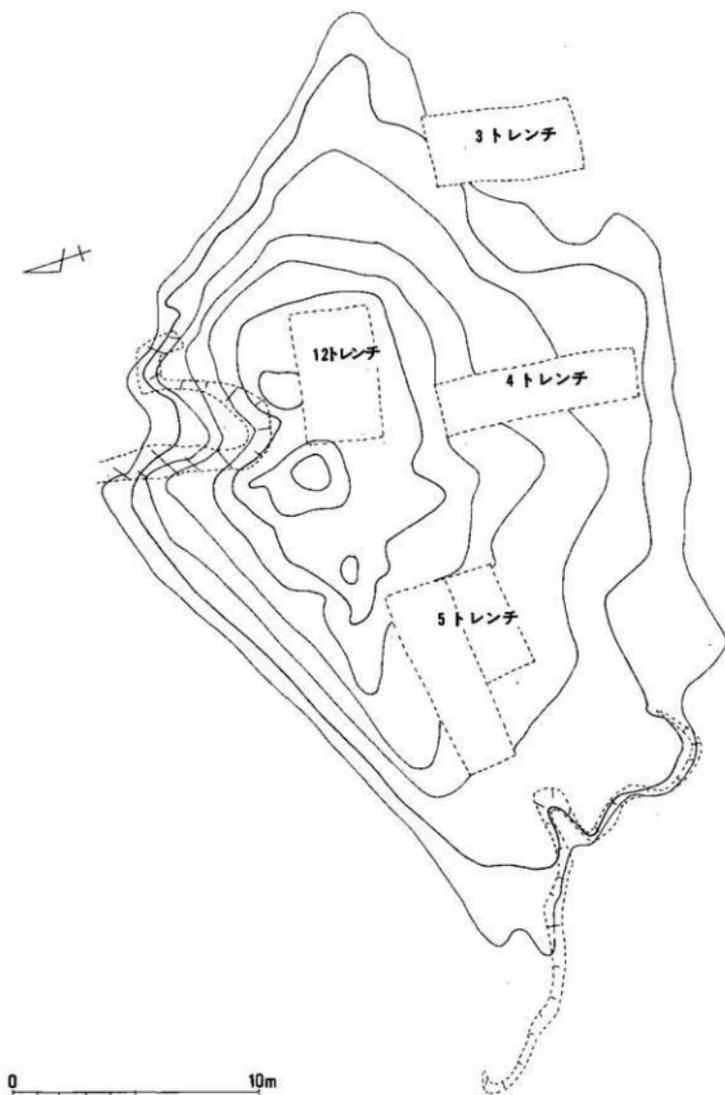
SK-3は、尾根筋に近い標高28.5mの緩やかな斜面上で検出した。長径91cm、短径62cmを測る楕円形に近い形状で、床面までの深さは約40cmを測る。底面は長さ61cm、幅49cmのほぼ長方形で、わずかに南側に傾斜する。中心から西側に外れた位置に、SK-4と同様に直径約18cmのピットを備えている。ピット部分は、床面から50cm以上を掘り下げたが更に深く続いている。

島出遺跡SK-3・4からは遺物は出土していないが、同様の形態のものは鳥取県米子市の青木遺跡<sup>(附1)</sup>で大量に検出されいる。青木遺跡では縄紋土器・石器を伴うものが10数基あり、縄



第30図 SD-1平面図・土層断面図(1:40)

紋時代の落し穴と判断された。青木遺跡で検出された落し穴は、中央ピットが深さ30cm程度のものが多く、島田遺跡のものに比べるとやや浅い印象がある。逆に本体部分は1m前後あり非常に深い印象



第31図 島田遺跡Ⅲ区中部（調査前）地形測量図・トレンチ配置図（1：200）

があるが、島田遺跡の場合、上面が削平されている可能性が高く、青木遺跡で見られるように1m前後の深さがあったものと考えられる。

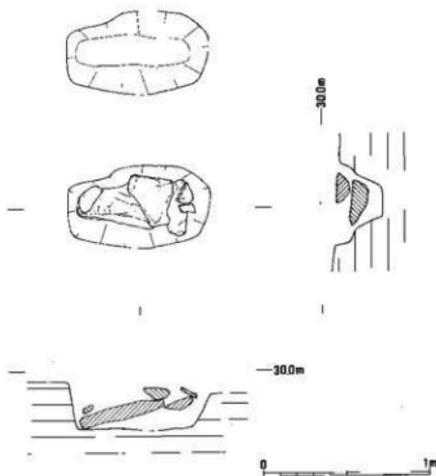
**その他の土坑・溝** Ⅲ区中部では、用途の判然としない土坑が4基見られる。いずれも不整形の浅いもので、この内SK-6が最大のものである。長径1.3m、短径0.9m、深さ30cmを測る。土層堆積状況からは倒木の様なものではないようである。SK-5も同様のもので長径1m、短径75cmの楕円形の土坑で、断面形は円錐に近い。他の2基は長径50cmに満たない小さな土坑である。いずれの土坑も遺物は出土していない。

SD-1は尾根上で検出した「L」字形に延びる溝である。総延長約5m、深さ30cmを測り、断面形状は緩い「V」字形を呈している。埋土は、比較的軟らかく新しいものである事を伺わせる。直上の表土中からは須恵器甕の小片も出土しているが、SD-1に伴うものとは思えない。何らかの区画溝と思われるが、「L」字の内側にあたる東側には目立った遺構・遺物は見られない。

**墳墓群** Ⅲ区中部では4基の墳墓が見られ、この内2基をトレンチ調査で検出した。12トレンチで検出したSK-9は石蓋土壇、5トレンチで検出したSK-1は木棺土壇墓である。古墳の可能性も考えた丘陵頂部には、特に遺構は見られなかった。また、南側の斜面上で、木棺土壇墓1基、土壇内に箱式石棺を内包する古墳(?)1基を検出している。

Ⅲ区中部の地形は、標高30mのピークから東西に尾根が延びており、尾根の南側は15mに亘って緩やかな斜面が見られるが、北側は下方の島田池まで急斜面が続いている。このピークに何があったか解らないが、島田池東岸から一直線に古道が続いており、幅3m程の窪みとなって残っている。古道の窪みは、ピーク直前で途切れており、尾根線に続いていったものと思われる。南側はトレンチ調査で見られたように橙色土が厚く見られたほか、橙色土上面に不整形の小さな加工段や、平坦面が随所で見られ、畑地として利用されていた時期がある事を伺わせる。また、島田遺跡全般に言える事だが、尾根線の北と南で地山の土質がはっきり変わり、北側では暗褐色土、南側では花崗岩風化土と見られる明橙褐色土となっている。北側の暗褐色土部分には遺構は見られず、南側でも所々に露出する暗褐色土部分には遺構は見られなかった。

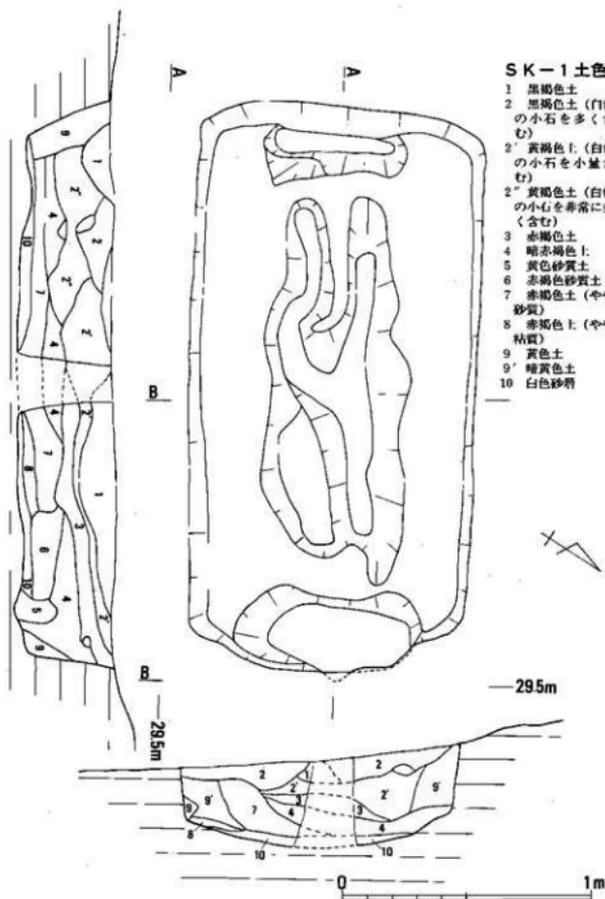
**SK-9** SK-9は、標高約30mの丘陵頂部からわずかに東に外れた尾根上に位置する。トレンチで検出した段階では偏平な石の回りに土壇の肩が見える状態であったが、大小6個の石が土壇内部に転落した状態であった。石は、大きなもので長さ50cm、小さなもので拳大の大きさで、全て自然石を使用し、加工の見られるものはなかった。土壇は、長さ80cm、幅50cmの不整形な長方形で、東西方向に



第32図 SK-9 平面図・断面図 (1:30)

主軸を取る。深さは約30cmで、長辺側には深さ10cm程の所に小さな段がある。石は、この小さな段に架けて蓋として使用したようで、比較的大きな石2枚の間を、小さな石で塞ぐように置かれており、西側で転落したようである。

同様の石蓋土壇は安来市の国吉遺跡<sup>(27)</sup>で検出されている。国吉遺跡の石蓋土壇は長さ55cm、幅15cm、検出面からの深さも20cm程という非常に小さなもので、鳥田遺跡SK-9に比べてもかなり小さい。しかし、蓋石はほとんど隙間無くおおむね3段に置かれていた。国吉遺跡でも遺物は見られなかったほか、国吉遺跡で唯一の遺構であり、時期・性格は解っていないが、米子市の新山研石山遺跡を例に墓の可能性を指摘している。



第33図 SK-1平面図・土層断面図 (1:20)

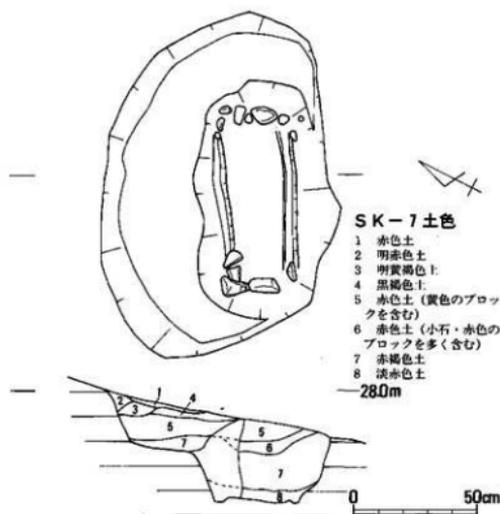
SK-1 SK-1は、5トレンチで検出した土壇墓で、東西方向に主軸を向ける木棺墓と思われる。長さ2.32m、幅1.14mで、深さは約40cmを測る。側面と西側の端面はほぼ直線的に造られ隅丸方形様を呈すが、東端面は南北から20cm程の所で10cm程外側に突出している。この形状は下方に向かうほど顕著になり、ややオーバーハングする形状になっている。SK-1からは遺物は出上しなかった。

土層堆積状況から木棺痕跡は確認できなかったが、各側面には必ず黄褐色土の堆積が見られ、この上が木

棺部材の押さえに使用された土と思われる。また、床面直上には白色の川砂が、厚さ5cmに亘って一面にみられ、床面に意図的に敷かれていたものと思われる。床面は、非常に荒れていたが、木棺部材を据えた溝状の痕跡を見る事が出来る。それによると、側板を据えていたと見られる溝間は、両幅で約50cmで、それよりやや内側に側板が置かれていたものと思われる。それに対し小口部分の溝は50cm以上の幅があり、小口板も、50cm程度の長さがあったものと思われる事と合わせ、側板側の溝が小口板側の溝の直前で止まっている事から、木棺の各部材の組み方は通常の「H」形ではなく、「I」形であったと思われる。縦断面での土層堆積状況では、西側で床面の白砂が一面に亘り見られ、その上に端部での粘土の堆積が見られるが、東側では白砂の堆積は端部の溝の直前で止まっている。西側では小口板が床まで完全に密着しておらず端部まで流れ込んだのであろうか。横断面での白砂の堆積は、中程の窪んだ部分に限られている。側面での硬くしまった粘土は、南側で少量見られただけで、側面側の状況から側板については埋葬後、比較的早い時期に内側に転倒した事が考えられることから、組み合わせ式木棺が「I」形の配置であった事を傍証する。また、白砂の検出状況から、白砂を敷いた範囲は木棺内に限られ、木棺を組み終えてから、その内部に白砂を敷いたものと考えられる。

土壌の上面は削平を受けた可能性があり墳丘が存在したことも考えられる。

安来市の荒島墳墓群では、土壌内に木棺を埋置するにあたって砂を使用した例があり、弥生時代後期後半に造られた仲仙寺9号墓中央主体・安養寺1号墓第1・2主体・宮山4号墓が知られているほか、安養寺3号墓でも砂を使用していた可能性がある。荒島墳墓群では、こうした主体部は、中心主体か、それに準じる大型の箱式木棺であった。特に宮山4号墓は、他の荒島墳墓群の墳丘墓と異なり、主体部が1基しかなく、木棺上面も厚く砂で覆う、凝った埋葬方法を取っていた。また、前期古墳の例では、安来市の造山1号墳で石室内に砂が見られ、同様に木棺を埋置する際に砂を使用していた事が想像されている。また、島田



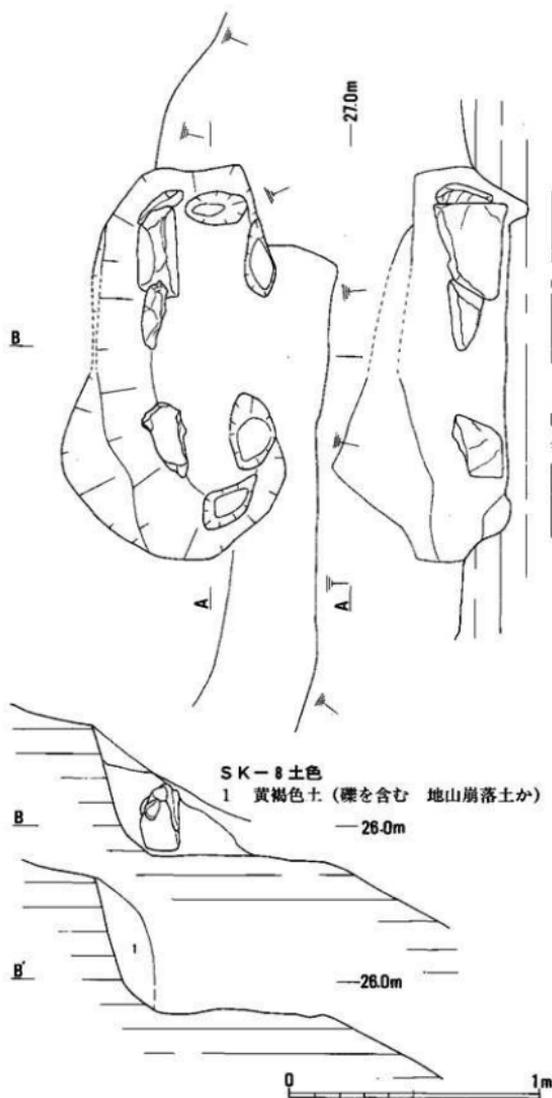
第34図 SK-7平面図・土層断面図 (1:20)

遺跡のすぐ近くに在った寺床1号墳第1主体部では、礫層内に割竹形木棺を安置した上から白砂で被覆しており、主体部に砂を使用するという点で共通性が見られる。安来市の塩津山1号墳の第3埋葬施設では割竹形木棺を内包する砂礫層の上を、白砂で被覆しており、寺床1号墳とほぼ同様の埋葬方法が取られている。塩津山1号墳には6基の埋葬施設が確認されており、前期古墳でありながら弥生時代の伝統を色濃く残す点で注目されている。また、隣接する塩津山4号墳にある3基の埋葬施設

の内1基は、箱式木棺を主体部とし、白砂を敷いている点で鳥田遺跡SK-1とそっくりと言える。遺物は土器の薄片しか出土していないが、主体部に排水施設を伴うなどの点で古墳時代の要素を持ち、

塩津山1号墳に近い時期とされている。上記の例から鳥田遺跡SK-1は弥生時代後期から古墳時代前期の年代観が与えられるが、特に、排水施設の存在を除き塩津山4号墳によく似ていると言える。

SK-7 SK-7はSK-1の南側、標高28m付近に位置する小型の木棺土墳墓である。東西方向に主軸を取り、SK-1にほぼ並行する。検出面では長径1.42m、短径0.9mの楕円形を呈していたが、2段土壇になった下側は南側に寄っている事から、上面が斜めに削平され、南側が消失しているものと思われる。検出面は標高28m付近で、そこから約20cm下方に2段土壇の第1段目がある。第1段目は残りの良い場所で側面側に約30cm、端面側に約20cmの幅があり、ほぼ水平になる。第2段目は長さ98cm、幅47cmのほぼ長方形で、第1段目の縁から約20cm下がる。側壁は、直接木棺の側板を据えた溝に到り、その内側はほぼ水平



第35図 SK-8 平面図・土層断面図 (1:20)

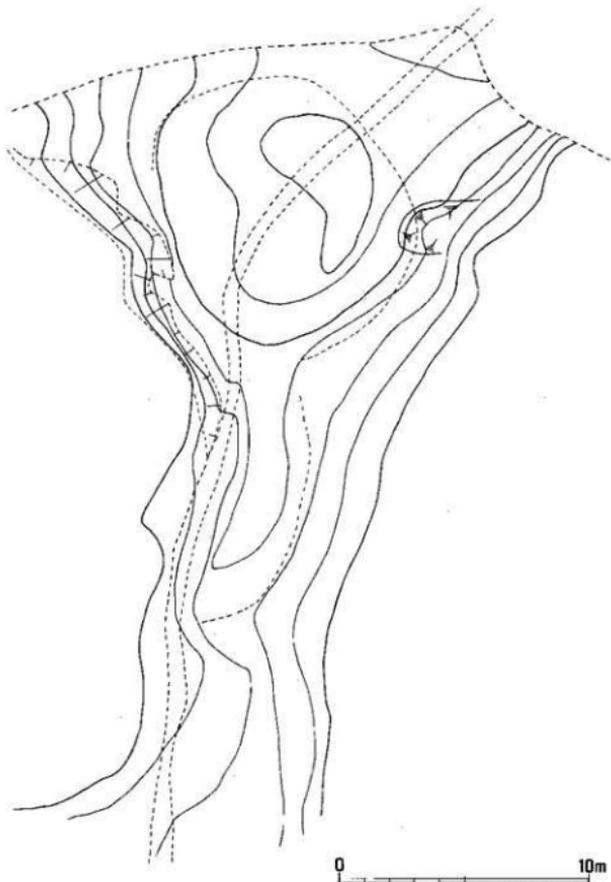
になっている。土層断面ではほとんど水平堆積で、木棺痕跡や木棺の裏込め土は確認できなかった。

側板を据えた溝は側面側にしか無く、端面側は円礫が見られた。この円礫は拳大のものばかりで大きなものは見られず、小さいものを含めても東側で8個、西側で5個と少ない。この礫で側面を塞ぐのは困難と思える事から、端板を固定するために使われたものと思える。西側で見られるように、円礫の下にも溝が続いている事から、側板で端板を挟み込む「H」形の組み合わせ式木棺が想定される。検出状況から、木棺の内法は長さ60cm、幅25cm程度の非常に小さなものが想定される。

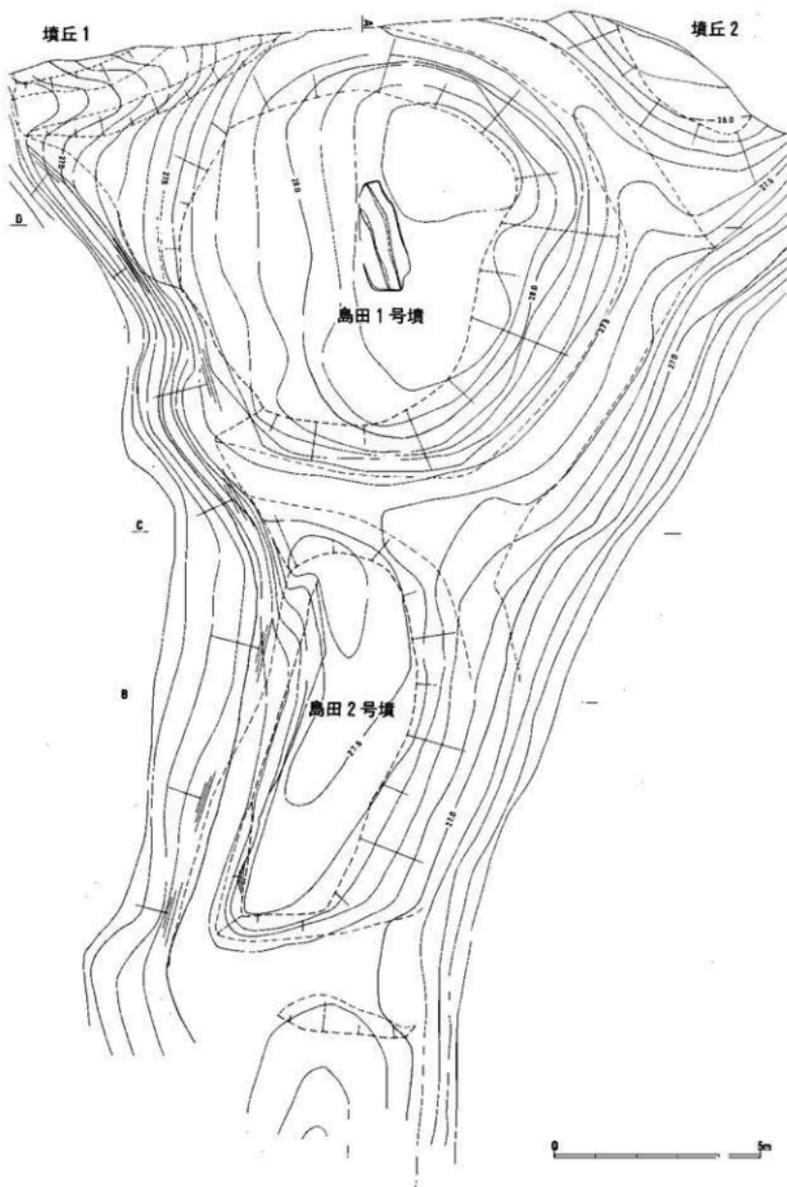
SK-7では、土層断面で裏込め土が確認できなかった。側板を据える溝が側壁に直接つながる事と考え合わせ、裏込めをしなかったのではないかとと思われる。また、埋土上面では旧表土と思える黒色土があり、一時地表面だった土が土壌内に落ち込んで残ったと思える事から、元々墳丘は持たなかったと考えられる。

SK-7からも、遺物は見られず、時期は不明であるが、極端に小さく、SK-1や後述するSK-8に隣接する事からどちらかに伴うものである可能性が大きい。

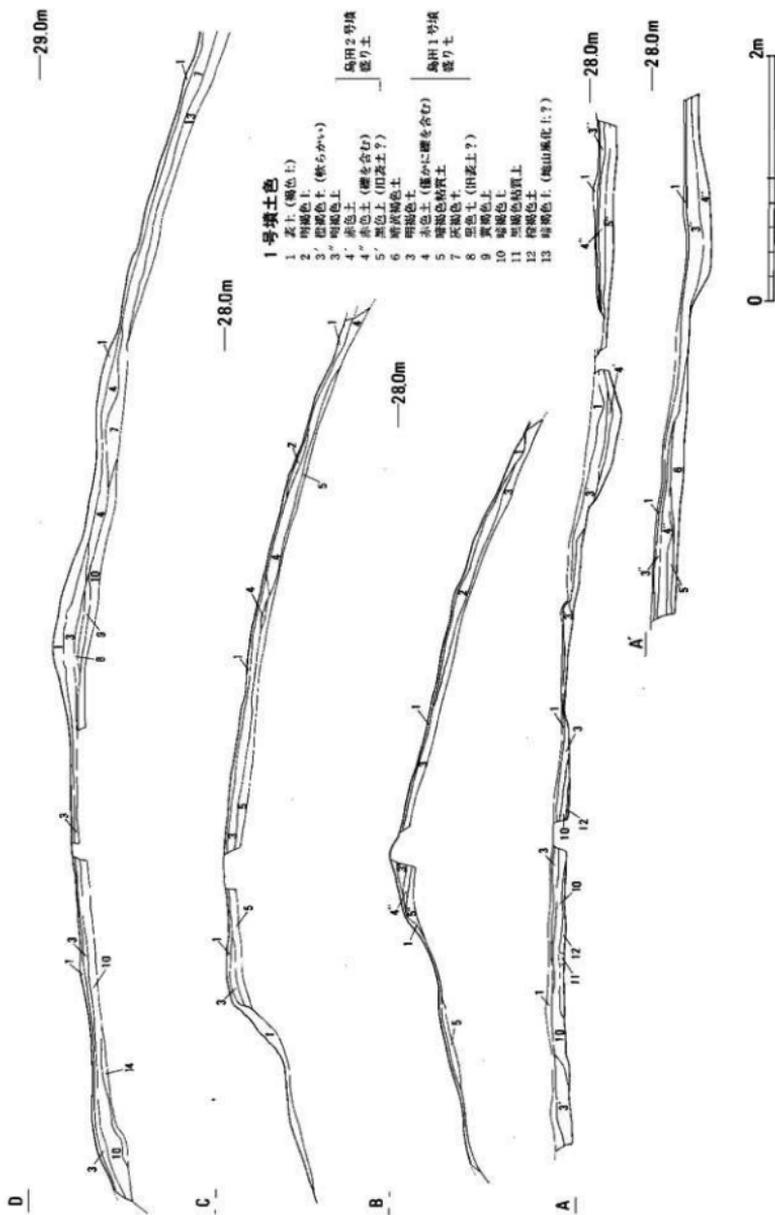
SK-8 標高26m付近の南向き斜面から、古墳と思われる、土壌を検出した。箱式石棺を内包している。検出位置は、尾根上の緩斜面が南に向かって急に落ちる変換点に当たり、トレンチ調査時の7トレンチ脇に当たる。土壌は両側の肩を欠くが、長さ168cm、幅80cmを測り、内部に石が残存してい



第36図 島田遺跡Ⅲ区西部(調査前)地形測量図(1:200)



第37図 島田遺跡Ⅲ区西部遺構配置図・セクションベルト配置図 (1:125)



第38图 鹿田遺跡Ⅲ区西部土層断面图

た。内部の石は、完掘した状態から、箱式石棺の部材と考えられ、石の無い箇所でも石を掘えた小さな窪みが残っていた。南側の石は、斜面下方に転落していたようだが、北側の4個の石のみが残存していた。石はいずれも角張った自然石を使用しており、加工の痕跡は認められない。最大のもので長さ38cm、高さ23cm、厚さ13cmを測る小さなもので、平たくなった面を内側に向け直立している。残存する4個の石材は全て北側の側面に位置し、途中1個分の石を欠く。東西両端部には各1個分の窪みが残っている。南側は両端部に近い側で1個分ずつの窪みが残り、その間に2個程度の石が置かれるものと思われる。各窪みは、長さ30cm程度、幅10cm程度で、最も深い東側端部のもので8cmの深さを持つ。北側に残存する状況から石材の配置を想像すると次のようになる。側面に4個、端部に1個の石材を置く。角は、端部と側部の間を塞ぐように小さな石を置く。左右対称として、計14個の石材を使用する。蓋石は無かったものと思われる。石棺の内法は長さ約1m、幅約20cm、深さ約30cmに復元できる。石棺内から須恵器蓋・坏が出土している。

SK-8は、遺存状況が悪く、全面調査時には墳丘の痕跡を確認することはできなかったが、7トレンチの土層堆積状況を見ると、トレンチ七部に明らかに人為的な土盛りが見られる。7トレンチに最も近い遺構はSK-8であり、SK-8に墳丘が存在したことを伺わせるものである。また、7トレンチからは須恵器短頸壺が出土している。人為的な盛り土の上に堆積した褐色の造成土中から出土したものであるが、7トレンチ付近に須恵器を伴う遺構はSK-8以外になく、SK-8に伴うものと思われる。SK-8で出土した須恵器坏は、TK-209並行期と考えられる。

## 6 古 墳

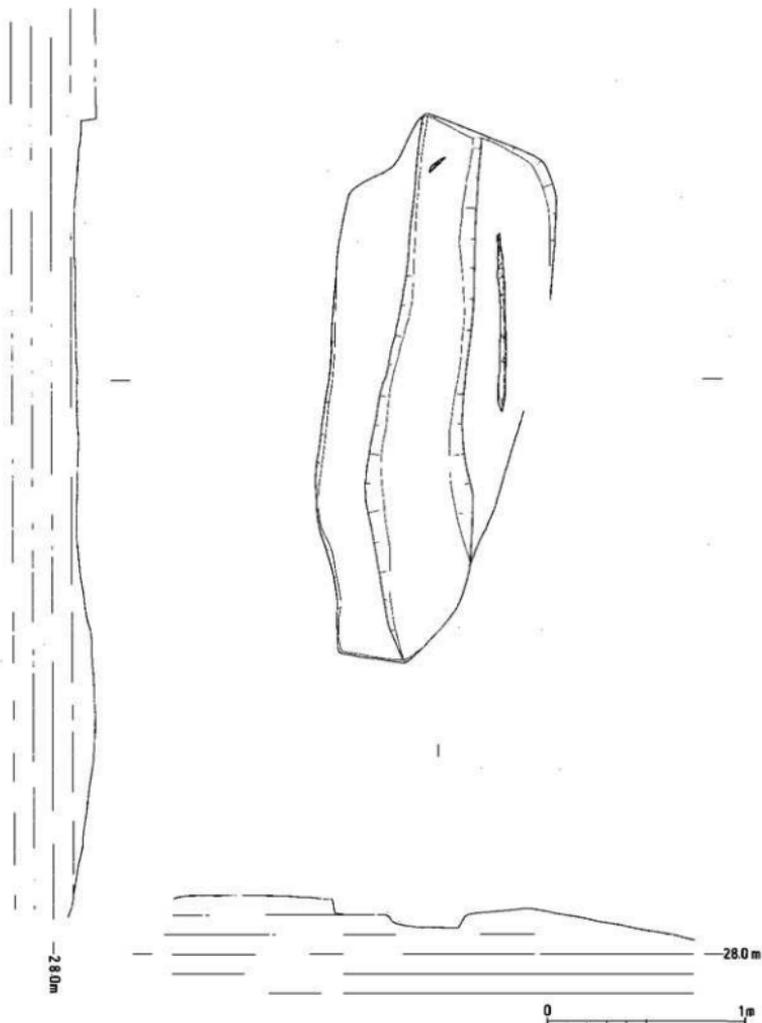
島田遺跡では3基の古墳を確認したほか、調査区西端に更に2基の墳丘が存在したと思われる。Ⅲ区西端の古墳を島田1号墳、1号墳の東に隣接する古墳を島田2号墳、Ⅲ区東部に見られる古墳を島田3号墳と呼んで調査を行った。また、調査区外西側に2基の墳丘が見られ、南側から墳丘1・墳丘2と呼んだ。

**島田1・2号墳** Ⅲ区西部は標高約29mの東西に延びる尾根で、南北は急斜面になっている。

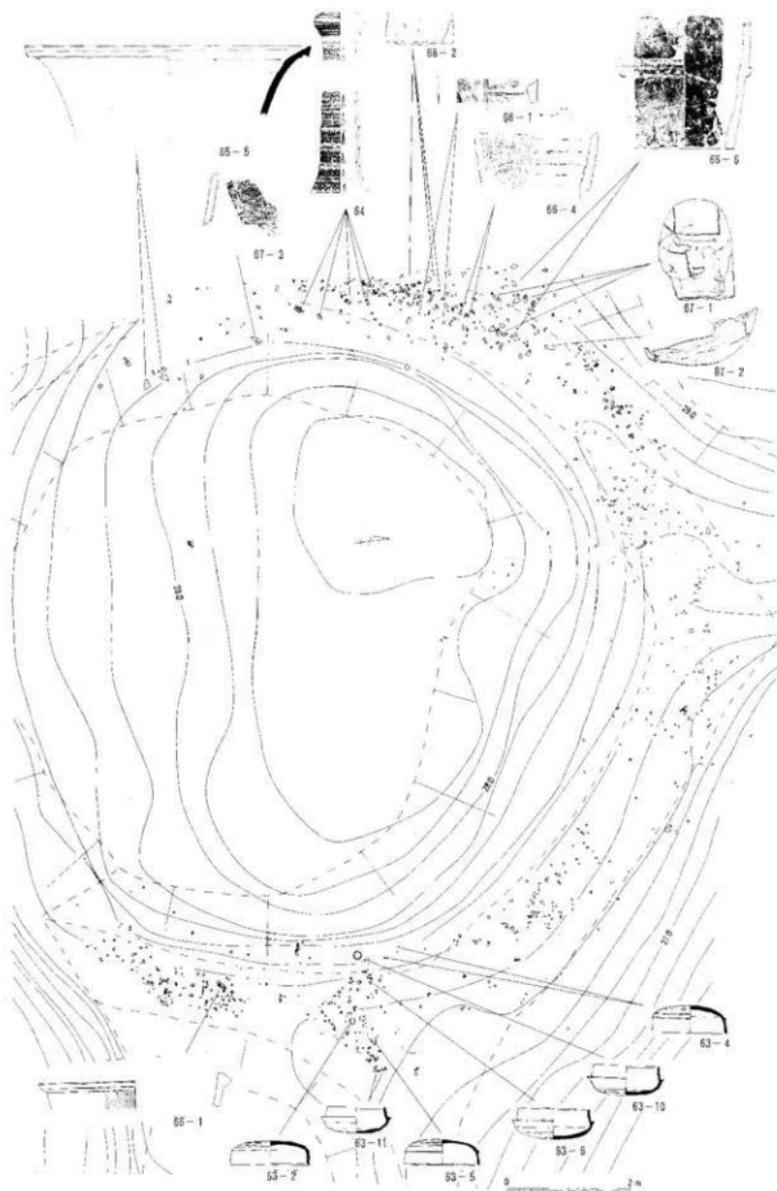
調査前の状況では、尾根を東西に古道が横切っており、南側で大きく削平された痕跡が見えた。尾根上は、2つのマウンドが接近して見られたことから、前方後円墳（前方後方墳）の可能性が考えられ、それに備えてセクションベルトを配した。すなわち、Aセクションベルトを前方後円墳の主軸相当部に、それに直交してBを前方部相当部に、Cをくびれ部相当部に、Dを後円部相当部に置いた。その結果、後円部相当部には土盛りが残されている点、くびれ部相当部はつながらず溝が見られる点、前方部相当部分は後円部相当部分より後に造られている点に分かり、二つの別の古墳として前方部相当部分を島田2号墳、後円部相当部分を島田1号墳とした。島田1号墳は、現状で直径11m、高さ70cmの円墳で、長さ約2.5mの木棺直葬の主体部を持つ。島田2号墳は10m前後の円墳（方墳？）と思われるが、墳丘の大半が削平されており、主体部は確認できなかった。

島田1号墳の主体部付近は、上面がかなり削平されており、基底面をわずかに残すのみであった。このため、検出した墓坑は、西側から南側の大半と北東隅で肩が完全に消滅した状態で、形状がわかりにくくなっている。特に西側の肩はほんの僅かな段しか残っていないため、本来の長さは更に長かつ

たかもしれない。東西方向に主軸を置き、N-79°-Eを指す。残存長2.78m、幅1.1mを測り、深さは中心部でも10cm程しか残っていなかった。中程に幅40cm程の窪みがあり、割竹形木棺が収められていたと思われる。棺外南側の段上に刃部を内側に向け、切先を西に向けた状態で残存長89cmの大刀が出土している。また、木棺内と思われる、中央の窪みの東隅で、切先を北へ、刃部を東へ向けた状



第39図 島田1号墳主体部平面図・断面図 (1:25)



第40図 島田1号墳遺物出土状況 (1:80)

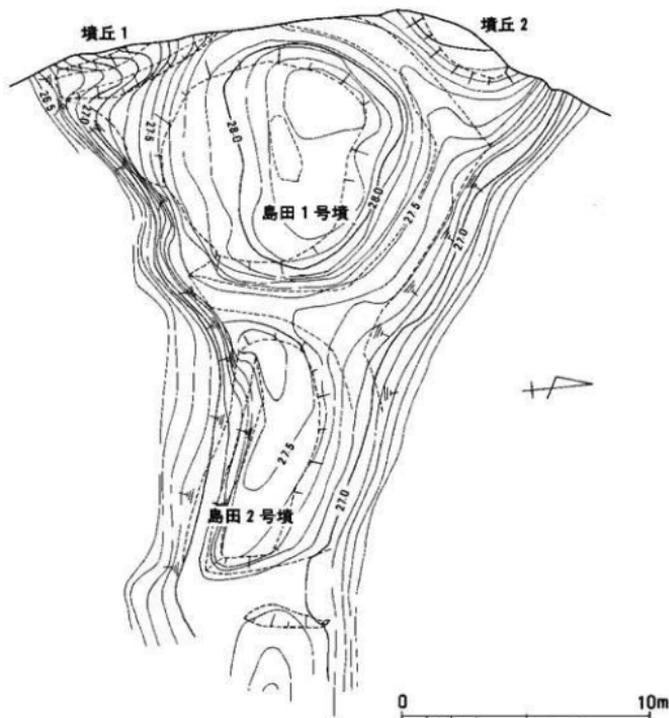
態で刀子が見られた。刀子の位置から、頭位方向は東であったと思われる。他の副葬品は無かった。

墳丘は、南側が大きく削平され、上面も主体部付近で見られるように封土を失っているが、Dセクションベルト北側では旧表土と考えられる黒色土が検出され、僅かに盛り土の痕跡が確認できる。自然地形を利用し、周溝などを掘削した上を盛り、墳丘を築いたものと思われる。

島田1号墳の墳丘には周溝が巡っていたと考えられるが、南側については削平され消滅していた。周溝内からは埴輪片を中心に多量の遺物が出土した。北西から南西にかけては、主に埴輪片が出土しており、中でも、人物埴輪、筒形器台は、集中して破片が見られた。また、島田1号墳では、合計12個体の蓋・坏を採集したが、東側の島田2号墳との境に当たる部分の周溝では、10個体もの蓋・坏が集中して出土した。

こうした出土状況の中で、周溝の南西隅、周溝の肩が無くなりテラス状になる北側・北東側などでは埴輪や須恵器坏類が一切見られなくなり須恵器甕片が多くなる。出土位置も床面では見られなくなり、褐色土中に含まれており、島田1号墳より新しい時期のものと考えられる。

島田2号墳は墳丘の大半が削平されており、わずかに三日月形に墳丘が残されていた。西側の1号



第41図 島田1号墳付近地形測量図 (1:200)

墳との間と東側の一部に周溝が残っている。この内西側の周溝は1号墳の墳裾を削っているようである。明瞭に残っている東側の周溝によると、周溝の幅は約1.5m、周溝の底から約40cmの高さで墳丘が残されている。旧表土は確認できなかったが、僅かに盛り土の痕跡を留める。当初、この下方にある第4号横穴墓の後背墳丘と考えたが、主軸が大きく異なる他、墳丘の削平が第4号横穴墓によるとの判断から別の占墳と考えた。島田2号墳の周溝から出土した須恵器はいずれも小片だったため時期は不明である。

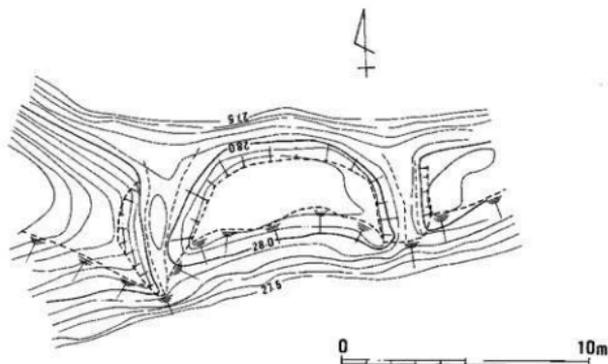
島田1号墳南西側の周溝は、1号墳の他の部分の周溝より一段下がっており、周溝が廻る方向も大きく西に振っており、1号墳ではなく他の墳丘（墳丘1）の周溝と考えられる。同様に、北西隅でも明瞭な高まりが見られ、墳丘（墳丘2）が存在するものと思われる。こうした状況から、1号墳周辺で出土した遺物の内、褐色土中から出土した須恵器壺片は、それぞれ島田2号墳、墳丘1、墳丘2に伴うものと考えられる。

墳丘1は幅1.5m、深さ20cmの周溝を約5mに亘って検出した。墳丘の本体は不明だが、周溝が緩やかに傾斜していることから、斜面の背後に溝を巡らした形状と思われる。周溝内から出土した須恵器(65-5)よりTK-43~TK-209並行期と考えられる。

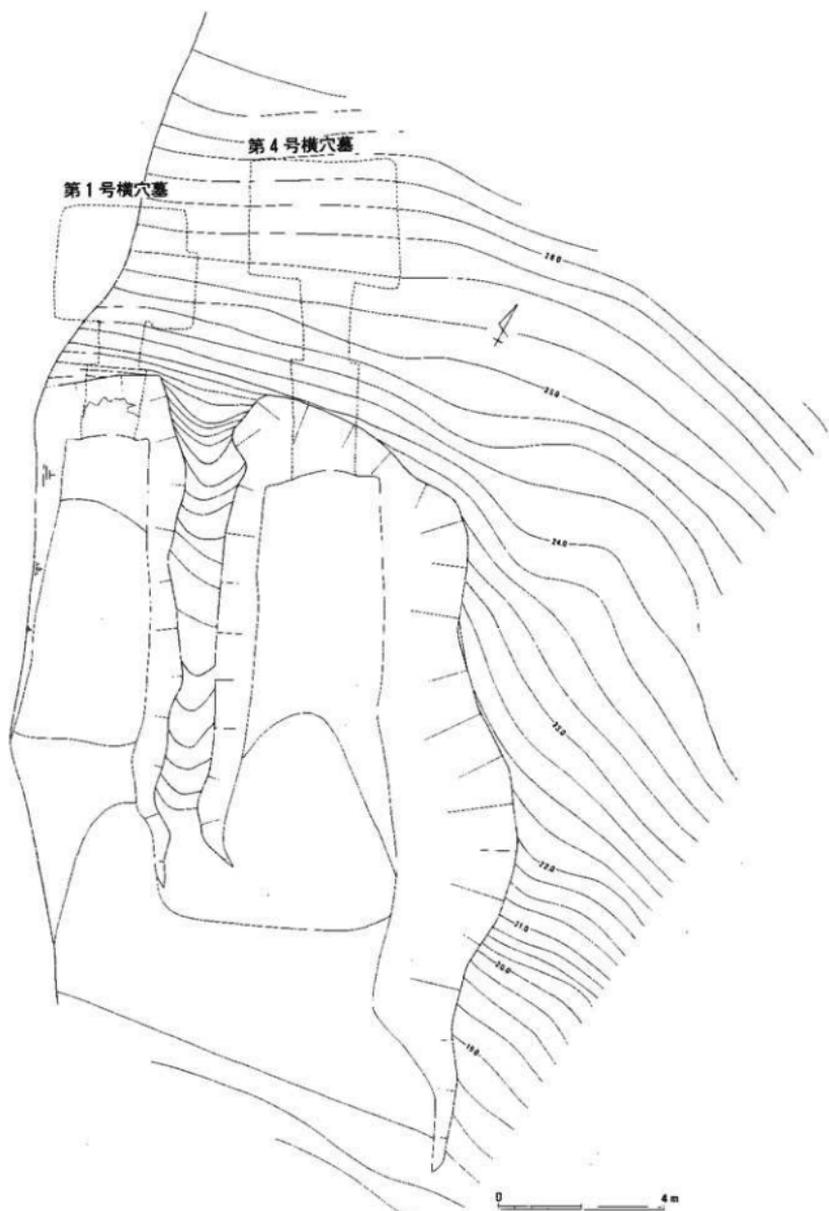
北西側の墳丘2とした部分は、検出した周溝の上場が周溝の下場の方向に一致しなかったことから、上場付近を精査し、明瞭な削を検出したものである。周溝そのものは確認できなかったが、地形測量図では等高線の間隔が広がる部分があり、周溝が廻っていた可能性がある。島田1号墳の周溝の底から40cm以上の高さがあったものと思われる。須恵器壺片を伴うものと思われるが小片のため時期は不明である。

島田2号墳の約2/3と1号墳の南隅はきわめて薄い表土直下に、すぐに岩盤が見られ、大きく削平を受けていることが明瞭に見られた。この削平は、真下に位置する第1・4号横穴墓前庭部の埋め戻しのために行われたようで、第1号横穴墓前庭部から島田1号墳の筒形器台・埴輪片が出土している。

Ⅲ区西部では、それぞれの墳丘に切り合い関係があるため、相対的時期関係が推定できる。まず、



第42図 島田3号墳地形測量図(1:200)



第43图 第1·4号横穴墓前庭部平面图(1:120)

5世紀末頃に島田1号墳が造られる。後になって島田2号墳・墳丘1・2が島田1号墳の裾を削りながら造られる。7世紀に入って第1・4号横穴墓の埋め戻しに島田1・2号墳の土が使われる。といった順番になっている。

**島田3号墳** 3号墳はⅢ区東部の尾根上の、決してピークとは思えない部分に造られた古墳である。第3号横穴墓の上方に見られるが、軸軸が異なり距離も離れていることから後背墳丘ではないようである。標高約28mの東西に延びる尾根上に立地し、北側は急斜面、南側は削平が認められる。墳丘の大半は削平されており、尾根を切った両側の溝が確認できた。溝の状況から1辺10m前後の方墳と見られる。両側の溝は幅約2mで、溝の底から約30cmの高さが残っている。盛り土はまったく残存しておらず主体部も検出できなかった。溝中から須恵器臺の小片が出土している。3号墳南側ではピット列が検出されており、削平は小規模なものであろう。

## 7 横穴墓

I区西隅とII区では横穴墓を検出した。検出した横穴墓はいずれも南向き斜面で検出しており、島田池遺跡から続く北斜面にはまったく見られなかった。

**第1号横穴墓** I区西端の調査区際、標高20m付近では、2基の横穴墓を検出し西側のものから第1号横穴墓、第4号横穴墓とした。2基の横穴墓は接近して造られており、前庭部で2,5mしか離れていない。

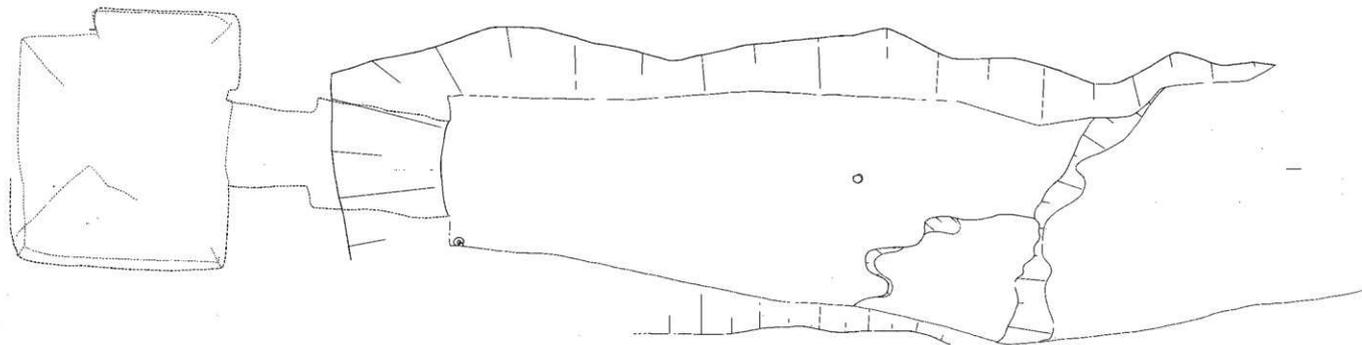
第1号横穴墓は幅約3m、長さ10m以上の広大な前庭部を持つものである。前庭部の東側の壁は羨道近くで高さ2,5m、羨道の上に延びる壁は標高24m付近まで直立する。前庭部西側の壁は先端近くで調査区外に出るため完掘できなかった。

前庭部は緩やかに傾斜しているが、羨道部から7,6mの位置で小さな段がある。段より先は第4号横穴墓と共有する形で更に平坦面が続き、羨道部から14,5mまでを検出した。それより前方は、現状では斜面になっているが、土層断面では盛り土の痕跡があり、築造当時には、羨道部から約20mの平坦面が存在したようである。

前庭部の土層堆積状況からは、少なくとも2回以上（3回か？）の追葬の痕跡が認められる。初葬時に前庭部を完全に埋め戻した後、追葬時には完全に掘り起こさず斜めに羨道に入っている。追葬面の上面に旧表土と思われる黒色土が均一に斜めに堆積しており、追葬直後には埋め戻されず開口したままになっていた時期があるようである。

下層側の初葬時の埋め戻しは基本的に褐色土と黒色土の互層になっているようだが、明瞭ではない。27赤色土の上面から土層堆積状況に違いが見られ、これより下層が初葬。17褐色土までが1回目の追葬と考えられる。第1回追葬の埋め戻し土の上面にある大きな褐色土のかたまりは追葬時に掘り返した土と思われることから、追葬時には前庭部を完全に埋め戻すことはしていないようである。この土の上方には黒色土と褐色土の非常に明瞭な互層が見られるが、各層は非常に厚く、丁寧な埋め戻しとは言いがたい。

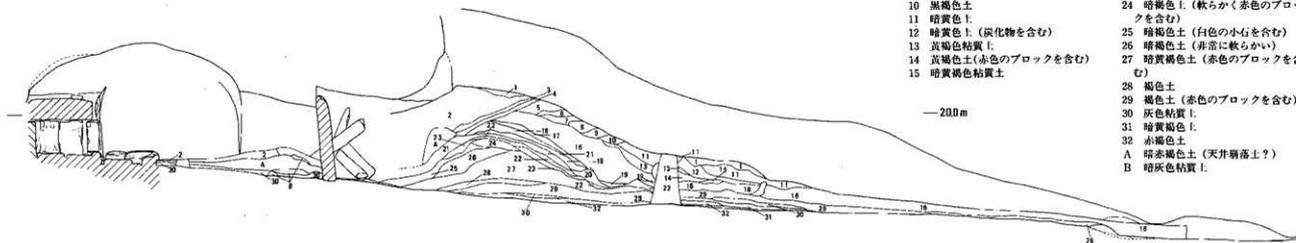
上層から床面直とまで、赤色土～褐色土の土には器台・埴輪片が含まれており、上方にある島田1号墳の墳丘を利用して埋め戻していることが解る。



第1号横穴墓土色

- |                      |                          |
|----------------------|--------------------------|
| 1 黒褐色土 (炭化物を多く含む)    | 16 暗黄色土 (赤色・白色のブロックを含む)  |
| 2 黄褐色砂質土             | 17 暗褐色土                  |
| 3 暗褐色土 (炭化物を多く含む)    | 18 褐色土                   |
| 4 暗黄色土 (炭化物を少量含む)    | 19 黄色砂質土                 |
| 5 暗黄色土 (炭化物を多く含む)    | 20 黄土                    |
| 6 黒褐色土               | 21 暗褐色土 (赤色のブロックを含む)     |
| 7 暗黄色土               | 22 暗褐色土 (軟らかい)           |
| 8 黒褐色土               | 23 暗褐色土 (白色の小石を少量含む)     |
| 9 暗黄色土               | 24 暗褐色土 (軟らかく赤色のブロックを含む) |
| 10 黒褐色土              | 25 暗褐色土 (白色の小石を含む)       |
| 11 暗黄色土              | 26 暗褐色土 (非常に軟らかい)        |
| 12 暗黄色土 (炭化物を含む)     | 27 暗黄褐色土 (赤色のブロックを含む)    |
| 13 黄褐色粘質土            | 28 褐色土                   |
| 14 黄褐色土 (赤色のブロックを含む) | 29 褐色土 (赤色のブロックを含む)      |
| 15 暗黄褐色粘質土           | 30 灰色粘質土                 |
|                      | 31 暗黄褐色土                 |
|                      | 32 赤褐色土                  |
|                      | A 暗赤褐色土 (天井崩落土?)         |
|                      | B 暗褐色粘質土                 |

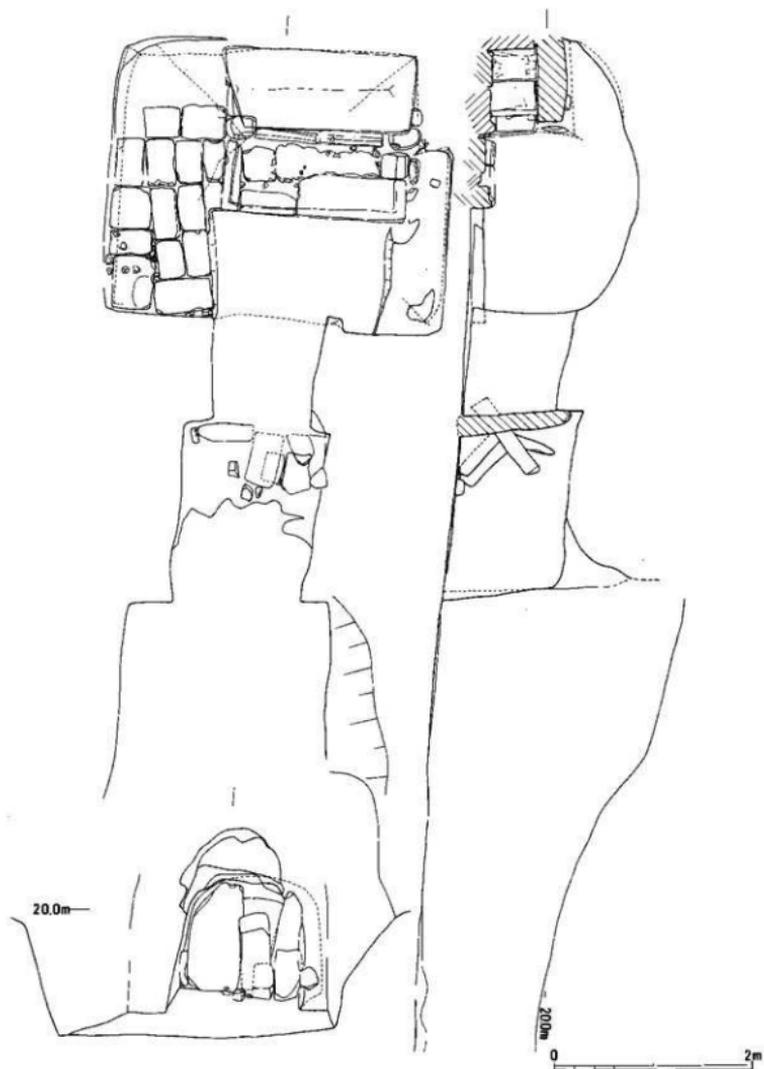
—200m



0 2m

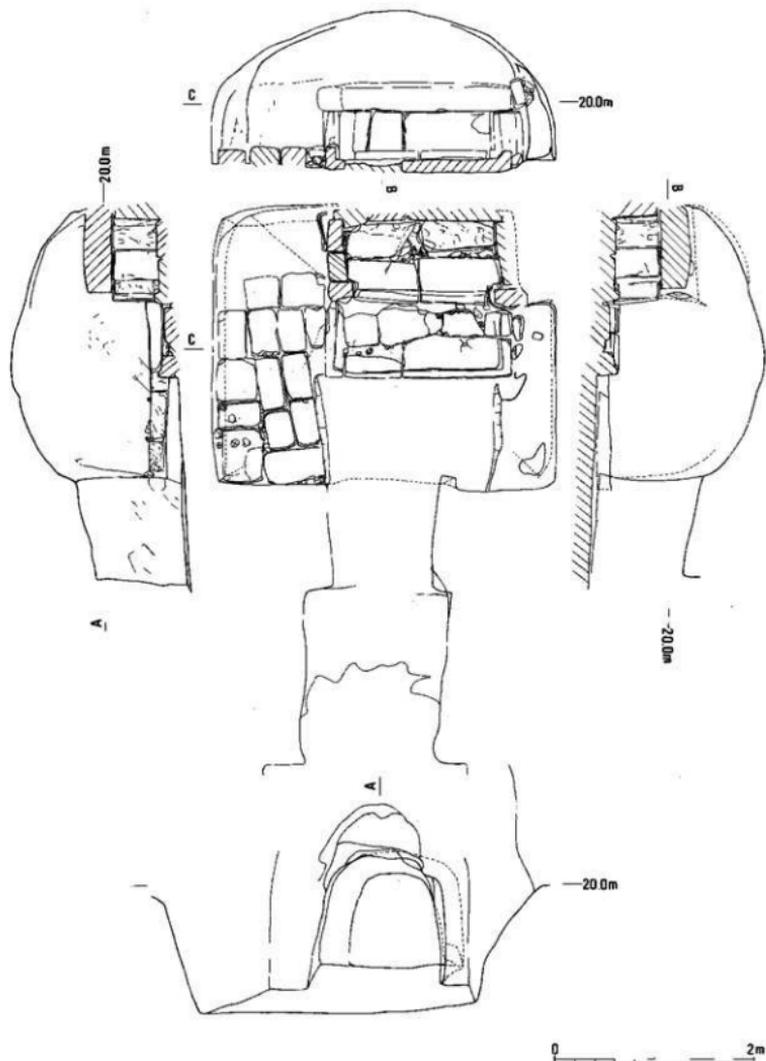
第44図 第1号横穴墓土層断面図 (1:50)

前庭部の左の角に長頸壺(72)が据えられていた。羨道部は長さ1.9mで、前庭部の角から約40cm内側に入る。前庭部と羨道の境に段は無く、緩やかな斜面になっている。羨道部の天井は剥離していたが、玄門近くは閉塞石の形状からほぼ残存しているようで、高さ1.2mを測る。幅は、前庭部側で1.2



第45図 第1号横穴墓閉塞状況(1:50)

m、玄門近くで1.4mを廻り、前庭部から見るとやや右(東)に振っているように見える。閉塞石を立てるための施設は見られないが、閉塞石の立っていた部分は僅かに窪む。閉塞石は切り石3枚で築いており、その押しえと見られる石が狭道部に7個置かれる。その内大きなもの2個は切り石を、小さ



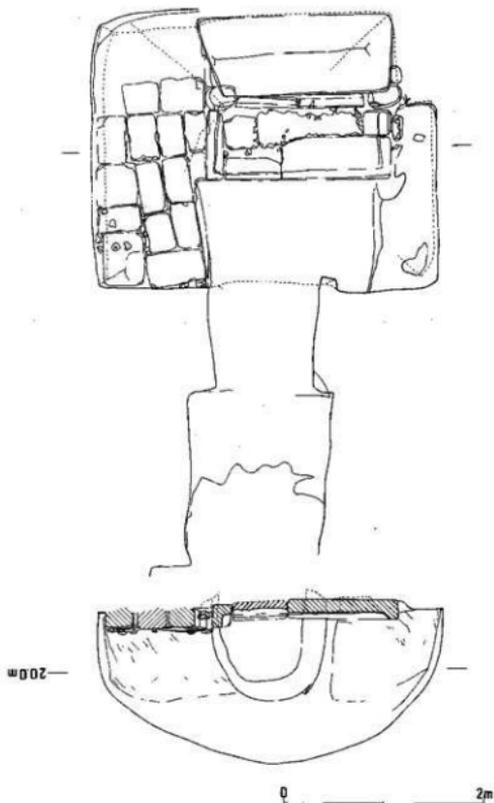
第46図 第1号横穴墓女室内平面図・立面図(1:50)

なものの5個は自然石を使用している。

玄門部は長さ1mで、羨道側で高さ90cm、玄室側で1mを測り、床面の傾斜と合わせ、奥に行くほど高くなっている。羨道側で幅90cm、玄室側で1.1mを測る。閉塞石による窪みを除き、羨道部との境に段は見られない。羨道と異なり、左右壁面から天井に到る界線が無く、天井が丸く湾曲する形で造られている。玄門部から玄室内にかけて若干の埋土が見られたが、追葬時に閉塞を立て直さなかったための流れ込みと判断される。羨道から玄門部にかけての埋土中には、遺物は見られなかった。

玄室内には正面から右壁に付けて家形石棺が、左壁から左袖に付けて石床が見られた。玄室の平面形は、基本的には横長の長方形であるが、右壁を中心に不整形な部分が見られる。玄門から右袖へは一旦飛び出すような形状で、右袖は前庭部側に向け一段窪んでいる。右壁側には造り出しの屍床があり、屍床分が右壁に掘り込んで造られている。軒線は左右袖部分を除き不明瞭ながら見られるが、棟線は無く、下り棟も途切れながら表現されている。下り棟の状況から平入りと判断され、棟線に当たる部分は中央より奥側に寄った方が明瞭だが、断面形ではドーム形を思わせる不整形なものになっている。

閉塞石は切り石を使用し、羨道奥の天井の形状に合わせ、面取りされた形になっている。すなわち玄門に向かい右側から玄門の約半分を塞ぐ石は右上の角が丸く面取りされ、中央の石はほぼ長方形、左側の石は左側の角を鋭く落とした形になっている。各石は右から高さ1.1m・幅50cm・厚さ15cm、中央の石は高さ90cm・幅27cm・厚さ18cm、左の石は高さ91cm・幅24cm・厚さ12cmを測る。この3枚の閉塞石の他に7個の石が閉塞石直前に見られた。閉塞石を押さえるような形で検出し、閉塞石の押さえと見られるが、用途は解らない。羨道左奥に小さな自然石が詰め込まれるような形で残されており、自然石は閉塞石の隙間に詰め、切り石で右側2枚の閉塞石を押さえたものだろう。閉塞石の内、中央と左側の2枚は、玄門から離れ前方

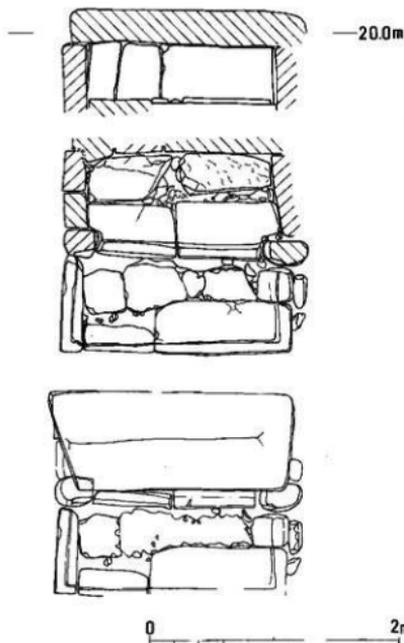


第47図 第1号横穴墓玄室内立面図(1:50)

に傾斜しており、特に中央のものの傾斜は大きく、そのまま玄室内に入ることができるほどであった。閉塞石は追葬時に倒されたものと考えられ、追葬後閉塞石の立て直しを行っていないものと思われる。

玄室内には、奥壁に並行し、右に寄せた位置に石床付きの家形石棺が置かれ、左壁に沿って左袖に付けて石床が置かれていた。左の石床は直方体に加工した切り石を並べたもので、小さいもので長さ40cm、幅22cm、高さ13cm、大きなもので長さ55cm、幅39cm、厚さ16cmの石材を14枚使用している。並べ方は、第1列目は、左袖から左壁に付けて4枚を、主軸を交互に変えながら置く。第2列目と3列目に当たる部分で、横方向に主軸を取る石を置き、その約半分幅の石を立て方向に主軸を取って2列3枚を並べていく。1列目が奥に行くほど幅が狭くなるため、2・3列日も隙間無く左へ振る方向で並べられていく。第2・3列目の4個目に当たる部分で1個のみの第4列目の石が置かれ、第2・3列目、第3・4列目の5個目に当たる部分で、主軸を横方向に取る石がそれぞれ置かれる。1列目と2列目の間と第2・3列目の1個目と左袖の間には隅間を埋めるように小石が詰まっている。各石の配置は明らかに不自然で、並べ変えたことも考えられる。

平面形や石床の配置が不自然な事から、玄室内の拡張が予想されたが、左袖・左壁の整形は丁寧で、特に拡張したような痕跡は見られない。左袖はほぼ直角に折れ曲がり床面に続いているが、左壁は床面から10cm程の所から裾が広がるように、僅かに外側に飛び出してから鋭角的に床面に続く。左壁には不明瞭ながら軒線があるが、左袖では天井部分と左袖壁面を面的に分けるように、界線がかろうじて見える。



第48図 家形石棺実測図(1:40)

奥壁も左壁と同様に床面直上で僅かに外側に飛び出すように掘り込まれている。奥壁も丁寧に整形されているが、奥壁と左壁の界線と左奥の下り棟の線が明らかに食い違っており、下り棟から延長して、奥壁内にも界線が1本見えている。下り棟から続く界線は、奥壁が外側に飛び出す部分の上で止まっている。右奥の下り棟と右壁との界線は連続し、床面まで延びている。

右壁は、家形石棺付近に対し、屍床部分が一段外側に出た形状になっている。外側に出た屍床側は丁寧に整形され、加工痕をあまり残さないが、石棺に近い部分では丸刃状の工具痕を多く残しており、特に鑿形になった界線の部分では各方向から加工した痕跡を明瞭に残している。右前側の下り棟は軒線の部分まで明瞭な界線を残すが、右袖との界線は不明瞭で丸くなっている。

右袖は右壁から緩やかに曲がってきて、右袖を形成し、玄門との境に10cm程の段を

残している。右壁からの界線が僅かに続いているが、右袖全体を貫通する棟線は表現されていない。玄門との境の段は、玄室内側から見ると、幅9cmで床面から始まり、玄門のカーブに合わせてようにやや傾斜しながら約1mの高さまで上った後、右壁側に反転し天井部分に吸収されて途切れている。こうした構造の類例は知られておらず、この構造が何を表現しているかは不明であるが、横穴墓自体の拡張の可能性もあり、今後の類例を待ちたい。

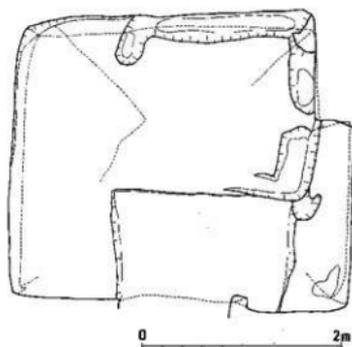
家形石棺は、奥壁に並行に、やや右に寄せた位置に置かれていた。高さ1.1m、幅1.95m、奥行き1.2mを測り、前面に幅2.3m、奥行き95cmの石床を備えている。家形石棺の蓋石は非常に偏平で、かろうじて棟線が見えるが、下り棟は識別できない。蓋の厚さは約30cmあり、内面の掘り込みは無い。蓋石は平面台形を呈し、幅80cm、前側の軒で長さ1.65m、後ろ側で1.92mを測る。左壁は幅35~50cmの2枚の石で構成される。奥壁は大ききの異なる3枚の石で構成され、左隅の石に朝込みを持つ。奥壁の各石の幅は左のものから42cm、47cmで、右側の大きな石は1.25mを測る。左奥では、長辺で短辺を挟み込む形になっているが、右奥では右壁側に朝込みがあり短辺で長辺を挟み込む形になっている。右壁は1枚で構成され、幅95cmを測る。両袖石は丸く面取りされ、柱状の形状を呈す。右側の袖石は幅45cm、奥行き25cmで、右側面が丸く面取りされる。横口に当たる部分で、基底部から10cm程の高さより上側が朝込みを持っており、あたかも板等で閉塞できるかのようにになっている。左の袖石も同様の形状を呈すが、幅32cm、奥行き27cmとやや太く、狭い印象がある。

底石は4枚の石材で構成する。奥側の2枚は、奥壁と側壁の内側に据えられ、手前側の2枚は、袖石が据わる部分を削り込んでいる。手前側の底石は、それぞれ横口の仕障を断面「L」字形に造り出している。仕障の位置は袖石の朝込みに、平面では一致しないが、高さは揃えている。仕障部分の前面下半は前方に向かって小さく庇状を呈し、前の石床に続かせている。

前面の石床は、3面に仕障を造り出すものである。現状では、石材の劣化が著しいが、6枚の石で構成されているように見える。左側部の石は、長さ1m、幅21cmで、左側面から全面に曲がる位置までの仕障を造り出している。前面の石は大小2枚を使用し、右のものは幅1.3m、奥行き55cmで、やはり、「L」字形に仕障を造り出す。後ろ側の石は劣化が著しく細かい状況は不明である。

玄室内からは土器類は出土しなかったが、勾玉(73)、刀子(74-1)、鉄釘(74-2~6)が出土している。遺物は全ての埋土をふるいにかけて検出したもので、石棺や石床上からは出土していない。鉄釘の出土状況から左側の石床上には木棺が置かれていたものと思われる。

石棺・石床を除去したところ、「コ」字形に一段高くした部分が現れた。低くなった部分は玄門左壁に続き、約1m玄室内まで延び、ほぼ直角に曲がる。右側は玄門右壁から約50cm右壁側に入った右袖から始まり、家形石棺の前部石床の直前で止まる。その先は、崩れるように丸く落ち込んでいる。



第49図 第1号横穴墓完掘状況(1:50)

左側の石床の下部には、何も施設は見られなかったが、床面を削りだした段と石床の面は揃えられている。

同様に、家形石棺前部の石床もその前面を段に合わせて掘えられ、右前の角が、右側の段の丸く落ち込んだ部分に当てられている。

家形石棺の置かれていた位置には、石棺の奥壁・右壁・左壁の一部に当たる部分で、溝状に落ち込みが見られる。また、前部の石床についても前面右側から右壁相当部分まで溝状に掘られていた。

玄室平面形が不整形な点、石床の石の並びが不自然な点などから、玄室の拡張や石床の並び変えなどを想定したが、石棺を取り去った状況からは、当初からこの状況であった事が推定できる。すなわち、石棺・石床の面は、床面の段と一致しており、床面の段と左壁との位置関係から石床の石の並びが不自然になったと思われる。また、右壁の造作については、整形が不十分な場所は、天井や各界線など細部のみで、大きく加工痕を残す位置は、右壁の飛び出している部分のみである。この部分は、家形石棺右壁との間に石を詰め、支えている節もあり、家形石棺の組立に必要な事も考えられる。家形石棺を掘えた痕跡なども考慮し、拡張・改変は無く、むしろ未完成の横穴墓に家形石棺を持ち込んでしまった事が考えられる。

**第4号横穴墓** 第4号横穴墓は、第1号横穴墓に隣接する標高20m付近に位置する。第1号横穴墓以上の広大な前庭部を持ち幅3m以上、長さ11m以上、埋土の深さ約4mであった。

埋土の状況から少なくとも2回以上の追葬の痕跡が認められる。初葬時には55より下層に見られるように細かく丁寧な埋め戻しを行っているが、前庭部阿側縁近くは地山風化したような褐色の土を厚くいれているようである。その上面を斜めに削るように最初の追葬が行われているが、追葬時の埋め戻しは初葬時に比べると雑で、大きな土の塊が見られる。追葬時に使用された褐色土中には埴輪片や古い様相を示す須恵器片が多く見られ、上方の島田1・2号墳の墳丘を削って埋め戻している事が解る。8・4より上の黄色の埋土は最終的な埋め戻しと言うより自然崩落的に埋没しているような印象が強い。最終追葬時の掘削痕と考えられ、遺物はまったく含んでいない。前庭部縦断面の土層堆積状況でみると、前庭部先端側についてはほとんど水平堆積で積極的な埋め戻し痕には見えない。羨道部付近については丁寧な埋め戻しが行われているが、追葬時に切った痕跡でも羨道に向け斜めに掘り進んでいる痕跡が見えるのみで、前庭部先端側は大きな造作を加えていないように思われる。こうした状況から、初葬時についても広大な前庭部を完全に埋め戻す事は行っておらず、羨道部を完全に被覆し、前庭部は斜めに落ち窪むような形で埋め戻しが行われたものと思われる。初葬面以後の複雑な堆積は追葬時の掘り返しによるものが大半と思われ、最終的に前庭部が完全に埋没するのは自然崩落に依るところが大きいであろう。

前庭部奥の両隅には、床面から大きく離れない位置に須恵器が見られた。左隅では須恵器蓋(75-5)・坏(75-8)があり、右隅には蓋(75-7)・坏(75-10)・長頸壺(76-2)が出土した。いずれも近い時期に置かれたと見られる。

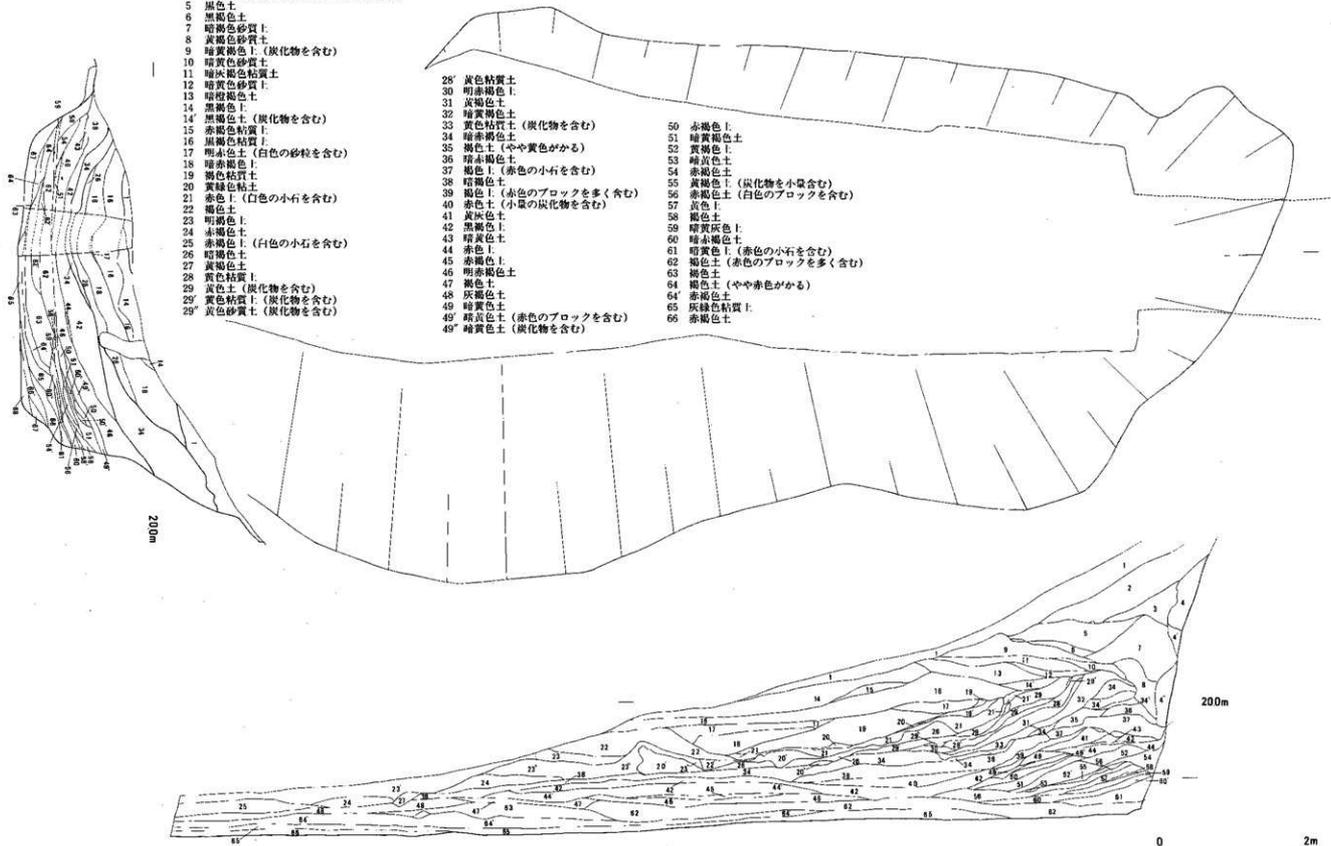
羨道には、天井の崩落土の巨大な塊が見られるが、その上に埋土が見られない事から、最近の崩落と考えられる。天井崩落土の下方の埋土は、中程で、緑色粘土の薄い層があり、一時この面が露出していたと見られる。

羨道を完掘すると、須恵器蓋(75-4)・長頸壺(76-1)を床面直上で検出した。須恵器蓋(75-4)は、

第4号横穴墓土色

- 1 表土 (明褐色土)
- 2 表土 (褐色土)
- 3 暗黄褐色土
- 4 暗黄褐色土 (赤色のブロックを含む)
- 4' 暗黄褐色土 (赤色のブロックを非常に多く含む)
- 4'' 暗黄褐色砂質土 (赤色のブロックを含む)
- 5 黒色土
- 6 黒褐色土
- 7 暗褐色砂質土
- 8 黄褐色砂質土
- 9 暗黄褐色土 (炭化物を含む)
- 10 暗黄色砂質土
- 11 暗灰褐色粘質土
- 12 暗黄色砂質土
- 13 暗褐色土
- 14 黒褐色土 (炭化物を含む)
- 15 赤褐色粘質土
- 16 黒褐色粘質土
- 17 暗赤土 (白色の砂粒を含む)
- 18 暗赤褐色土
- 19 褐色粘質土
- 20 黄緑色粘土
- 21 赤色土 (白色の小石を含む)
- 22 褐色土
- 23 明褐色土
- 24 赤褐色土
- 25 赤褐色土 (白色の小石を含む)
- 26 暗褐色土
- 27 黄褐色土
- 28 黄褐色粘質土
- 29 黄色土 (炭化物を含む)
- 29' 黄褐色粘質土 (炭化物を含む)
- 29'' 黄色砂質土 (炭化物を含む)

- 28' 黄色粘質土
- 30 暗赤褐色土
- 31 黄褐色土
- 32 暗黄褐色土
- 33 黄色粘質土 (炭化物を含む)
- 34 暗赤褐色土
- 35 褐色土 (やや黄色がかかる)
- 36 暗赤褐色土
- 37 褐色土 (赤色の小石を含む)
- 38 暗褐色土
- 39 褐色土 (赤色のブロックを多く含む)
- 40 赤色土 (少量の炭化物を含む)
- 41 黄灰色土
- 42 黒褐色土
- 43 暗黄色土
- 44 赤色土
- 45 赤褐色土
- 46 暗赤褐色土
- 47 褐色土
- 48 灰褐色土
- 49 暗黄色土
- 49' 暗黄色土 (赤色のブロックを含む)
- 49'' 暗黄色土 (炭化物を含む)
- 50 赤褐色土
- 51 暗黄褐色土
- 52 黄褐色土
- 53 暗黄色土
- 54 赤褐色土
- 55 赤褐色土 (炭化物を少量含む)
- 56 赤褐色土 (白色のブロックを含む)
- 57 黄色土
- 58 褐色土
- 59 暗黄褐色土
- 60 暗赤褐色土
- 61 暗黄色土 (赤色の小石を含む)
- 62 褐色土 (赤色のブロックを多く含む)
- 63 褐色土
- 64 褐色土 (やや赤色がかかる)
- 64' 赤褐色土
- 65 灰緑色粘質土
- 66 赤褐色土

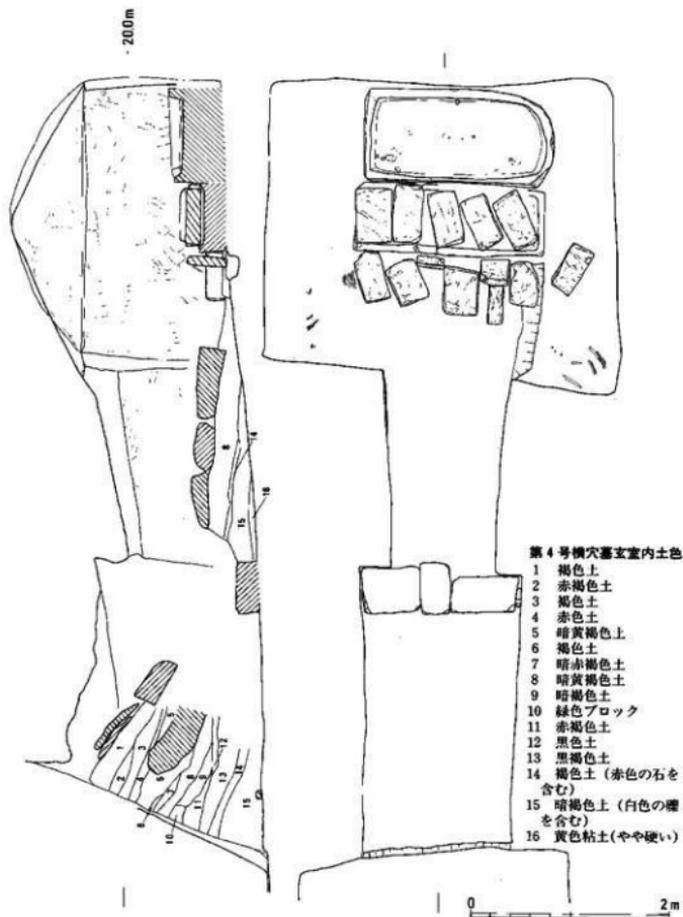


第50図 第4号横穴墓前底部土層断面図 (1:50)

前庭部隅で検出した須恵器類よりも明らかに下層で検出し、形態的にも古い要素を持っている。床面からの出土でもあり、初葬の時期を現すものと思われる。羨道は、幅1.5m、高さ1.4mで、長さは2.8mにもなる。前庭部との境には、僅かに段がある。

閉塞石は、3枚の台石を置き、その上に切り石3枚を立てかけて閉塞していたようで、その内右端の1枚は、大きく前方へ倒されていた。

閉塞石の台石はいずれも高さ25cmだが、左のものは幅59cm・奥行き46cmを測り、横長に置かれる。中央のものは幅31cm・奥行き47cmで立長に、右のものは幅68cm・奥行き37cmで横長に置かれている。掘える方向や個々の大きさには差があるが、前側に当たる面は、意識して合わされているように思え

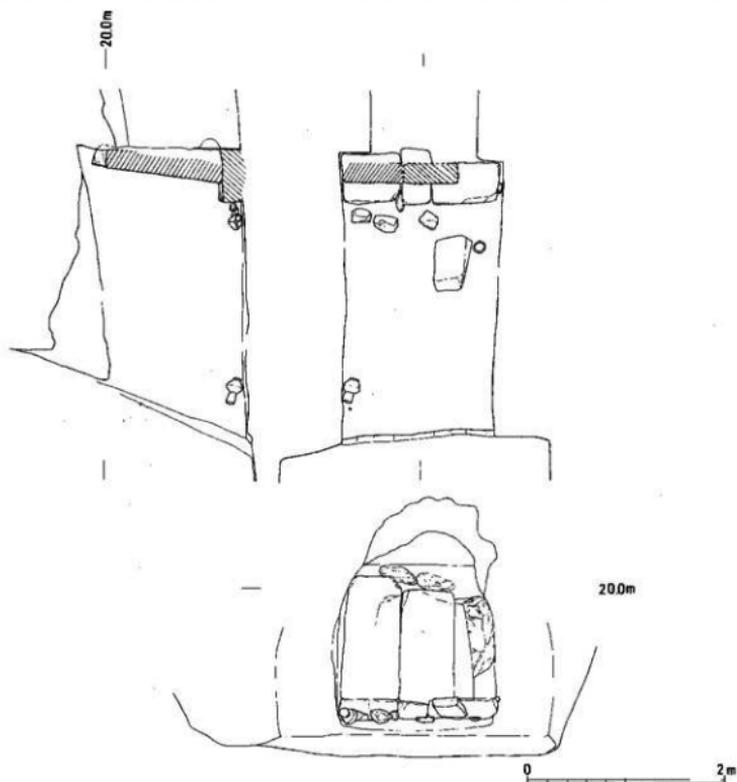


第51図 羨道部土層断面図・支室内遺物検出状況(1:50)

る。

閉塞石は直方体で面取りされるようなものは無く、3枚で構成される。左と中央の2枚は完全に直立し、閉塞状態を保っているが、右の1枚は前方に大きく引き倒されており、検出時の状態でも玄室内に入る事が可能であった。左のものは高さ1,23m・幅56cm・厚さ28cmを測るが、中央のものは高さ1,14m・幅55cm・厚さ26cmと、やや小さい。前方に引き倒されているものは残存長62cm・幅33cm・厚さ21cmと小さく、この大きさでは閉塞できないが、上端に当たる部分が破損しており、台石前方に散在する石材部分が破損したものであろう。引き倒された閉塞石は奥側で床面に接地し、前側でも5cm程度の高さしか離れていなかった事から追葬時に倒され、復元されなかったものと考えられる。閉塞石が据えられた位置は、台石の前側の面から約20cmの位置である。また、閉塞石裏側でも中央の台石で約15cm、左側の台石で約10cm玄門側に出ている。閉塞石・台石は凝灰岩製と考えられる。

玄門の正面には、手鐮状工具と思われる幅5cm程の直線刃による削痕が多く見られた。削痕は各閉塞石の上端に当たる部分と右袖で、上端の削痕は、閉塞石を倒そうとして付けられたように見える。



第52図 第4号横穴墓閉塞状況(1:50)

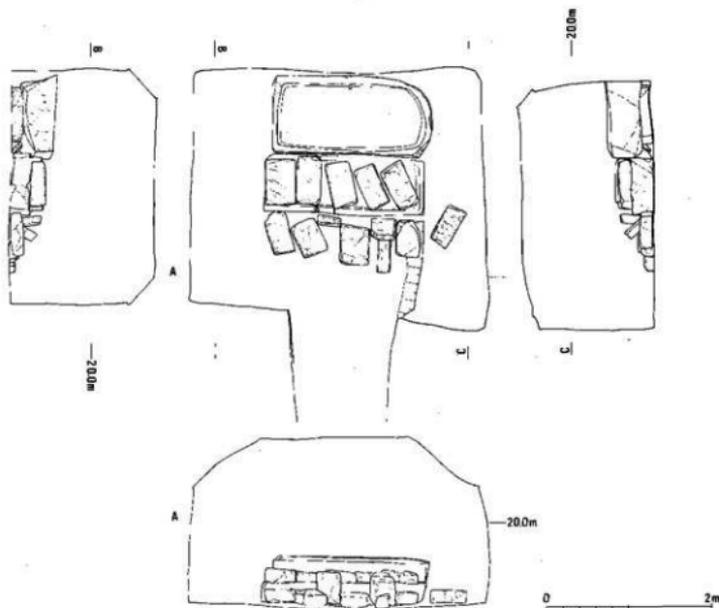
また、右袖の削痕は右側の閉塞石を倒した跡の隙間が狭く、中に入れなかったために拡張したような状況であった。追葬時に付けられたものと思われるが、追葬時に開ける閉塞石は、倒せるものを探しており、また、倒した後も入りやすいよう玄門を壊し、広げているようである。

玄門は開口部で幅1.05m・高さ1.13m、玄室側で幅1.08m、高さ1.5mを測り、1.93mもの長さを持つ。玄室内から閉塞位置付近にかけて大きく傾斜しており、玄門開口部と玄室側の比高差は約30cm、羨道先端と玄室床面の比高差は60cm近くなる。羨道と玄門部、玄門部と玄室との間は、いずれも段は無い。玄門部の埋土からは遺物は出土しなかった。

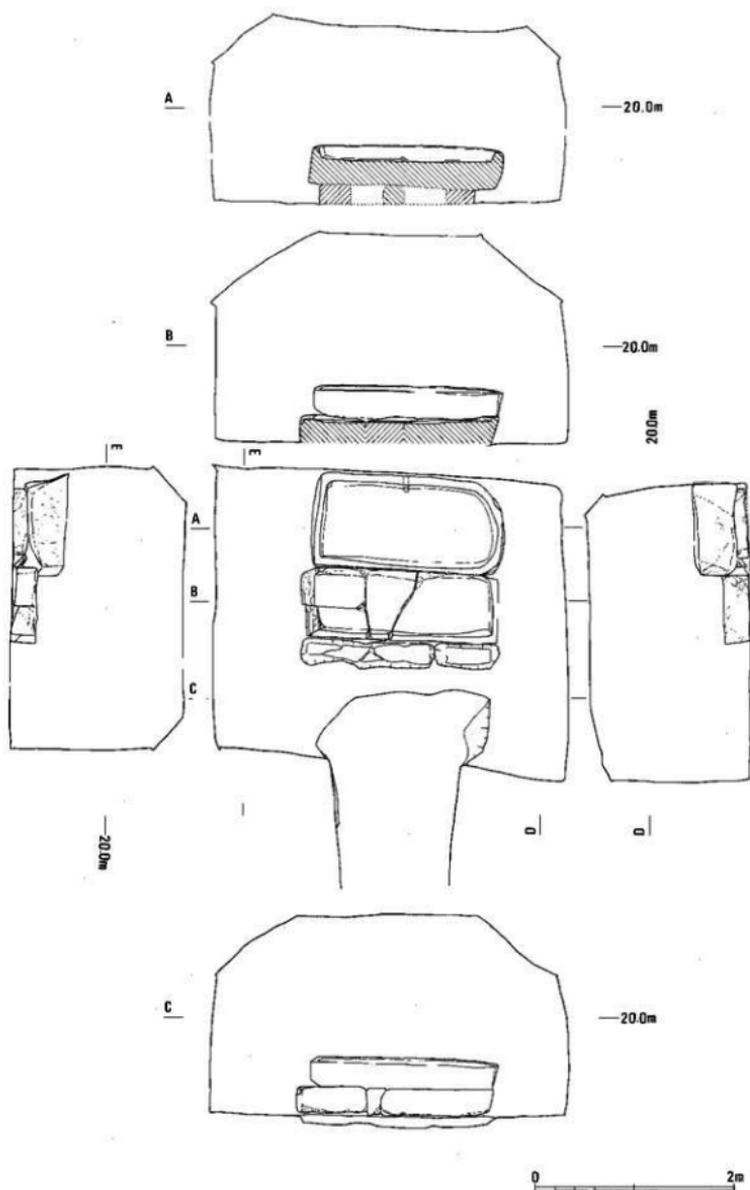
玄室内は、平面形で幅3.48m、奥行き2.95mを測り、ほぼ正方形を呈した非常に広い面積が確保される。整正家形平入りで、非常に明瞭な軒線を持ち、隔壁面は直立する。幅広く取られた棟の界線はやや不明瞭だが、下り棟は明瞭に表現されている。床面から天井までの高さは、2.15mを測る非常に高い造りで、大人が立つに十分な高さがある。

玄室内の埋土は、玄門からの土砂の流れ込みを除き少なく、1cm程の灰色土が被るのみであった。玄室内部には、奥壁に並行に2基の巨大な石床と用途不明の石材が見られ、周辺に人骨が点在していた。石床は手前側のものから1号石床・2号石床と呼ぶ。石群・石床は凝灰岩製と考えられる。

人骨は、およそ3箇所に分かれて見られた。2号石床上面には、手前左側に成人男性と思われる頭骨が、中央と右隅に歯が数個見られた。また、1号石床の手前左側には上腕骨等数点が、玄室右袖隅には大腿骨等数点が集中して見られた。出土状況から被葬者は複数で、人骨は集骨された状態と考え



第53図 第4号横穴墓玄室内石群検出状況 (1:50)

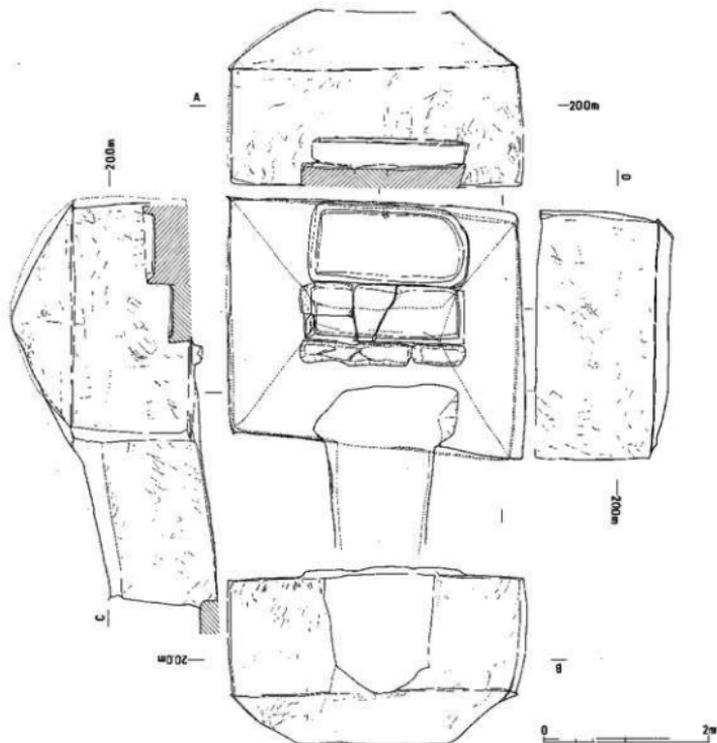


第54图 第4号横穴墓石床实测图 (1:50)

られる。2号石床上には刀子の残片が見られたほか、玄室内から須恵器小片が出土している。

1号石床上とその前面には、板石が多数置かれていた。1号石床上には5枚の板石が並ぶように見られた。長さ50cm、幅30cm、厚さ15cm程の切り石を使用し、左2枚は、石床端縁と並行に、右3枚はやや右側に傾いた方向に並ぶ。石の下と石床の間は若干の土が入っているものの2cm以下の隙間しかない。石床前方の石は石床上の石よりやや小振りであるが、8枚が見られ、内2枚が立った状態で検出された。左から、2枚が寝かされ、3枚目が完全に立った状態になり、4枚目が寝かされている。5枚目は、その前方に角柱状の石がありそれにもたれかかるように立っていた。6枚目も寝かされており、7枚目は1枚だけ大きく離れてある。石床前方の石群のすぐ左に、集骨された人骨が見られるが、石の下には入っておらず石が現状の位置に置かれた後に集骨された事が解る。

この石群を取り除くと、石床前に溝が現れた。溝は長さ1.65m、幅22cm、深さ12cmを測る。石床前面で立っていた石は、この溝中にあった。この状況から、少なくとも、石床前面の石の内の6枚は、この溝中に立てられていたものと考えられる。同様に、石床上面の5枚も立っていたとすると、玄室右隅に離れてある1枚は、石床上に立っていたものが転落したものと考えられる。石床前面の石が立っ

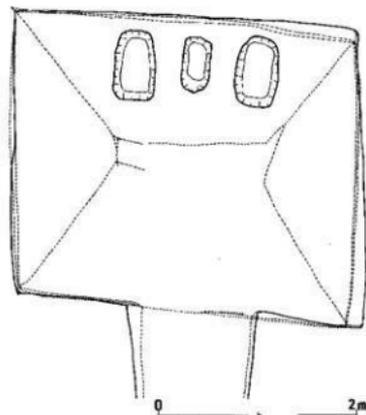


第55図 第4号横穴墓玄室内実測図(1:50)

ていたとすると、1号石床上面から約20cm高くなる。また、石床上の石群では、後方の2号石床より約40cm高くなることになる。

1号石床は、玄室中央に位置し、奥壁に並行な方向に、2号石床に接して置かれている。長さ1.62m、幅72cmを測る平面長方形で、現状では4枚に割れている。上面の縁までの高さ25cmを測り、幅10cm程の縁を巡らせ、3～5cm程度窪ませている。右側から手前側の縁は、明瞭に角を持っているが、左側から奥側の縁はつぶれており、特に奥側の縁は、断面楔形を呈し高さを持たない。上面に置かれていた石群と関係あるものと思われる。上面の縁の位置は若干ずれるところが見られる。左側の2枚は劣化が著しく判断しがたいが、中程の1枚と右側の大きな個体は、縁の幅が僅かに異なり、別の石材と思われる。組み合わせ面が斜めになるが、2枚以上の石を組み合わせている可能性がある。奥側・右側・前側に面する壁面は丁寧に整形され、僅かに断面逆台形になっている。一方、左側に面する壁面は、破損箇所が多く、自然面に近い状態を残している。

2号石床は奥壁に接し、1号石床に挟まれる形で置かれる。1枚石で造られており、左側が四角く、右側が丸い形状で、長さ1.58m、幅81cmを測る。幅約7cmの縁がめぐり、内側は10cm近く彫り込められている。石床そのものは高さ35cmあり、それを3基の台石で、高さ65cmまで持ち上げている。台石は切り石を使用し、高さ約20cm、長さ約60cmで揃えられているが、幅は中央のものだけ小さい。石床の形状は、右側の丸くなっている部分が裏側まで丸く、原石の形状に規制されたものと思われる。縁も原石の形状のまま丸く巡らされたと思われる。奥側・左側・手前側に面する壁面は、縁からほぼ鉛直に削られているが、右側の面は飛び出した部分を削り落とす程度で、大きな加工は加えていない。裏面は、やや丸底気味だがおよそ水平になるように削られている。石床内底面は、水平に造られているが、縁の部分は奥側が高く、底からの高さは前側で6cm、奥側で11cmを測る。内底面には加工痕を多く残すが、縁の上面は丁寧に調整されている。内底面奥側中央から縁の壁面には、水抜き穴が設けられており、玄室奥壁に向かって斜めに延びている。縁の上面に対して内底面の加工が雑に見える事から内底面に遺体を安置するに際しては有機質の敷物を使用したと思われる。

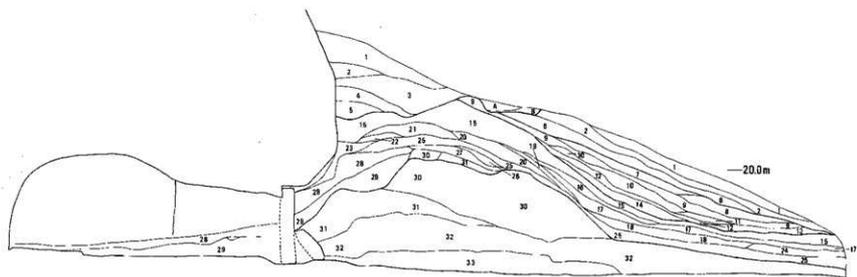
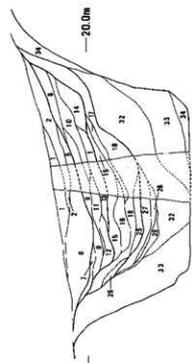
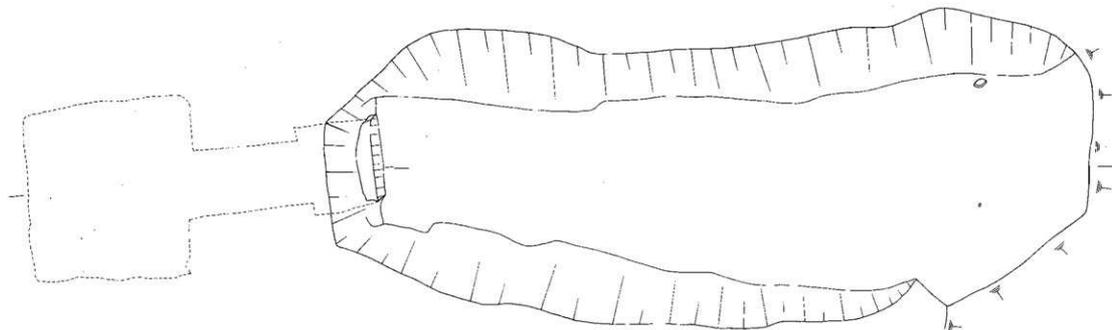


第56図 第4号横穴墓玄室内完備状況(1:50)

玄室床面には、凝灰岩の小塊が落ちており、最終的な加工は石床の据え付け後に行ったものと考えられる。

2号石床の幅は、玄門の幅にほぼ一致する事から、このままの形状で玄室に持ち込む事はできない。当然、立てて持ち込んだものと思われるが、2号石床の形状から、非常に不安定なものになると思われる。そうした事から、石床の原石である玉石を持ち込んで、玄室内で整形した事が予想される。

玄室の各壁面は丁寧に整形され、各界線も明瞭である。周全ての面に軒線が施されている。軒線は、壁面から鉛直方向に深く彫り込まれてから犬井各面につながるようになっており、天



第3号横穴墓土色

- |                         |                        |
|-------------------------|------------------------|
| 1 暗褐色土                  | 25 黒褐色土 (礫を含む)         |
| 2 暗褐色土                  | 26 黄褐色土                |
| 3 明褐色土 (白色の小石を含む)       | 27 灰褐色土 (炭化物を含む)       |
| 4 黒褐色土                  | 28 暗褐色土                |
| 5 暗褐色土 (4に似る)           | 29 赤褐色砂質土              |
| 6 明褐色土                  | 30 黄褐色土 (2cmぐらいの小石を含む) |
| 7 黒褐色土                  | 31 灰褐色土 (石を含まない)       |
| 8 暗褐色土                  | 32 黄褐色土 (拳大の礫を含む)      |
| 9 赤褐色土 (炭化物を含む)         | 33 紫褐色土 (白色の小石を含む)     |
| 10 暗褐色土 (白色の小石を含む)      | 34 黄褐色砂質土 (堀川風化土?)     |
| 11 黒褐色土 (白色の小石を含む)      |                        |
| 12 暗褐色土 (10より小石が少ない)    | A 褐色土 (焼上ブロックを多く含む)    |
| 13 暗赤褐色土                | B 炭層                   |
| 14 赤褐色土                 |                        |
| 15 暗赤褐色土 (白色・灰色の小石を含む)  |                        |
| 16 暗褐色土 (白色の小石を非常に多く含む) |                        |
| 17 黒褐色土                 |                        |
| 18 暗褐色土 (拳大の礫を含む)       |                        |
| 19 赤褐色土                 |                        |
| 20 暗赤褐色土 (白色の小石を含む)     |                        |
| 21 赤褐色土                 |                        |
| 22 暗赤褐色砂質土              |                        |
| 23 暗褐色砂質土               |                        |
| 24 明赤褐色土                |                        |

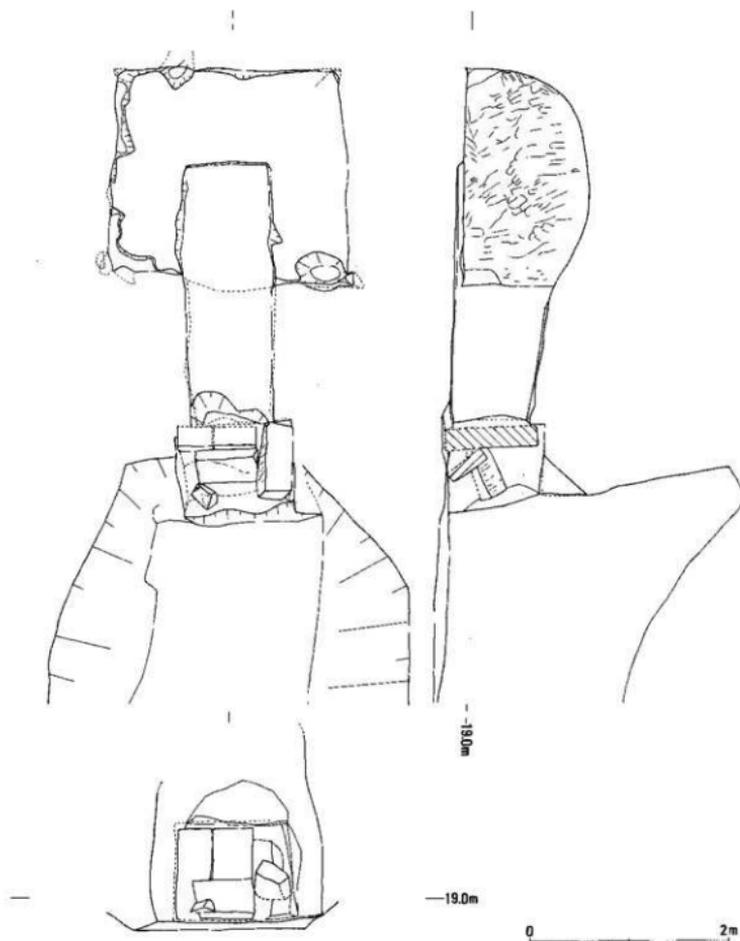
0 2m

第57図 第3号横穴墓前庭部平面図・土層断面図 (1:50)

井面と壁面は連続しない。軒線を構成する面は、広いところでは幅5cmにもなる。

四隅から斜めに立ち上がる下り棟も、同様に深く彫り込まれており、断面楔形になっている。天井の棟の部分は2本の平行線で幅広く表現されているが、棟の右側は剥落しており、他の部分の界線も明瞭ではない。各面は完全に連続しており、各面の折れ目として表現されるだけで、一部で途切れながら、かろうじて判断できる。

各面には、幅5cm程の直線刃を持つ工具痕が確認できる。整形痕と考えられ、床面に近い位置では下方へ向かって、軒線付近から天井は横方向に向かっている。横方向の工具痕は、方向は一定しない。

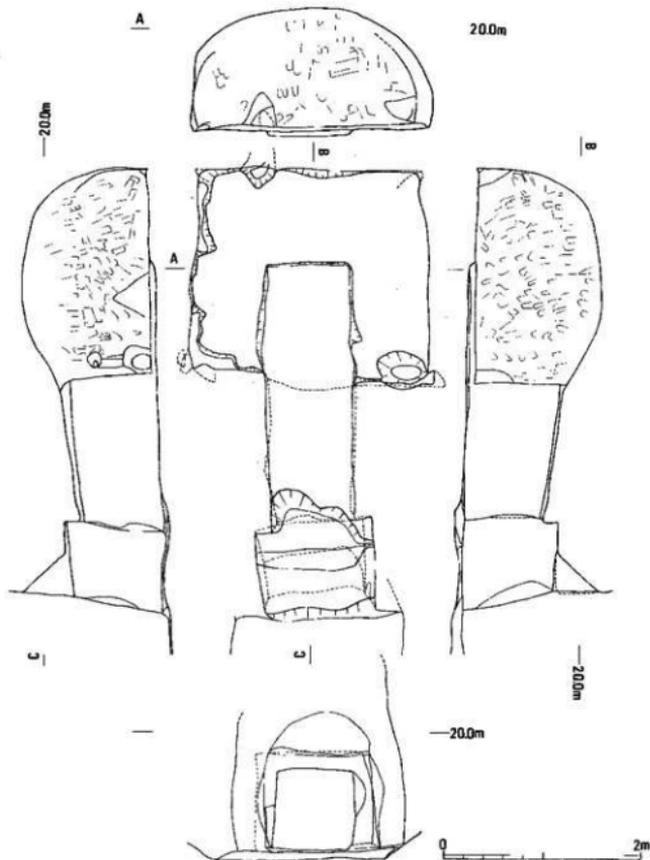


第58図 第3号横穴墓閉塞状況(1:50)

また、荒掘り痕を残す部位は確認できなかった。

2枚の石床を除去すると、奥壁沿いに3箇所の窪みが現れた。窪みは、左のものから長さ70cm・幅35cm、中のもので長さ45cm・幅30cm、右のもので長さ64cm・幅44cmを測り、いずれも深さ5cmに満たない。2号石床に対応するものだが、1号石床の位置には、窪み等は見られない。窪みの大きさは2号石床の台石に一致する事から、あらかじめ掘られたものではなく、石床の重みにより、自然にできたものと思われる。

**横穴墓群の広がり** 第1・4号横穴墓は2基が隣接して、I区西端で検出したが、それ以上東へは連続しなかった。調査区外の西側は、現状では山林のため、確認できないが、少なくとも西へ100m程離れた東出雲電園手前には、1穴が開口しているほか、島田1号墳の西約20mの位置にも天井が陥没し



第59図 第3号横穴墓玄室内実測図 (1:50)

た横穴墓らしき落ち込みが見られる。第1号横穴墓西側には、標高21m付近で、斜面の傾斜が変化し、僅かに平坦面を有するところが続いている。落ち込みは見られないが、横穴墓が連続する可能性がある。

第4号横穴墓の東側、I区の大部分については、横穴墓を掘るには土質が適さなかったものと思える。地山そのものに大差はないが、節離が多く入り、土中に非常に多くの礫を含んでいる。この付近には横穴墓は造られず、次に造られる位置は、II区中央の第3号横穴墓であるが、I区とII区の間には未調査地が広がっており、その間に横穴墓が造られている可能性はある。未調査地内にはやはり標高20m前後の位置に落ち込みが見られる場所が1箇所あった。また、島田遺跡の3基の横穴墓は、調査前の時点ではいずれも明瞭な落ち込みは無く、僅かに傾斜の変わる場所が見られただけであった事から、土質さえ合えば横穴墓が掘られていた可能性は高い。また付近の横穴墓群の状況から、第3号横穴墓が単独で掘られていたとは考えにくく、周辺に横穴墓が存在した可能性は高い。

**第3号横穴墓** 第3号横穴墓はII区中央の標高20m付近で検出した。トレンチ調査時の長廻遺跡第1トレンチに前庭部先端が掛かっており、須恵器蓋(73-1)が出土している。

前庭部は、全長約9m、幅約2.6mを測り、第1・4号横穴墓よりは小さいものの、長大なものである。前庭部は、土質の関係か、玄室と主軸を異にし、前庭部自体もやや東に湾曲したような形になっている。前庭部先端付近で、小量の須恵器片を採集した以外、まったく遺物が無かった。

前庭部の土層断面からは、追葬の痕跡が伺いにくい。基底面から厚い土砂の堆積が見られ、他の横穴墓に見られるような丁寧な埋め戻しは行っていないようである。30黄褐色土より下層は全て黄色の周辺の地山を崩したような土で、大きな塊で一気に埋められている。25黒褐色土が初葬時の埋め戻し面と考えられるが、一見、初葬後には玄室内に侵入していないかのように見える。横断面で見える18暗褐色土より上層が、侵入坑の埋め戻し土と考えられ、前庭部左端から、右奥に向けて掘削したようである。

前庭部上面には小炭窯の跡が見られ、B炭層の下面は赤く焼けていた。A褐色土は炭窯の天井か壁面が崩落した土と考えられ、焼土と考えられる赤色ブロックを多く含んでいる。遺物は含んでいなかったが、埋土が非常に軟らかく、新しい時期のものと考えられる。

前庭部奥は幅1.7mあり、両側から30cmほど内側に羨道部が開く。小さな段を介して羨道部に至り、羨道部は幅1.07m、高さ1.05m、長さ0.95mを測る。中央付近で一部崩壊しているが、奥側の状況から、天井も平らに整形されていたようで、断面長方形を呈す。閉塞石が立つ前後に浅く掘り窪められた痕跡が見られる。

閉塞は切り石を使用している。高さを揃えた3枚の切り石で閉塞し、その手前に押さえとなる薄い石が置かれたようである。閉塞石3枚の内左側の2枚は、高さ95cm、厚さ20cmで、左のものが幅35cm、中央のものが幅43cmを測る。右の1枚は、前に引き倒されており、高さ78cm、厚さ22cm、幅32cmである。押さえの石は、左側の2枚の閉塞石に斜めに立てかけられ、幅65cm、高さ40cm、厚さ14cmとやや小さい。押さえの石の手前にも人頭大の石が落ちていた。閉塞と押さえに使用された4枚の石は、非常に丁寧に整形され、各稜線も直角に近く、各面も平らになるよう幅5cm程のみ状工具で丁寧に調整されていた。石材は、凝灰岩と思われる。

玄門部は長さ1.45m、幅0.87mを測り、羨道に対して非常に長い。天井は断面長方形を呈すが、玄

室に向かって緩やかに上昇しており、羨道側で高さ81cm、玄室側で高さ96cmを測る。玄門と玄室の間には段等の境界を持たない。

玄室は、幅2.4m、奥行き2.1mを測り、幅が僅かに広いが、ほぼ正方形を呈す。壁面に四隅の界線を明瞭に残す四注式だが、天井には明瞭な界線がなく、丸天井である。天井までの高さは1.3mである。

床面は、約1mに亘って、玄門から同じ幅のまま平坦に掘られた部分があり、周円の3面を屍床状に掘り残している。屍床状に掘り残された部分の高さは約10cmで、段の部分はそのまま玄門の側壁に続く。床面奥壁から左壁・左袖にかけては、壁側に向かって断面「V」字形に掘り込まれており、排水溝の機能を持つものと考えられる。

天井から各壁面は、幅5cm程の直線刃の工具痕を明瞭に残すが、おおむね丁寧に整形されており、荒掘り痕と思われるような工具痕は見えない。

第3号横穴墓では、前庭部を除き、まったく遺物が見られなかった。

なお、床面から壁面にかけては点々と坑が開いているが、壁面に残された爪傷から、獣によるものと思われる。玄門の角から玄室に、高さ50cm以下の所でほぼ全面に獣の爪痕が見られた。

## 註

- 註1 鳥取県教育委員会 『青木遺跡発掘調査報告書Ⅲ』 1978年  
註2 島根県教育委員会 『石田遺跡・カンボク遺跡・匠古遺跡』 1994年  
註3 出雲考古学研究会 『荒島墳墓群』 1985年  
勝部昭 『安養寺古墳群』 『安来市の遺跡調査報告第1集』 安来市教育委員会 1980年  
安来市教育委員会 『仲仙寺古墳群』 1972年  
安来市教育委員会 『宮上古墳群』 1974年  
安来市教育委員会 『史跡仲仙寺古墳群』 1977年  
註4 山本清 『造山3号墳調査報告』 島根県教育委員会 1967年  
註5 東出雲町教育委員会 『寺床遺跡調査概報』 1983年  
註6 島根県教育委員会 『塩津山1号墳が語る古代の出雲』 1996年  
島根県教育委員会 『塩津山1号墳』 1995年  
註7 調査中、斜面上で小さな平坦面と須恵器を検出した。調査の不手際と火候などの理由から急須須恵器をとり上げる必要が生じ、検出遺構に名前を付けなければならなかった。急斜面に造られた平坦面であり出土遺物もTK-209並行期と考えられる事から、当然横穴墓の前庭部に当たったものと考え、第2号横穴墓と呼んだ。結果的には箱式石棺を内包する土壌を確認し、古墳の可能性も考えられるものとなったが、遺物の整理も並行して行われていたために名称の変更ができなかった。そこで横穴墓については第2号を欠番とし、本報告書編集時点でSK-8と呼び変えている。  
註8 島根県教育委員会 『一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書西地区1』 1993年

## 8 遺物の概要

**石器** 島田遺跡ではⅢ区を中心に石器が出土している。第60図に示したものは黒曜石製石器で、石鏃4点の他、石鏃未製品と見られるもの2点を含んでいる。

60-1は黒曜石製石鏃で島田1号墳周溝内から出土した。長さ14mmを測るもので、ほぼ正三角形を呈し、わずかに抉りを持つ。

60-2も、ほぼ二等辺三角形を呈す黒曜石製石鏃で、深い抉りを持つ。60-1と同様に1号墳周溝から出土している。

60-3も黒曜石製石鏃で側縁に稜を持つものである。一端を欠くが、長さ24mmあり比較的長い。1号墳周溝から出土している。

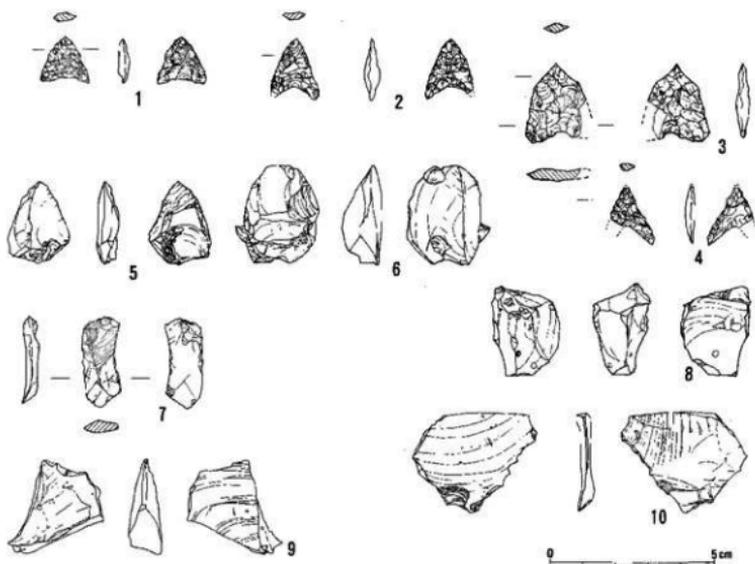
60-4は、I区斜面から出土している。一端を欠くが、非常に深い抉りをもつ精美なものである。

60-5は剥片だが、石鏃未製品と考えられるものである。厚さ6mmあり成形段階のものと考えられる。完成品に比べ、1回の剥離面が非常に大きい。60-6も石鏃未製品と考えられる石核だが、形は不正形で、荒削段階のものである。原石の節理を残しており、一見割れやすそうに見え、製作を放棄したのかもしれない。第1号横穴墓前庭部の上層埋土から出土しており、島田1号墳付近にあったものが横穴墓前庭部の埋め戻しの際に流れ込んだものと考えられる。

60-7は楔形石器と考えられるものである。黒曜石製で、長さ28mm、幅11mm、厚さ5mmを測る。島田1号墳周溝内から出土している。上下両方向からの剥離が見られるが、剥離面は大きく雑で、あまり使用されていない。

60-8~10は、石核・剥片と考えられるものである。いずれも長さ3cm前後を測るもので、島田1号墳の周溝内から出土している。形状はいずれも不規則で、何かを作ろうとしたものには見えず、打面調整剥片と考えられる。60-10はフィッシャーが多く見られ、気泡も含んでおり、あまりよい石材ではない。

第61図に示したものは、石斧である。61-1はIII区南斜面を重機掘削中に採取したもので、局部磨製石斧である。大部分が白色で、赤色の節理が入り、赤色の部分で板状に剥離する石材を使用している。長さは16.8cmを測り、基部と側縁を刃潰し加工し、刃部に当たる部分のみを向面から丁寧に磨いてい



第60図 島田遺跡出土石器実測図(1)(2:3)

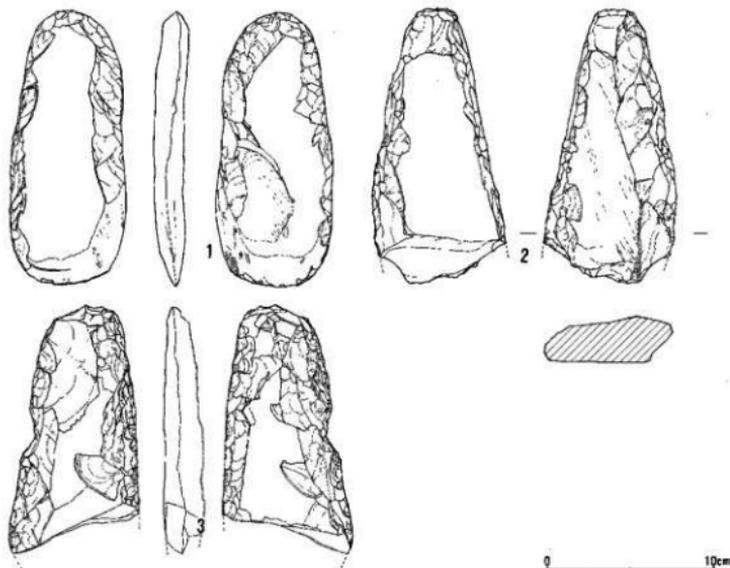
る。側縁以外の両面は板状剥離した剥離面をそのまま残している。基部・刃部とも丸く整形され、両側縁はほぼ平行に延び、平面楕円形を呈している。刃部には両面に使用痕が見られるが、両面とも右側に当たる部分に集中して見られることから、右側に当たる部分を下に、縦弁として、使用されたことが想像される。

61-2は刃部を欠く石斧の基部である。61-1に比べ、厚手の石材を使用し、基部側が極端に細く、平面三角形を呈し、刃部の幅を広く取るようである。石材は、61-1と同様のものである。石材や、刃潰し加工の状況から61-1と同じ局部磨製石斧と考えられる。I区斜面から出土した。

61-3も同様の石材による石斧で、刃部を欠いている。61-2よりも基部の幅が広いが、側縁は刃部に向かって緩やかに開き、刃部の幅を広く取っているようである。側縁の刃潰し加工は、61-1,2に比べ、1回の剥離が大きい反面、板状剥離した剥離面をあまり残していない。

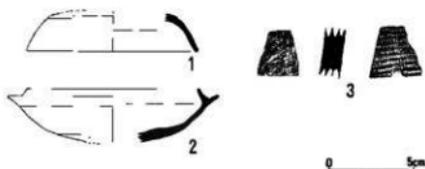
島田遺跡で出土した土器は、基本的に古墳時代のもので、縄紋・弥生時代のもものは全く含まれておらず、出土した石器の内、完成品と考えられるものが石鏃・石斧しか無かったことから居住地を離れて生産活動中に落としたものとも想像された。しかしながら、黒曜石製石器の出土は、石斧同様、III区とI区斜面からに限られており、未製品と考えられるものや、同形の石器、同じ石材を使用した石斧があり、生産活動中とは思えない状況も見られる。

**SK-8 出土遺物** 第72図はSK-8から出土した須恵器である。SK-8は南側の石材を欠く箱式石棺で、須恵器はいずれも棺内と考えられる部分から出土している。



第61図 島田遺跡出土石器実測図(2)(1:3)

62-1は須恵器の蓋で、復元口径約10cmの小さなものである。全面ナデ調整され、口縁部にもアクセントは見られない。胴部に小さな段を持っている。62-2は、須恵器の坏で復元口径から62-1とセットになるものと思われる。底部外面に回転ヘラケズリを残し、他の部分はナデで仕上げる。

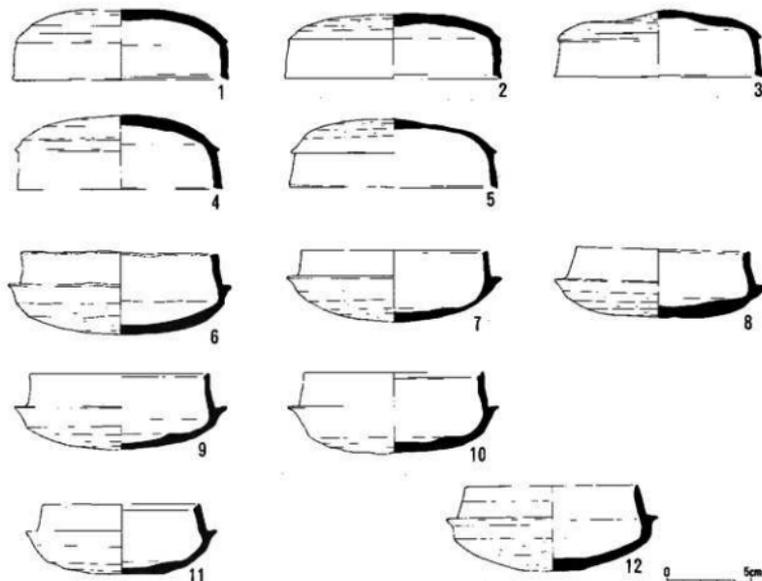


第62図 SK-8出土遺物実測図(1:3)

62-3は、須恵器瓶の小片で、外面に平行タタキを、内面に同心円文の押さえ具の痕跡を残すものである。62-3は、SK-8から出土してはいるが、丘陵頂部から転落してきたものと思われる。SK-8直上には、須恵器を伴う遺構は見られないが、3区東の島田3号墳周溝内からは須恵器瓶片が出土しているほか、3区中央からも少量ながら須恵器瓶片が出土していることから、丘陵上のかかなり広範囲にわたって、須恵器片が撒かれていたものと想像される。

SK-8出土の坏は、TK-43併行期と考えられ、SK-8は6世紀末から7世紀初頭に造られたものと考えられる。

**島田1号墳出土須恵器** 島田1号墳は、周溝を中心に多量の遺物が出土している。第63図に示したものは須恵器坏類である。計12点の内10点が、墳丘東側からまとまって出土しているが、蓋と身は必ず



第63図 島田1号墳出土遺物実測図(1:3)

しもセットにはならない。

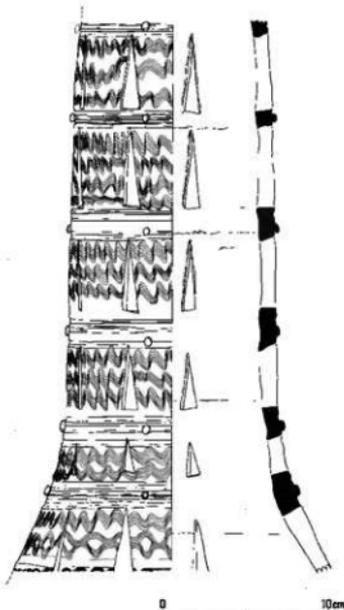
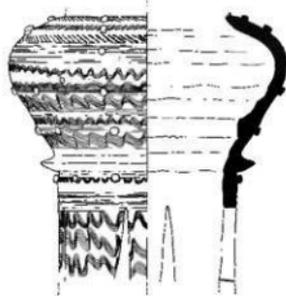
63-1~5は蓋で、いずれも頂部にヘラケズリを残すものである。口縁部内側に明瞭なアクセントを持ち、肩部は大きく外側に張り出すもので、肩部から口縁部にかけてはほぼ垂直に立ち上がる。頂部以外の外面と内面はナデ調整する。口径は、いずれも12.5~13cmとほぼ一定しており、器高はゆがみの大きい63-3・5を除き約5cmである。

63-6~12は坏である。口縁端部が内側に張り出し、上面に面を造るもの(63-6)、口縁端部に沈線状のアクセントを持つもの(63-7~11)、口縁端部にアクセントを持たないもの(63-12)の3種類に大きく分けられる。

63-6は、底部の広い範囲にヘラケズリを残し、カエリはほぼ垂直に張り出している。口縁部は内面底部からほぼ完全に直立し、口縁端部を内側に拡張するような状態で状面に面を作り出している。口径約12cm、器高約5cmを測る。

63-7~11は口縁部内側に沈線状のアクセントを持つものであるが、カエリから口縁部にかけて直立するもの(63-7~10)と、やや内傾するもの(63-11)がある。63-7~10は口縁端部を除く器形は63-6とほぼ同様だが、口径・器高ともやや小振りになっている。63-7・9など、器壁が極端に薄いものも見られる。63-11は口縁端部に沈線状のアクセントを持つものであるが、カエリから口縁部にかけての立ち上がり、大きく内傾するものである。カエリも小振り、底部のヘラミガキの範囲もやや狭い。口径9.5cm、器高4.3cmを測り、他の坏に比べ小さい。

63-12は口縁端部にアクセントを持たないものである。底部外面の広い範囲にヘラケズリを残し、カエリはほぼ水平に張りだしている。内面底部から口縁部にかけては、わずかに内傾して直線的に延び、口縁端部は細く尖らすような形で収めている。口径約10cm、器高約5cmを測り、大きさの点では他の坏と変わらない。

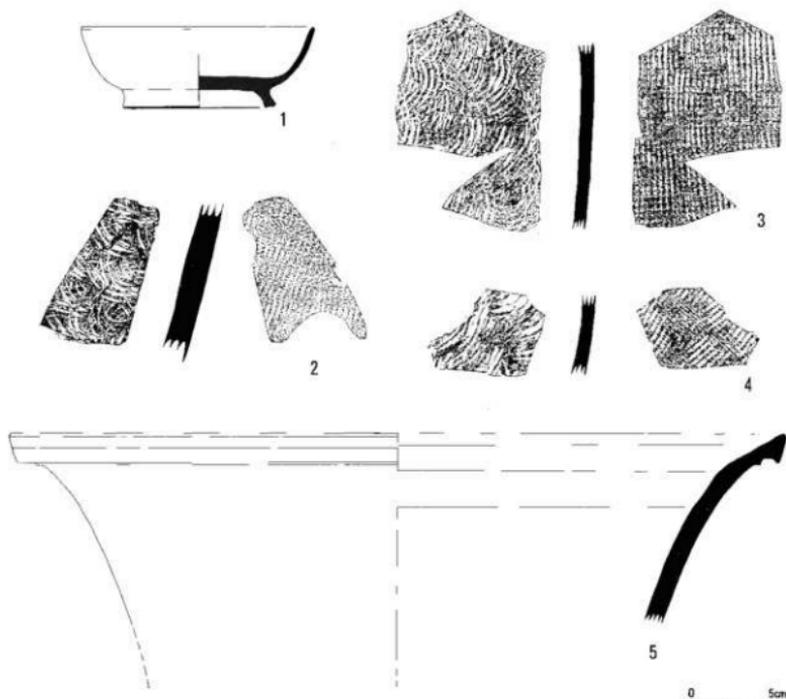


第64図 島田1号墳出土遺物実測図(2)(1:3)

第64図に示したものは、筒形器台である。島田1号墳の筒形器台は1個体と考えられるが、島田1号墳周溝の西側からその下方の第1号横穴墓前庭部にかけて出土した小片を接合したもので、筒部と上部の破片は接合しない。口縁部と脚基底部を欠くが、ほぼ全体像が解る。破片出土の中心は、島田1号墳南西側の周溝内で、付近は、横穴墓前庭部の埋め戻しの際に大きく削平された部分に近い。このことから、筒形器台は、墳丘のやや西側に置かれていたことが想像される。

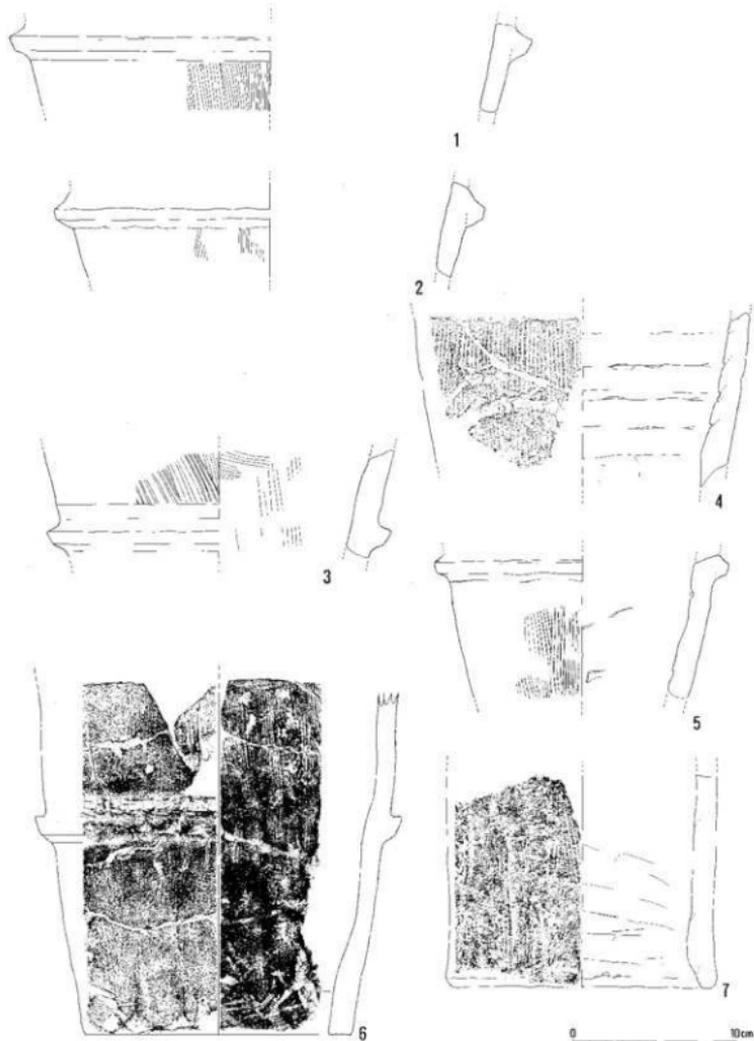
筒部の径は、約12cmを測り、ほぼ直立するが、壺受け部に向けて、わずかに窄まる。筒部は、少なくとも30cm以上にわたって直線的な部分があり、基底部は緩やかに開く。約5cm間毎に数珠の沈線で区画し、その間は2～4段にわたって櫛描き波状文が施され、透かしが開く。透かしは、三角形を呈し、各区画毎に6方向に開けられる。外面から刃物を使用して切り開かれ、透かしの高さは、ほぼ各区画の長さに等しく、幅は1～1.5cmになる。沈線で区切られた部分には、ボタン状の物が貼り付けられているが、透かしの割付とは一致せず、任意方向か、もしくは5方向に付けられているようである。

上部は、壺部まで、一体に表現されるが、壺の底は省略される。筒部と壺部の境は、断面三角形の突帯を貼り付けて表現される。突帯は、その下方に波状文が見えていることから成形最終段階で付け

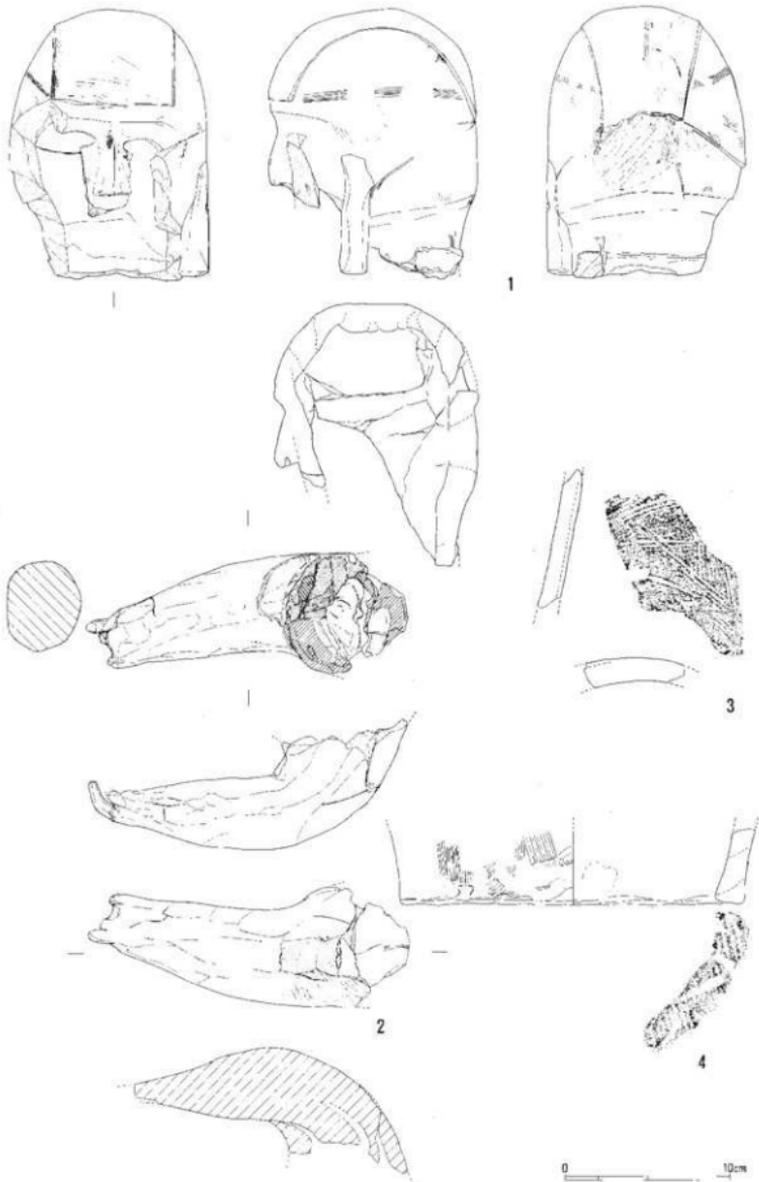


第65図 島田1号墳付近出土遺物実測図(1:3)

られたことが解る。壺部の肩部より下方の調整は、基本的に筒部と共通で、浅い沈線による区画の間を1段の波状文で埋め、沈線上を中心にボタン状のものを貼り付けている。肩部から上方は、やや幅の広い沈線帯を施し、波状文は見られない。肩部から頸部にかけては、波状文と同じ原体によると思われる斜行刺突文を方向を変えながら3条にわたって施している。



第66図 島田1号墳出土遺物実測図(3)(1:3)



第67図 島田1号墳出土遺物実測図(4)(1:3)

内面は、全面ナデ調整で、輪積みの痕跡を所々に残している。青灰色を呈し、焼成は良好である。

第65図に示した須恵器は、島田1号墳周辺から出土したものであるが、島田1号墳には伴わない可能性が高い。

65-2は、島田2号墳東側周溝と考えられる場所から出土した高台付きの坏である。底部外面に回転糸切り痕を残し、高台は高く、やや外側に張り出す。体部は、高台からわずかに離れて大きく湾曲し、ほぼ直線的に口縁部に至る。口縁端部は、ほぼ丸く収める。内外面ともにナデ調整する。灰褐色を呈すが、焼成は良好である。7世紀後半のものと考えられ、島田2号墳、もしくは第4号横穴墓に伴うものと考えられる。

65-2~4は、壺胴部の小片である。これらの壺片は、各墳丘か横穴墓に伴うものと思われる。

65-5は、須恵器壺の口縁部である。頸部から口縁部にかけては非常に高く作られるが、外面もナデ調整され素文である。口縁端部は、外面から下方に向けて大きく垂れ下がり、更に小さな段を持つ。内面はナデ調整されるが、所々に強いナデがみられ、帯状のくぼみや指頭圧痕をわずかに残している。青灰色を呈し、焼成は良好である。島田1号墳周溝西側から出土しており、墳丘2か横穴墓に伴うものと思われる。

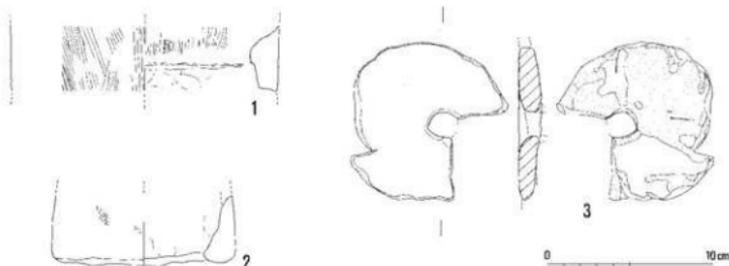
**島田1号墳出土埴輪** 埴輪片は、島田1号墳周溝内のほぼ全域から出土したほか、南側下方の第1・4号横穴墓前庭部からも出土している。

第66図に示したものは、円筒埴輪である。この内、66-3が第1号横穴墓の前庭部から、66-7が第4号横穴墓の前庭部から出土している。いずれも断面台形のタガを有し、縦方向のハケメを施す。透かしに相当する部分の破片は検出できなかった。

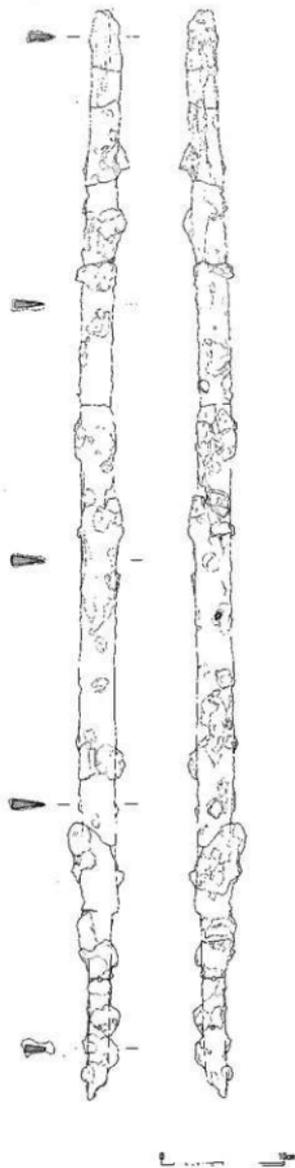
66-1・2は中位のタガに相当する部分のと考えられるが、磨滅しており、内面の調整は不明である。タガ上面に広いナデを施し、器面には縦方向のハケメを施す。

66-3は内面調整を残すものである。器面は縦から斜め方向のハケメを残し、タガの上面に強いナデを施す。内面調整は、方向が一定しないが、ハケメが見える。

66-4・5は、底部に近い位置の破片と思われる。外面には縦方向のハケメが施されるが、内面には見えない。内面には、粘土紐巻き上げによる粘土帯の痕跡が多く残っている。66-4には、内面下方にケズリが見られる。



第68図 島田1号墳出土遺物実測図(5)(1:3)



第69図 島田1号墳出土遺物実測図(6)(1:4)を残す。

66-6・7は、底部である。66-6は、内外面ともハケメを施し、底面を水平に円周方向に削る。内面下方にわずかに横方向のケズリが見られる。66-7は、外面に縦方向のハケメを施すが、内面には、広い範囲で横方向のケズリが見られる。内面底部直上で、内側に肥厚した部分が見られるが、全体にほぼ直立する。底面は磨減が著しく調整は不明であるが、ケズリを施しているものと思われる。

これらの円筒埴輪には、底部調整が見られることから、川西編年のV期に相当し、5世紀末から6世紀前半の年代が考えられる。

第67図に示したものは、形象埴輪と考えられる破片である。島田1号墳周溝西側を中心にまわって出土している。部位の解る破片としては、67-1(人物頭部)・67-2(人物腕部)がある。

67-1は、頭部の破片で、胴体部分と顔の下半を欠いている。頭髪を後方で束ねたように表現されているが、後頭部に後付けで貼られていたと考えられる束ねた部分は欠損している。顔の左右には、みずらが表現されていたようで、底に小さくほみを持つ円筒を貼り付けている。眉は、1本の長い段で表現され、目は、紡錘形に割り抜かれている。鼻の部分は貼り付けではなく一体に成形されており、鼻の穴まで表現されている。口を始め顔の正面の大半の部分欠いているが、入れ墨の表現は見られないようである。内面には、粘土紐の接合痕が明瞭に見られ、首の周りから積み上げていき、最後に頭頂部で塞いだ様子が分かる。

67-2は、人物埴輪の腕と考えられる破片である。指の大半を欠くが、かなり内側から欠けている指があり、その位置関係から右腕と思われる。断面では、隙間が多く見られ、別に成形した腕を胴体に貼り付けた様子が分かる。外面は、ケズリによる面取りが見られ、一部に荒いハケ

67-3はハケ状工具による直弧文状の文様を施した破片である。部位は不明であるが、断面で見ると、横方向のカーブがきつく、表面近くには、別の部位を貼り足したような接合痕が見られる。人物の胴体の一部か、盾のようなものだろうか。

67-4は、基部の破片である。内面はナデ、外面にはハケメを明瞭に残すが、底部は未調整で、繊維状の圧痕を多く残している。同時に出土した円筒埴輪はいずれもケズリによる底部調整が施されており、底部調整のない67-4は、形象埴輪の底部と考えられる。

第68図には、形象埴輪の可能性のある破片を図示した。68-1は、一見円筒埴輪に見えるものであるが、内面は、全面剝離痕である。外面は縦方向のハケメを残し、下端を欠損する。内面下半は、指頭圧痕状に粘土を押しつけた痕跡のネガ型が残され、上半は、ハケメのネガ型が残されている。別々に成形された部位の接合に使用された部分の破片と考えられる。

68-2は、底部と考えられる破片であるが、非常に径が小さい。内面は指頭圧痕を多く残し、外面には、わずかにハケメが見られる。磨滅しており断定しがたいが、底部調整は行わない様である。

68-3は、粘土円盤に穿孔を施したもので、片面については、何かに貼られていたものが、全面的に剝離した状態に見える。胎土の様子から土器よりは埴輪に近いものと思われるが、用途は解らない。

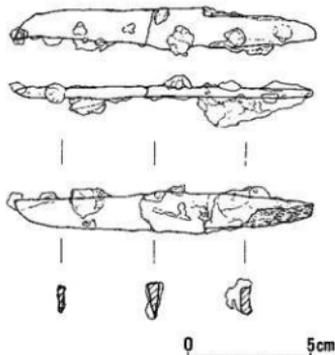
**島田1号墳出土金属器** 第69・70図に図示したものは、島田1号墳から出土した金属器である。いずれも主体部から出土し、69は、主軸に平行して主体部南壁に沿って、70は、主軸に直行して主体部東壁近くから出土している。

69は、大刀である。全長89cmを測る非常に長い大刀で、主体部南辺に沿って置かれていた。茎の部分は長さ14.8cm、幅1.8cmを測り、柄頭側対部方向の端部をわずかに欠いている。目釘穴は、端部から6cmの位置、9.6cmの位置の2カ所に開けられている。

関は峯側は錆が厚く確認できないが、刃部側は明瞭な段差を持って有る。刀身部は、ほぼ断面三角形を呈し、峯側で厚さ約7mmを測る。切先は錆が厚く確認できないが、峯側が直線で、刃部側から丸みを持って切先に終わるようである。直刀であるが、刀身部は、中程からわずかに刃部方向に反っている。切先付近を中心に両面とも木質が付着しており、鞘に入っていたものと考えられる。

70は刀子である。主体部東辺から北に切先を向けて出土しており、この刀子の出土から東側が頭位方向であったと考えられる。

刀子は全長11.9cm、幅1.6cm、厚さ4mmを測るもので、全体に厚く錆が付着している。茎は長さ4.3cmあり、端部を中心に厚く錆が付着しており、目釘穴は確認できなかった。また、端部の片面には木質の付着が見られ、柄の一部と考えられる。関は、刃部側の片側のみである。刀身部は、断面三角形を呈すもので、切先に向けてわずかに細くなり、緩やかに湾曲して切先に至っている。また峯側から見た全体の厚さでも茎近くが最も厚く、切先近くでは厚さ2



第70図 島田1号墳出土遺物実測図(7)  
(1:2)

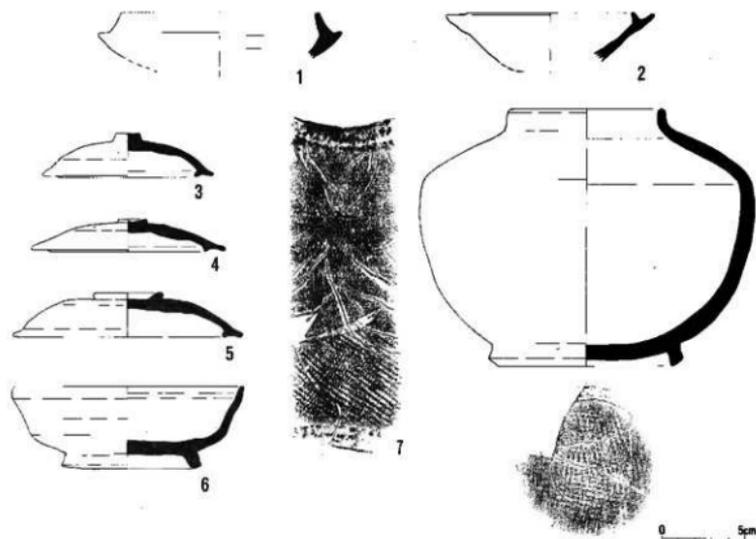
■まで薄くなっている。

島田1号墳から出土した遺物は、大刀・刀子を除き、すべて周溝内、もしくは、下方の横穴墓前庭部から出土している。主体部は検出面からほとんど深さが無く、上面が非常に大きく削平されていると考えられ、多くの遺物が墳丘上に置かれていたおり、削平を受けた時点で周溝内に転落したものと考えられる。しかしながら、須恵器環類・筒形器台・形象埴輪はそれぞれが比較的まとまって出土しており、須恵器環類は、墳丘東側に、筒形器台・形象埴輪は主体部直上から西側に置かれていたものと考えられる。また、円筒埴輪片は、小片となって周溝内からくまなく出土しているが、底部の破片の出土が少ないことから個体数は少ないものと思われる。

**第1号横穴墓出土遺物** 第71~74図は第1号横穴墓出土遺物である。土器類は、すべて前庭部から出土しており、玄室内からは、勾玉・金属器しか出土しなかった。

出土時に確実に原位置を保っていたと考えられる遺物は、前庭部最奥隅に置かれていた72の須恵器長頸壺のみである。また、前庭部の埋め戻しに使用された土中からは、上方の島田1号墳から崩落してきたと考えられる筒形器台片・埴輪片が多く見られ、埋め戻し土が上方の島田1号墳を削って得たものであることがわかる。同様の状況はすぐ隣の第4号横穴墓でも見られ、前庭部の埋土中から埴輪片が出土している。

第71・72図は、第1号横穴墓出土須恵器である。71-1,2は、前庭部埋土中から出土したもので、第1号横穴墓には伴わない可能性が高い。71-1は、坏の小片で、やや内傾する非常に高いカエリを持つものである。上方の古墳から転落してきたと思われるが、島田1号墳のものに比べると、ややカエリ



第71図 第1号横穴墓出土遺物実測図(1)(1:3)

の内傾が強く新しい印象がある。

71-2も坏の小片で、カエリの小さいものである。第1号横穴墓に確実に伴う71-3~7とも大きな時期差は少ないと思われるが、出土状況から第1号横穴墓には伴わない可能性が高い。全面をナデ調整する。

71-3はつまみの付く蓋である。強く内傾する小さなカエリを持ち、ケズリの痕跡をほとんど残さない。つまみは、断面台形を呈するもので、つまみ頂部がわずかにくぼむ。口径は、13.4cmと非常に小さい。

71-4もつまみの付く蓋である。器高が低く、扁平な印象を受ける。カエリは、わずかに飛び出すのみで、断面三角形を呈している。頂部近くにわずかにケズリを残し、小さいつまみを持つ。内面は、不定方向のナデを施す。71-3,4には、いずれの土器にも組み合う坏身が確認できなかった。

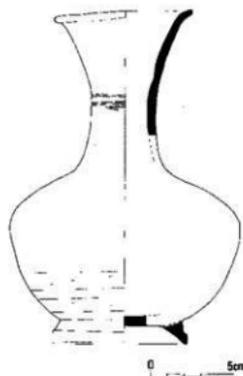
71-5は、輪状つまみを持つ蓋で、その口径から71-6と組み合う可能性がある。非常に小さなカエリを持ち、頂部にわずかにケズリを残す。貼り付けによる輪状つまみは、やや外傾して取り付けられ、高さを持たない。内面は、ナデ調整される。

71-6は、高台付きの坏である。底部外面には、糸切り痕をわずかに残し、やや外側に張り出す非常に厚手の高台を持っている。底部は、高台からやや離れた位置で屈曲し、体部に続いている。体部はわずかに蛇行するが、ほぼ直立し、口縁部にアクセントを持たない。全面をナデで調整し、底部の切り離しの痕跡は残していない。口径約14cmを測る、やや大型の坏である。

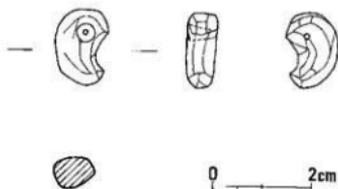
71-7は短頸壺である。底部は曲面になり、わずかに外側に張り出す太い高台を貼り付けている。肩部がわずかに張り、短い口縁は直立する。口縁部から体部上半はナデ調整するが、体部下半から底部にかけては格子目のタキ痕を、内面下半にも同心内文押さえ具の痕跡を残している。器高約16cmと、特別大きな訳でもない短頸壺の底部外面にまでタキによって成形し、切り放し痕を残さないと言う点は特異である。

第72図は、ほぼ完形を呈す須恵器長頸壺で、前庭部奥左隅の地山直上から出土している。外側に張り出し段を持つ、やや高い高台を持っている。器高約20cm、最大径約14cmを測る。体部の下半には、ヘラケズリを残している。肩部は丸味を残しており、稜を持たない。頸部中程に螺旋状に沈線を入れている。口縁部の一部を欠いており、注ぎ口の部分は解らないが、外反し丸く納めている。ほぼ完形を保っていたために内面の調整は不明だが、頸部内面にはわずかに紋目が見え、頸部と体部は別作りし、貼り付けているようである。なお、ほぼ同じ器形を呈する長頸壺が、第4号横穴墓でも前庭部の同様の位置から出土している。

第1号横穴墓から出土した土器の内、最も古相を呈するものは、71-1であるが、前述したように、71-2と共に第1号横穴墓には伴わない可能性が高い。第1号横穴墓に確実に伴うもので、最も古相を呈するものは、71-3や72等で、これらの土器が、第1号横穴墓の初葬の時期に近いものと考えられる。前庭部の堆積状況から、何度かの追葬（あるいは改葬）が認められることから、71-4~6がこの状



第72図 第1号横穴墓出土遺物  
実測図(2)(1:3)



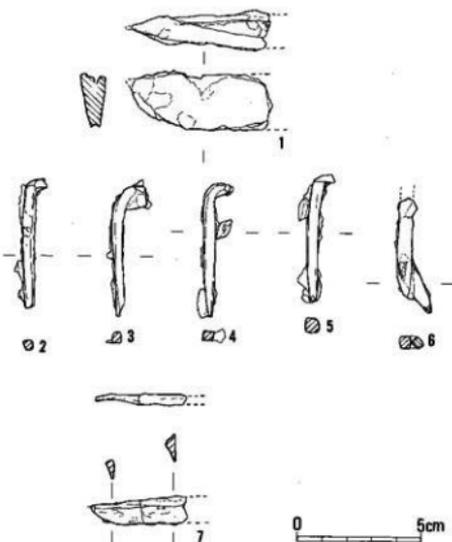
第73図 第1号横穴墓出土遺物実測図(3)  
(1:1)

石材は、長さ16mmを測る橙色のものであるが、白色を呈した部分も多く、比較的不純物が多い。各面とも研磨時の面・稜を明瞭に残している。穿孔は片面から行われたようで、孔は断面円錐形になっている。

玉類は1点のみの出土であり、出土位置も不自然なことから、改葬時に動かされたものと考えられる。

74-1は大刀の切先と考えられる鉄器の小片である。前庭部の黄褐色土中から出土しており、出土層位が高く、第1号横穴墓に確実に伴うとは断定できない。切先部分のみの出土で、他の部分の破片は見られなかった。残存長55mm、刀身幅22mmを測る。厚さは、錆によって大きく膨らんでいるため、約1cmを測る。

74-2～6は鉄釘である。74-6は2本がくっついているように見え、計6本が出土したことになる。いずれも断面方形を呈し、頭部を折り曲げている。すべての釘が先端部を欠いているが、当初は長さ



第74図 第1・4号横穴墓出土遺物実測図(4)(1:2)

況を反映しているものと考えられる。

第73図・第74図の2～6は第1号横穴墓の玄室内からの出土遺物である。玄室内の埋土はすべてふるいにかける等細かく確認したが、土器類は全く入っていないかった。

第73図は、瑪瑙製の勾玉で、他に玉類は検出していない。出土位置は玄室左奥で、奥壁右側に置かれた石棺と左壁手前に並べられた石床の間にあたる。

6cm前後あったものと考えられる。

木棺に使用されたものと想像されるが、この内74-2は、玄門から、他の鉄釘は、すべて玄室中央の縦断セクションベルト内から出土しており、石棺・石床上からは、出土していない。

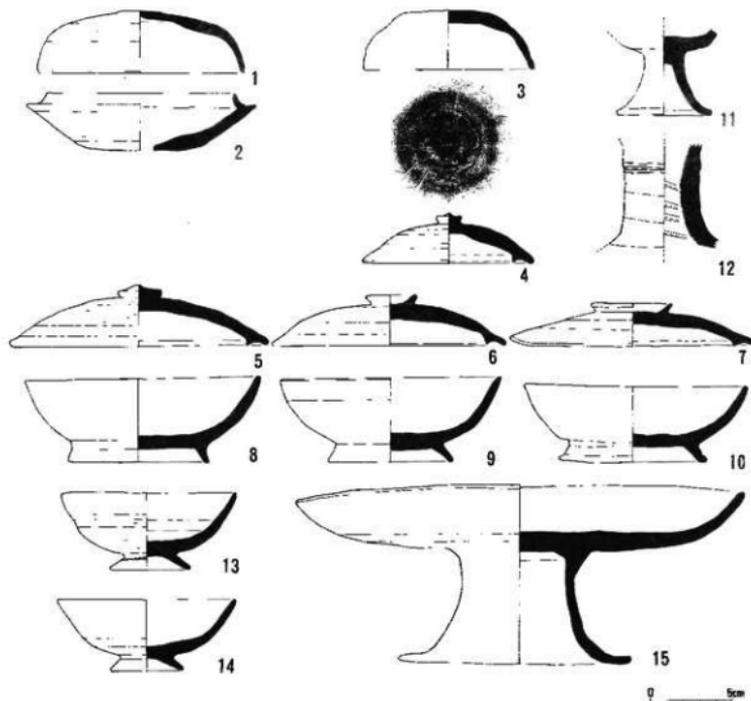
鉄釘の出土位置は、玄門から玄室中央近くに集中しており、いずれも石棺・石床とは無関係の位置にある。また、勾玉も奥壁近くの不自然な位置から出土している。鉄釘の位置からは、石棺・石床が使用された後の追葬時に、木棺の置き場所が無く、玄門近くに置いたとも考えられるが、勾玉の位置は説明しにくい。また、玄室内に土器類も全く入っていないかったことから、別の可能性も考

えられる。同様に玄室内にほとんど遺物を残さなかった第4号横穴墓の状況から、横穴墓に遺骸を納め、完全に埋め戻し、何年かたった後に玄室内を片付ける「改葬」が行われたことが考えられる。この時点で、玄室内に残されていた副葬品のほとんどが持ち出され、人骨・木棺等も移動されたものと思われる。なお、第1号横穴墓完掘後に、石棺・石床の取り上げも行い、特に石床下に玉類・鉄釘の残存が期待されたが、検出できなかった。

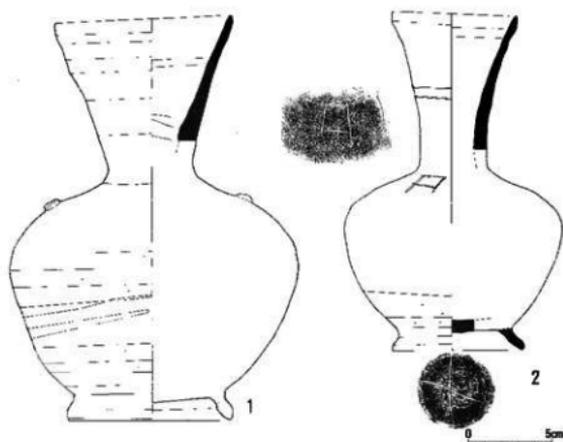
**第4号横穴墓出土遺物** 第4号横穴墓も第1号横穴墓と同様に玄室内からはほとんど遺物を出土しなかった。また、前庭部についても、第1号横穴墓と同様で、覆土上層には、尾根上の古墳から落ちてきたと思われるやや古い須恵器や埴輪片が多く見られた。

74-7は第2号石床上面で出土した刀子である。残存長約37mm、幅約11mmを測り、厚さはきわめて薄い。断面で見ると背の部分が、三角形に傾斜しているように見える。第2号石床上面には、人骨や歯等が残存しており、遺物も残っていることが期待されたが刀子片以外は出土しなかった。

第75図は第4号横穴墓出土須恵器である。この内75-1～3は前庭部の埋土上から出土しているもので、やや古い様相があるが、尾根上の古墳から転落してきたものと思われる。

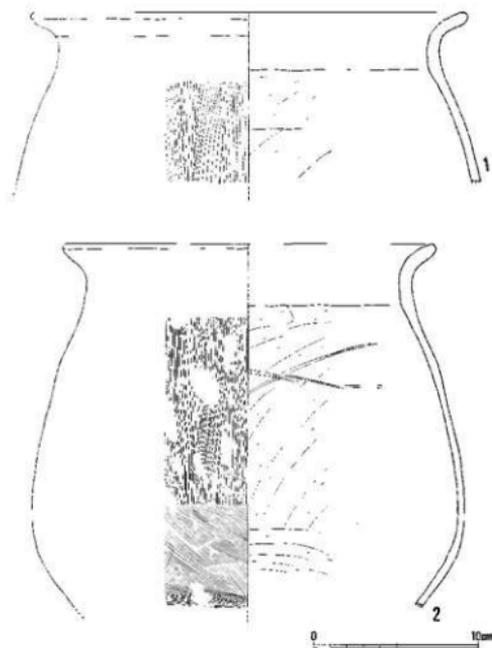


第75図 第4号横穴墓出土遺物実測図(1)(1:3)



第76図 第4号横穴墓出土遺物実測図(2)(1:3)

75-1は、須恵器杯の蓋で、口径約13cmを測る。内外面ともナデ調整され、ケズリの痕跡を残していない。75-2は、須恵器の杯で、低いカエリが内径して付くものである。口径から75-1とセットになると思われる。底部にわずかにケズリの痕跡を残している。75-3も杯の蓋である。口径約10cmと小型のもので、全面ナデ調整される。内面頂部にヘラ記号が見られる。



第77図 第4号横穴墓出土遺物実測図(3)(1:3)

75-4は、宝珠状つまみを持つ小型の杯蓋で、第4号横穴墓羨道部の床面から出上している。出土した場所は、閉塞石が前方に引き倒された場所のすぐ横で、完全に床面に密着していたことから、初葬時のものと考えられる。厚く緩やかに内湾する体部を持ち、小さなカエリを貼り付けている。頂部のつまみの周囲にわずかにケズリを残し、他はナデている。

75-5~10は、いずれも前庭部最奥部の左右の隅に置かれていたもので、床面からは10cmほど離れていたがその高さは、ほぼ共通するもので、同時

に置かれたものと思われる。75-4よりも出土層位は明らかに高く、75-4に明らかに後出する。

75-5は、宝珠状つまみを持つ蓋である。体部は比較的厚く作られ、緩やかに内湾する。内面に小さなカエリを貼り付け、ナデ調整し、体部外面にはケズリの痕跡を残す。

75-6は、輪状つまみを持つ蓋である。つまみ径は約3cmと小さい。断面三角形を呈す小さなカエリを持ち内面はカエリ

付近で大きく屈曲するが、外面は緩やかに内湾する。全面をナデ調整し、ケズリの痕跡をほとんど残さない。76-7も輪状つまみを持つ蓋であるが、つまみの径が75-6に比べ大きい。体部はほとんど直線的に延び、つまみも直立に近い。断面三角形のカエリを持ち、全体にややゆがみが見られる。全面をナデ調整し、ケズリの痕跡を残さない。

75-8は、高台付きの坏である。高台はわずかに外側に向けて張り出し、比較的厚く作られた体部は、緩やかに内湾する。口縁端部は丸く納める。底部にヘラ切りの痕跡を残す。口径から75-5に組み合うものと考えられる。

75-9・10も同様の坏であるが、75-8よりもわずかに口径が小さく、75-6・7に組み合うものと思われる。体部の調整や形状は75-8と同様であるが、高台の張り出し方が大きく、75-10では、特に高台にアクセントがある。

75-11は、前庭部から出土した高坏である。坏部の大半を欠く。脚部は、緩やかに外反し、端部に上向きのアクセントを持つ。脚部に透かしは無い。内面にわずかに絞り目を残すが、ほぼ全面をナデ調整する。

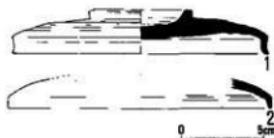
75-12は、長頸壺の頸部と考えられる破片である。前庭部から出土しており、他の破片は見られない。内面には絞り目状の溝が螺旋状に入り末調整。外面はナデ調整し、頸部中央付近に当たると思われる部位に螺旋状に沈線が巡る。76-11に比べ、頸部が直線的で開かない。下端は外側に大きく開く位置まで残存しているが、胴部との継ぎ目は確認できない。

75-13・14は、脚付きの坏である。大きさ・形とも数mmの差しかない。緩やかに内湾する坏部に取り付け部径の非常に小さい、大きく外側に開く脚を備えるもので、外面には、ロクロ巨状の丁寧なナデが施される。斜めに大きく開く脚部は、ほぼ直線で、端部は丸く納める。75-13には、脚部上方にわずかに段が付く。坏部も緩やかに内湾しながら延び、端部は細く尖らせるように終わる。向者とも非常に焼成が良く深い青灰色を呈す。

75-15は、前庭部から出土した大型の高坏である。非常に太い脚部を持ち、透かしは入らない。坏部は浅く、見込み部の平面が広い。坏部外面下方には、わずかにケズリの痕跡を残し、他はナデ調整する。上面見込み部に重ね焼きの痕跡を残している。

第76図は前庭部奥から出土した長頸壺である。

76-1は、第4号横穴墓羨道部床面から出土したもので、初葬に近い時期のものと思われる。丸みのある大きな胴部を持ち、頸部から口縁部にかけては、ほぼ一直線に開く。胴部下方にわずかにケズリの痕跡を残す。肩部にボタン状のものが2個貼り付けられている。76-2も長頸壺で、丸みのある胴部から口縁部がわずかに開く頸部を持つ。頸部中央の沈線は螺旋状にならず、2本の別々の輪になって



第78図 第3号横穴墓出土遺物  
実測図(1:3)

いる。口縁部は、端部下方でわずかに膨らみ、外側に小さな面を持つ。胴部下方にわずかにケズリを残し、高台は外側に張り出す。肩部に「井」字形の、底部に「×」字形のヘラ記号を持ち、特に底部のヘラ記号は焼成後に施された可能性がある。

第77図は前庭部から出土した土師器の甕である。形は2個体ともほぼ同様で、大きく外側に屈曲する口縁を持ち、肩部はなだらかで、77-2では、やや下膨れの形態となっている。口縁部は横ナデし、体部外面は縦方向のハケメで、内面はケズリで調整する。77-2では、体部下方からハケメ・ケズリとも方向を大きく変えている。両者とも出土位置は高いが、破片が比較的まとまって出土しており、上方から落ちてきたような可能性は低く、追葬時に置かれたものと思われる。

第4号横穴墓では、玄室内で、鉄器1片が出土しているが、それと土器以外の遺物は見られず、玉類は、1点も出土していない。

**第3号横穴墓出土遺物** 第3号横穴墓は、調査区の東端に単独で位置する横穴墓で、玄室内の埋土はすべてふりにかけたが、全く遺物が出土しなかった。また、前庭部からも、先端部で須恵器の小片がわずかに出土したのみであった。この内78-1は、トレンチ調査時に出土したもので、第3号横穴墓前庭部先端に当たる位置から出土したものと思われる。低く、大きな輪状つまみを持ちカエリは消失している。体部上面は高さが無く、ほとんどまっすぐに端部に至り、口縁部に向けまっすぐに落ちる。高い口縁部は外側に面を持ち、端部は強く外反する。頂部にわずかにケズリを残している。

78-2は、前庭部先端で出土した須恵器蓋の小片である。口縁端部の垂下する部分がやや短く、体部は緩やかに立ち上がるが、カエリは無く、78-1と同様に輪状つまみが付くものと思われる。内外面ともナデ調整される。出土位置は、床面よりやや高く、追葬時のものと考えられる。

器種	挿図番号	図版番号	出土地点	層位	法量(cm)	石 材
石 鏃	第60図 1	43	1号墳 P.N.O.2005 951027		長：1.4 幅：1.5 厚：0.4	黒曜石
〃	2	43	P.N.O.2001 951027		長：1.9 幅：1.5 厚：0.5	〃
〃	3	43	P.N.O.2002 951027		長：2.4 幅：1.7 厚：0.4	〃
〃	4	43	1区 950628	赤褐色土	残存長：1.8 残存幅：1.1 厚：0.3	〃
剝 片	5	43	4号穴 前底部 950911	鹿土中	長：2.5 幅：1.9 厚：0.6	〃
〃	6	43	1号穴 前底部F 950622	赤褐色土	長：3.0 幅：2.4 厚：1.2	〃
楔型石器	7	43	1号墳 P.N.O.2008 951027		長：2.8 幅：1.1 厚：0.5	〃
剝 片	8		1号墳 P.N.O.2006 951027		長：2.7 幅：2.0 厚：1.7	〃
〃	9	43	1号墳 P.N.O.2007 951027		長：3.0 幅：2.4 厚：1.0	〃
〃	10	43	1号墳 P.N.O.2000 951027		長：3.0 幅：3.5 厚：0.5	〃
石 斧	第61図 1	43	3区 南斜面 950517	排上中	長：16.8 幅：7.0 厚：1.9	灰色（剥離面は赤色） 板状剥離する石材
〃	2	43	1区 950606	赤褐色土	長：16.8 幅：7.9 厚：2.8	板状剥離する石材
〃	3	43	1区 西側斜面 950804		残存長：15.1 幅：7.6 厚：2.5	板状剥離する石材

器種	標記番号	図版番号	出土地点	層位	法量(cm)	形態・文様の特徵	手法の特徴	胎土・焼成・色調
坏蓋	第62図 1	43	2号穴 前庭部	赤褐色土	口径:10.4 器高:2.5		内部:回転ナデ	胎:1mm以下の砂粒を多く含む 焼:良好 色:青灰色
坏	2	43	2号穴 前庭部	赤褐色土	口径:10.4 器:3.4 (推定)		底部:回転ヘラケズリ 他は回転ナデ	胎:1mm以下の砂粒を少量含む 焼:良好 色:青灰色
甕片	3	43	2号穴 前庭部	赤褐色土			内面:同心円文押しえ 外面:平行タタキ	胎:白色の砂粒を少量含む 焼:良好 色:青灰色
坏蓋	第63図 1	44	1号墳		口径:12.9 器:4.3	稜が明瞭につく	頂部:回転ヘラケズリ 他は回転ナデ	胎:白色の微砂粒を含む 焼:良好 色:青灰色～灰色
坏蓋	2	44	1号墳		口径:13.0 器:4.9	同上	頂部:回転ヘラケズリ 他はナデ	胎:1mm程度の白色砂粒を少量含む 砂粒を多く含む 焼:良好 色:灰色
坏蓋	3	44	1号墳		口径:12.6 器:4.1		大井部:ヘラケズリ 他は回転ナデ	胎:1mm程度の白色砂粒を少量含む 焼:良好 色:青灰色
坏蓋	4	44	1号墳		口径:12.4 器:4.9		大井部:回転ヘラケズリ 他は回転ナデ	胎:3mm程度の白色砂粒を含む 焼:良好 色:暗青灰色
坏蓋	5	44	1号墳		口径:12.5 器:4.2	稜が明瞭につく	同上	胎:白色の砂粒を少量含む 焼:良好 色:青灰色
坏	6	44	1号墳		口径:11.8 器:5.1	受け部が高い 焼きゆがみが大きい	底部:回転ヘラケズリ 他は回転ナデ	胎:非常に大きな白色の砂粒を含む 焼:良好 色:暗青灰色
坏	7	44	1号墳		口径:11.2 器:4.4	受け部が高い	同上	胎:白色の微砂粒をわずかに含む 焼:良好 色:青灰色
坏	8	44	1号墳		口径:10.5 器:4.2	たちあがりはやや内傾する	底部:回転ヘラケズリ 他はナデ	胎:2mm程度の白色砂粒を含む 焼:良好 色:暗青灰色
坏	9	44	1号墳		口径:10.7 器:4.7	受け部が高い	底部:回転ヘラケズリ 他は回転ナデ	胎:2mm程度の白色砂粒を含む 焼:良好 色:青灰色、断面は赤灰色
坏	10	44	1号墳		口径:10.8 器:5.4	たちあがりが高い	同上	胎:非常に大きな白色の砂粒を含む ほか、微砂粒を少量含む 焼:良好 色:青灰色

器種	挿図番号	図版番号	出土地点	層位	法量(cm)	形態・文様の特徵	手法の特徴	胎土・焼成・色調
坏	11	44	1号墳		口：9.5 器：4.3	たちあがり りは内傾し、やや 短い	底部：回転 ヘラケズリ 他はナデ	胎：白色の大きな 砂粒を含む 焼：良好 色：青灰色
坏	12	44	1号墳	黄褐色土	口：13.0 器：5.2	受け部が 高い	胴部の大半 に回転ヘラ ケズリ痕を 残す 他は ナデ	胎：密 焼：良好 色：灰色
筒 器 形 台	第64図	45	1号墳 NO.1365 951023他		最大厚： 1.2 一部1.6			
坏	第65図 1	48	1号墳 P.N.O.3062		口：13.9 底：8.2 器：5.0	高台が付 く	内外面：H 転ナデ 可転承切り	胎：白色、黒色の 小砂粒を含む 焼：良好 色：灰褐色
堯 片	第65図 2	48	H1-E 950508	表土中			外面：平行 タタキ 内面：同心 円文押さえ	胎：白色の砂粒を わずかに含む 焼：良好 色：青灰色、断面 灰色
堯 片	3	48	H1-G 950426	赤褐色土			同上	胎：1mm以下の砂 粒を多く含む 焼：良好 色：青灰色
堯 片	4	48	H1-F 950508	赤褐色土			同上	胎：1mm程度の白 色砂粒を少量含む 焼：良好 色：暗灰色
堯	5	48	1号墳 P.N.O.1317 P.N.O.1319 他 951023				全体にH 転 ナデ	胎：1mm以下の白 色の砂粒を含む 焼：良好 色：青灰色
円 筒 壺 輪	第66図 1	46	1号墳 P.N.O.2665 957031 P.N.O.2923 951031				外面：ヨコ ナデとハケ メ 内面：不明	胎：白色の砂粒を 多く含む 焼：良好 色：赤褐色
〃	2	46	1号墳 P.N.O.2539 951030 P.N.O.2540 951030				外面：ハケ メが残るが 風化	胎：白色、灰色の 砂粒を多く含む 焼：良好 色：明赤黄色
〃	3	46	1号穴 前庭部 950727				内外面：ハ ケメ	胎：灰色の砂粒を 多く含む 焼：良好 色：黄白色
〃	4	46	1号墳 P.N.O.1470 951025 P.N.O.1471 他				外面：ハケ メ(1cmに5 本くらい) 内面：ヨコ ケズリ	胎：白色の砂粒を 多く含む 焼：良好 色：明黄褐色
〃	5	46	1号墳 P.N.O.2594 P.N.O.2621 961030				外面：ハケ メ	胎：白色の砂粒を 含む 焼：良好 色：暗黄褐色

器種	挿区番号	図版番号	出土地点	層位	法量 (cm)	形態・文様の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調
出 甕 輪	6		1号墳 PNO.1681 PNO.1675 他				内外面：ハケメ 底部から3cmの所に継ぎ目あり	胎：白色の砂粒を多く含む 焼：軟質 色：赤褐色
〃	7	46	4号穴前庭部 PNO.1250 950905					胎：ガラス質の砂粒～1cm程度の小石を含む 焼：やや軟質 色：明黄色
人 物 輪	第67図 1	47	1号墳		幅：12.0 奥行き：12.7 厚：1.8			
〃	2	47	1号墳 PNO.2285 951030 PNO.1408 951023				肩部にハケメ、他はナデ 粘土を継ぎ足し中空の部分が多い	胎：白色の砂粒を含む 焼：酸化炎で焼成されるか硬質 色：黄色～褐色
〃	3	47	1号墳 PNO.1334 951023					胎：白色の砂粒を多く含む 焼：良好 色：黄褐色
〃	4	46	1号墳 PNO.2623 PNO.2615 951030	底径：24			基底部未調整	胎：白色、灰色の砂粒を多く含む 焼：良好 色：赤褐色
形 象 輪	第68図 1	46	1号墳 PNO.1414 PNO.1407 951023				内面：全て剥離痕	胎：白色、灰色の砂粒を多く含む 焼：良好 色：褐色
〃	2	46	1号墳 PNO.1494 PNO.1520 PNO.1502 951005					胎：ガラス質の小砂粒を含む 焼：やや軟質 色：黄褐色～赤褐色
〃	3	46	1号墳 PNO.1440 PNO.1531 951025				左面は手づくねに見える	胎：灰色の砂粒を含む 焼：軟質でもろい 色：褐色
大 刀	第69図	45	1号墳 主体部		長：89.0 幅：2.6 厚：0.8			
刀 子	第70図	48	1号墳 主体部 951027	黄色土	長：12.0 幅：1.7 厚：0.5			
坏	第71図 1	49	1号穴前庭部C	暗褐色土		たちあがりは内傾し高い	全体：回転ナデ	胎：白色、黒色の砂粒を多く含む 焼：やや軟質 色：灰白色
坏	2	49	1号穴前庭部C 950616	暗黄褐色土	口：9.4		同上	胎：白色の砂粒を少量含む 焼：良好 色：青灰色

器種	挿入番号	図版番号	出土地点	層位	法量(cm)	形態・文様の特徵	手法の特徴	胎土・焼成・色調
坏蓋	3	49	1号穴 前底部 PNO.93 950629		口：8.4 器：2.7	擬宝珠つまみを持つ	外面天井部：回転ヘラケズリ 他は回転ナデ	胎：1mm以下の白色砂粒を少量含む 焼：良好 色：青灰色
坏蓋	4	49	1号穴 前底部		口：9.4 器：2.0	輪状つまみを持つ	同上	胎：1mm以下の白色砂粒を少量含む 焼：良好 色：青灰色
坏蓋	5	49	1号穴 PNO.318		口：11.6 器：2.7		外面天井部：静止ナデ 他は回転ナデ	胎：白色の砂粒を多く含む 焼：軟質 色：灰褐色～赤褐色
坏	6	49	1号穴 前底部 PNO.1249		口：13.8 器：5.1 底：8.6	高台付き 大型 体部はやや直線的に開く	外面：回転ナデ 他はナデ 静止糸切り	胎：1mm程度の白い砂粒を多く含む 焼：良好 色：青灰色～暗青灰色
短頸壺	7	49	1号穴 PNO.1153 4号穴 前底部 PNO.1232 他		口：9.0 器：15.7 底：10.4	高台を持つ	外面の頸部～肩：回転ナデ 体部～底部：平行タタキ	胎：白色の砂粒を多量に含む 焼：良好 色：青灰色～灰色
長頸壺	第72図	51	1号穴 前底部 PNO.1248		口：7.9 器：20.5 底：8.0 最大径：13.9	肩が張らない、高台が猫ん張る、頸部に螺旋状に沈線	肩部にロクロ目 体部：回転ヘラケズリ 回転ヘラ切り痕をわずかにナゲ消す	胎：1～2mmの白色砂粒をやや多く含む 焼：良好 色：明青灰色
勾玉	第73図	52	1号穴 玄室内 B区奥		長：1.6 幅：1.1 厚：0.6			めのう製
刀子	第73図 1	52	1号穴 950623	黄褐色土	残存長：5.5 幅：2.2 厚：1.0			
釘	2	52	1号穴 玄門右 950822		残存長：5.2 幅：0.4 厚：0.4			
釘	3	52	1号穴 玄室内 縦断ベルト前 950829		残存長：5.8 幅：0.5 厚：0.5			
釘	4	52	1号穴 玄室内 縦断ベルト前 950829		残存長：5.3 幅：0.5 厚：0.4			
釘	5	52	1号穴 玄室内 縦断ベルト内 950829		残存長：5.0 幅：0.5 厚：0.6			
釘	6	52	1号穴 玄室内 縦断ベルト内 950829		残存長：4.7 幅：0.6 厚：0.5			

器種	挿図番号	図版番号	出土地点	層位	法量(cm)	形態・文様の特徵	手法の特徴	胎土・焼成・色調
刀子	7	52	4号穴 2号石床 951128		残存長： 3.7 最大幅： 1.1 厚：0.4			
坏蓋	第75図 1	50	4号穴 前庭部 PNO.1199 他		□：12.6 器：3.8	稜は鈍い 全体に灰をかぶり 黒い斑点がつく	頂部にヘラ オコシの痕 外面：回転 ヘラケズリ の後ナデ 内面：ナデ	胎：細かい砂粒を 含む 焼：良好 色：灰褐色
坏	2	50	4号前 PNO.1239 他 1号穴 前庭部 排土中		□：11.4 器：3.5	大型 たちあがり りは内傾 し、やや 短い	底部：回転 ヘラケズリ 後ナデ 他は回転ナ デ	胎：2~3mm程度の 白色砂粒を少量、 1mm程度の白色砂 粒を多く含む 焼：良好 色：青灰色
坏蓋	3	50	4号前 PNO.1188		□：10.4 器：3.6		天井部：ヘラ 切り後ナ デ、内面は 回転ナデ 他はナデ	胎：白色砂粒を多 く含む 焼：良好 色：青灰色
坏蓋	4	50	4号前 床面 PNO.1		□：7.8 器：3.05	宝珠状つ まみを持 つ	頂部：回転 ヘラケズリ 他は回転ナ デ	胎：1mm程度の白 色砂粒を含む 焼：良好 色：青灰色
坏蓋	5	50	4号穴 前庭部 左側		□：15.8 器：3.8	同上	頂部：回転 ヘラケズリ 内面は静止 ナデ 他は 回転ナデ	胎：密 焼：良好 色：青灰色
坏蓋	6	50	4号前		□：11.7 器：3.1	輪状つま み(頂部 内側に粘 土巻き上 げ痕)	頂部：回転 ヘラケズリ 痕わずか 他は回転ナ デ	胎：1mm程度の白 色砂粒を多く含む 焼：良好 色：灰褐色
坏蓋	7	50	4号前 右側		□：15.0 器：2.6	輪状つま み	天井部：静 止ナデ 他 は回転ナデ	胎：密 焼：良好 色：青灰色
坏	8	50	4号前 左側 PNO.2973		□：14.4 器：5.1 底：8.6	高台が付 く	底部：ヘラ 切り後ナデ 他は回転ナ デ	胎：白色砂粒を多 く含む 焼：良好 色：青灰色
坏	9	50	4号前 PNO.1306		□：13.2 器：5.1 底：7.2	高台が付 く 体部内湾	外面を回転 ナデ 他は ナデ 底部 ヘラ切り	胎：1mm以下の砂 粒を多く含む 焼：良好 色：灰褐色~青灰 色
坏	10	50	4号前 右側		□：13.6 器：4.6 底：9.0		底部外面： ヘラ切り後 ナデ 内面：静止 ナデ 他は 回転ナデ	胎：砂粒を多く含 む 焼：良好 色：青灰色

器種	挿図番号	図版番号	出土地点	層位	法量(cm)	形態・文様の特徴	手法的特徴	胎土・焼成・色調
高 坏	11	51	4号前 PNO.1182		底：5.6		脚部内面： 回転ナデ、 ロクロ目を 残す 他は 回転ナデ	胎：1~2mm程度の 砂粒を多く含む 焼：良好 色：淡褐色
長頸壺	12	51	4号前 PNO.1274			内面に紋 り目、ら せん状に 左上がり 粘土紐巻 き上げの 痕跡を多 く残す	外面：回転 ナデ後ナ デ内面： 回転ナ デ	胎：1~2mm程度の 白色砂粒を多く含 む 焼：良好、火当たり 色：外面青灰色 内面灰褐色
低脚坏	13	50	4号穴 前底部 PNO.1271		口：10.6 器：4.7 底：4.6	体部は内 湾する	体部外面に 回転ヘラケ ズリ 他は 回転ナデ 体部と高台 の接続部 にケズリの後	胎：2~3mm程度の 白色砂粒を少量、 1mm以下の白色砂 粒を多く含む 焼：良好 色：青灰色
低脚坏	14	50	4号前		口：10.8 器：4.4 底：4.5	体部外面 ：ロクロ 目が残る	底部内面： 静止ナデ 焼：良好 他は回転ナ デ	胎：1mm程度の白 色砂粒を含む 焼：良好 色：暗青灰色~青 灰色
壺	15	50	4号前 PNO.1206 他		口：27.4 器：11.0 底：14.1	見込み部 に重焼痕 あり	坏部にケズ リ痕を残す	胎：白色砂粒を含 む 焼：良好 色：赤灰色~暗灰 色
長頸壺	第76図 1	51	4号穴 床面 PNO.2 950920		口：10.5 器：25.1 底：9.6 最大径： 17.4	肩部にボ タン状の 取っ手 がある	肩部：強い 回転ナデ 体部：ケズ リ痕を残し その下に強 いロクロ目 が残る	胎：白色の小砂粒 を含む 焼：良好 色：青灰色~灰色
長頸壺	2	51	4号穴 前底部右側 PNO.2976		口：7.5 器：20.9 底：7.6 最大径： 13.0		肩部~体部 ：カキメ 頸部：らせ んにならな い2重の輪	胎：1mm程度の白 色砂粒を含む 焼：良好 色：灰色~青灰色
壺	第77図 1	51	4号前 PNO.1278 950920 他		口：26.0		口縁部：ヨ コナデ 体 部外面：ハ ケメ 内面 ：ケズリ	胎：白色砂粒を多 く含む 焼：良好 色：明橙褐色
壺	2	51	4号前 PNO.1243 PNO.1246 950905					胎：白色砂粒を多 く含む 焼：良好 色：暗赤褐色
坏 蓋	第78図 1	51	長廻1トレ NO.1 920914		口：15.0 器：2.7		天井部外面 ：回転ヘラ ケズリ 他 は回転ナ デ内面：ナ デ	胎：1mm前後の白 または黒色の砂粒 を多く含む 焼：良好 色：淡青灰色

器種	挿図番号	図版番号	出土地点	層位	法量(cm)	形態・文様の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調
環蓋	2	51	3号穴 前庭部B 950727	赤褐色土	口：16.0		外面：静止 ナデ 内面：回転 ナデ	胎：1mm以下の白色砂粒を多く含む 焼：良好 色：青灰色

## 9 小 結

島田遺跡では尾根上を中心に遺構を検出した。以下、主な遺構毎に説明し、小結とする。

**SK-1について** SK-1からは遺物が出土しなかったが、木棺墓に白砂を使用するという点で、安来市域を中心に、弥生後期から古墳前期にかけて見られるものと共通する。仲仙寺9号墓・宮山4号墓・安養寺1号墓などの安来市域の四隅突出型墳丘墓では木棺を砂で被覆しており、付近の遺跡でも、寺床1号墳の第1主体部において、割竹形木棺の上面を砂で被覆したことが知られている。また、近年の調査でも最古級の古墳と考えられる塩津川1号墳第3埋葬施設でも割竹型木棺の上面を白砂で被覆したことが確認されており、寺床1号墳の例も合わせ、砂の使用が弥生時代後期から古墳時代前期にかけてのこの地域の伝統であることが伺われる。島田遺跡SK-1の場合、土層堆積状況から、検出した砂も上記墳丘墓・古墳に比べ薄く、木棺下面に敷いていたと考えられ、上面を被覆した可能性は考え難いが、共通する要素の一つであることは間違いなく、これら墳丘墓・古墳と全く無関係には考えにくい。こうしたことから、島田遺跡SK-1は、古墳時代前期頃に造られたものと考えられる。

**島田1号墳の須恵器について** 出土した土器類の内、島田1号墳に伴うものは東側周溝内から出土した坏と、西側で出土した筒形器台である。筒形器台については、非常に特徴的なもので、類例を知らないが、器台に壺を乗せた部位の表現が明瞭で松江市金崎古墳出土の器台より古手の印象があるが、内面側には、接合部分が明瞭に残されたままで、丁寧な調整を行わないなど新しく考える要素も見受けられる。

坏については、山陰須恵器編年I期の指標となっている薬師山古墳出土須恵器(図11)に似る。蓋を見ると、頂部と側部の境に断面三角形を呈す段が設けられ、その下方の側部はほぼ垂直に落ちる。また口縁端部は、内側に沈線を持っており、5点ともほぼ同じ器形である。それに対し、坏身の方は、口縁部が垂直に立ち上がり、内側に段を有するもの、やや内傾し沈線を持つもの、大きく内傾し口縁端部を尖らせるもの3種類に分けられる。特にカエリの傾斜が大きく、口縁部を単純化したものは形式的には後出する可能性もあるが、陶色の影響を強く受けたものと、地方の要素を強く反映したものの差と考えられ、逆に言えば、こうしたものも同時期に含まれると考えられる。畿内の須恵器の型式で言えばTK-47型式に並行し、5世紀末から6世紀初頭のものと考えられ、この時期に島田1号墳が築造されたものと思われる。

**島田1号墳の埴輪について** 島田1号墳の円筒埴輪はすべて土師質で黒斑は認められない。また、底部調整が行われているが、タグ間のB種ヨコハケは省略され、1次調整のタテハケのみが認められる。また、内面調整については、残存状況とも関係するが、ほとんどハケメを残していない。基本的には縦方向のハケメと考えられ、底部近くにはハケメが消え、横方向の傷が見られる部位がある。また、66-6の様に、基底部下端に円弧方向に砂粒の移動が認められ、基底部下端を切り取った可能性があるものも見られる。この技法は古曾志大谷1号墳の円筒埴輪に行われた底部調整に近いものと思われる。

底部調整が認められることから川西編年のⅤ期に該当し、古昔志大谷1号墳に近い時期のものと思われる。この年代観は、須恵器の年代観とも矛盾しない。

人物埴輪については、全体を何うことができないが、頭部が丸く表現され、みずらを備えることから男子像と考えられる。出雲地方で現在知られている形象埴輪の分布を見ると、形象埴輪自体は出雲地方全域に分布しているが、人物埴輪について見ると後の意宇郡以外では、飯石郡の常楽寺古墳に限られている。もちろん今後発見される可能性はあるが、全長10mほどの小古墳で、埴輪そのものの数もきわめて少ない中で、人物埴輪を所持し得たことはこの古墳の被葬者の性格を伺わせる。

**横穴墓の土器について** 第3号横穴墓からは土器の出土はほとんど無かったが、第1・4号横穴墓の前庭部からは、須恵器を中心に土器が出土している。この内、上方の古墳から転落してきたと考えられるものを除き、最も古相を呈すものは、72-3・4、75-4の3点の蓋である。いずれも小さなカエリを持ち、全体に非常に小さい。これは、須恵器が最も小型化する飛鳥Ⅱ期に当たる。

次の段階では、72-5・6、75-5~10がカエリを残しながらも大型化する時期で、飛鳥Ⅲ期に当たると思われる。71-7については類例を知らないが、長頸壺は飛鳥Ⅱ~Ⅲ期の範囲に収まるものと思われる。出土状況から判断して、76-1が飛鳥Ⅱ期、他の2点が飛鳥Ⅲ期に含まれるものと考えられる。

75-13・14については、県内での類例を知らないが、7世紀末頃のもののだろうか。外面に明瞭な口クロ戸を残すことから金属器を模倣したものであろうか。

75-15は、石見地方や九州などで、8世紀代に見られる脚付き盤に似るが、高台部分がきわめて高く、坏部が丸みを帯びる点で異なる。似たものは、狐谷横穴墓群で、通常の大きさの高坏が見られる。畿内や北陸地方に見られる銅器を写したものと類似点が多く、そうしたものと思われる。7世紀末から8世紀前半頃のもののだろうか。75-13・14と共に、他の須恵器とは色調・焼成が異なり、遠方からの搬入の可能性も捨てきれない。

第3号横穴墓出土の坏蓋(第78号)は、カエリが完全に消失した時期のもので、第1・4号横穴墓の出土物には、見られないものである。島田遺跡での横穴墓の使用の下限を示すものと思われ、8世紀初頭頃と考えられる。島田遺跡では、7世紀代に入ってから横穴墓の開削が始まり、8世紀まで続けられていたようである。

**第1号横穴墓について** 島田遺跡第1号横穴墓は、玄室形態が不整形であり、内包される冢形石棺も、側壁が垂直に近く、葺根の棟線が不明瞭であるなど、特徴的な点が多い。

玄室平面が不整形な点については、未完成横穴墓を使用したか、すでに完成していた横穴墓を拡張した可能性の2点が考えられる。

未完成横穴墓と考えられるのは、天井の界線が不明瞭である点、各壁面の加工痕を明瞭に残す点からである。しかしながら、丸天井風に作られた玄門部には、明瞭な加工痕は少なく、玄室内の加工痕も、その多くが下方に限られる点から、最終的な調整が行われなかったとしても荒掘りは終了した段階と考えられ、その平面形や、犬井の形状はほぼ完成したものと考えられる。

拡張の可能性については、玄室右壁と並行に作られた、造出しの屍床状の段があり、それが、冢形石棺石床の設置によって壊されているように見える点、右壁中程の食い違いと左壁と並行に置かれた

石床の面がほぼ一致する点、側壁に見える界線と天井から降りる界線が一致しない点、などから当初、左右に屍床・石床を配置した横穴墓に家形石棺を入れるため、奥側に拡張した、と考えられる。ただ、上記の可能性の場合、当初の横穴墓の玄室平面は、極端に横長の長方形となる。

拡張の可能性について、もう1点考えられる方法は、右袖から右壁方向に拡張された可能性である。右袖には、玄門側から小さな縁が飛び出しており、玄室側から見ると、玄門に縁が付いているように見える。この明瞭な縁状の加工は右袖にしか無く、この横穴墓の形状をいっそう不自然に見せている。家形石棺と石床の下面のレベルはほぼ一致しており水平に作られているが、右壁の段の部分は、わずかに高くなっている。また、家形石棺・石床を取り除くと、屍床状の段は家形石棺によって、大きく壊されていると言った印象は無く、むしろ、当初から台形に作られていたと言う様に見える。また、家形石棺・石床の面に合わせた床面の加工も当初から作られていたとは考えられないほど一致している。こうした点から、おそらく第1号横穴墓は、当初家形石棺のみを内包する横穴墓として飛鳥Ⅱ期に作られ、まず、空いていた左壁のスペースに石床を置き、後に右壁・右袖を拡張して屍床を造り出し、その過程で、家形石棺・石床の前側のスペースも削り窪めたと思われる。

家形石棺は、特徴的な袖石、極端に扁平な蓋石など特徴的な点を持っている一方で、敷石と敷石側壁を備え、特徴的ながらも袖石そのものの存在は堅持しており、安来平野の家形石棺に見られる特徴を一応残している。袖石については、側面が丸く面取りされており、あたかも元々灯明台石であったかのような印象を受けるが、全面に「L」字形の彫り込みを持ち、削り出しの仕障に面を合わせることから、当初から袖石であったことは間違いなく、正面から見ると馬橋川・意宇川流域に多く見られる「U」字形仕障にも似た印象がある。また、棺蓋は頂部が寄せ棟形で、分銅形には作っていない。こうした様々な特徴は、安来平野と馬橋川・意宇川流域に見られる大きな地域の特徴に必ずしも当てはまらず、立地面からもその中間に位置することから、種々の要素が融合した結果とも思えるが、その最大の原因は、時間的に遅れたものと言える。すでに棺蓋の内面は掘り込んでおらず、側壁が極端に直立する点も新しい要素と考えられる。須恵器の時期から初葬を飛鳥Ⅱ期と考えると、すでに家形石棺の盛期は大きく過ぎており、家形石棺を用いた葬送儀礼の規制的概念が忘れ去られようとしている時期の所産と思われる。

**第4号横穴墓の石床について** 第4号横穴墓に内包される二つの石床は特徴的なもので、特に奥側の第2号石床は、水抜き穴を持つ点、台石で持ち上げる点等、全く類例の無いものである。強いて似たものを探せば、松江市山代方墳の玄室内に残存する石床が近いものと言える。山代方墳の石床とは、平面長方形である点、水抜き穴が確認できない点、縁に枕が削り出されている点が異なるが、平面長方形を為さず、片側が丸い点と枕が無い点については、原石の形状に規制されたものと考えられる。また、最も特徴的な台石については、山代方墳では、石床本体と同一の石材から削り出されているが、島田遺跡の台石と同様に3脚であると思われる。3脚の台を持つという点で、島田遺跡の石床が山代方墳の石床と全く無関係に成立したとは思えない。

玄室内に散在していた長方形の石材は、その出七状況から、当初は直立していたと思われる。ただ、1号石床上の石は、1号石床での葬送儀礼が一段落した後でないと置けないため、いつの時点で何のために立てたか分かり難くさせている。石床と同様に類例が無いが、九州の横穴式石室に見られる仕

障などの影響を受けたものだろうか。

**まとめ** 島田遺跡に於いて最も古い時期に該当するのは、3区で多く採集された石器類である。縄紋時代のものと思われ、落し穴と共にⅢ区に散見される柱穴群の一部は、縄紋時代のものであった可能性がある。

続く弥生時代の遺構・遺物は見られないが、古墳時代前期にはSK-1などの木棺墓が造られる。付近には寺床1号墳や、大木権現山古墳群など弥生時代後期から古墳時代前期の墳墓が多く見られ、そうした墳墓群の縁辺部に当たるものと考えられ、安来平野に見られる墳墓と同様に、主体部に白砂を使用している。

5世紀末頃になると島田1号墳が築造される。島田1号墳は直径10m程の小円墳でありながら長さ89cmもの大刀を副葬し、人物埴輪・筒形器台などの優れた遺物を持つものである。その後、島田2・3号墳や、SK-8などの小古墳が狭い尾根上に次々と築造されていき、この丘陵は、墓所としての色彩を強めていくことになる。

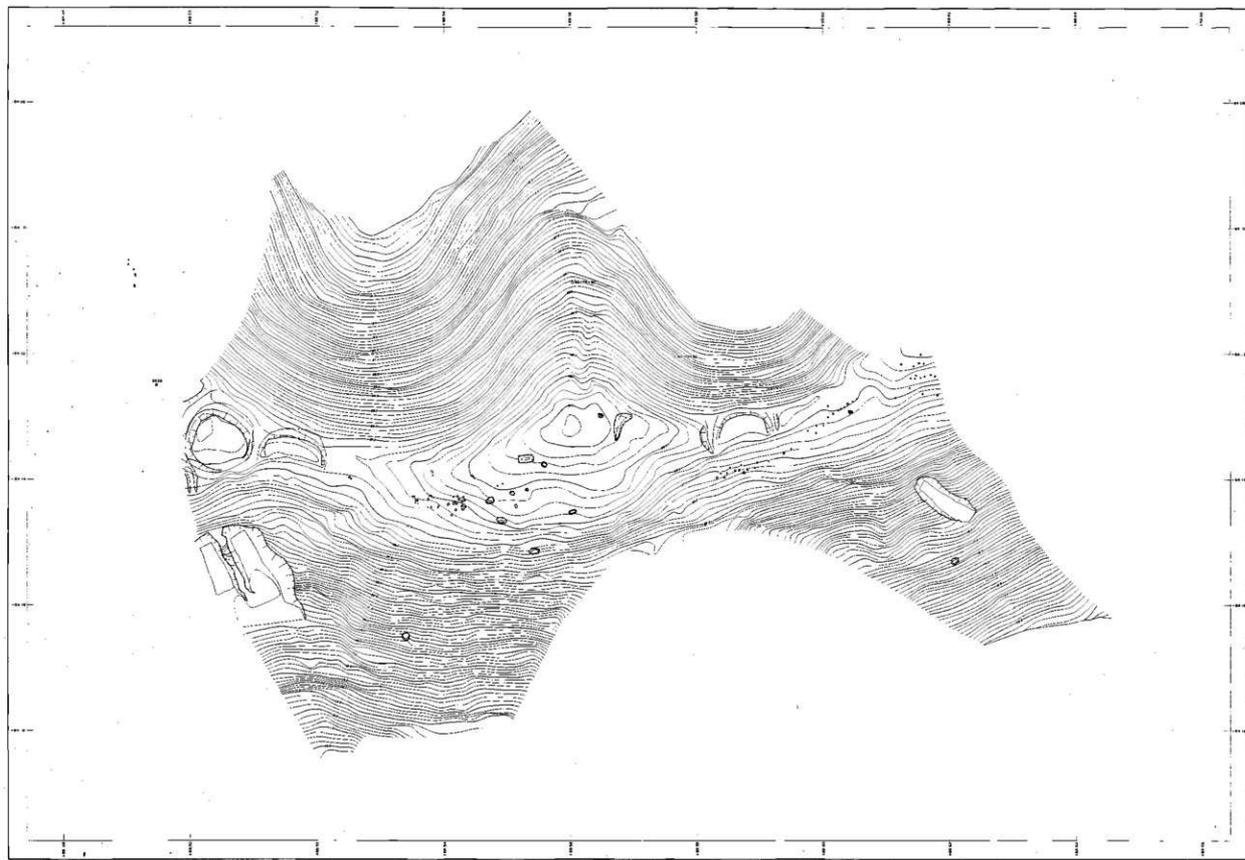
7世紀の後半にさしかかると、第1・4号横穴墓が相次いで造られる。この時期はすでに横穴墓の使用の最終時期にあたり、あたかもそれまでの横穴墓の規制から解き放たれたかのような大規模な横穴墓（第1・4号横穴墓）が構築される。これらの横穴墓は、繰り返される追葬の最終段階に玄室内の遺体や副葬品を片付ける風習があったことが何われ、玄室内には遺物をほとんど残さない。8世紀初頭に第3号横穴墓の追葬（？）が行われたのを最後に島田遺跡の横穴墓の役割は終える。

島田遺跡は、36穴もの横穴墓を検出した島田池遺跡の尾根続きにあたり、島田池遺跡と同様の横穴墓群と尾根上の小古墳からなると予想されたが、小古墳ながら特異な遺物を持つ島田1号墳と巨大な最終段階の横穴墓が中心となっていた。島田遺跡の位置は、大井古窯跡群の対岸にあたり、律令の時代には山代郷から別れ、余部郷となる所である。島田遺跡の状況は、余部郷の住民の特殊性を表すものかもしれない。

註1 山本 清 「山陰の須恵器」『島根大学開学10周年記念論集（人文科学）』1960年

山本 清 「島根大学敷地薬師山古墳遺物について」『島根大学論集（人文科学）』1955年





第79図 鳥田遺跡（調査後）地形測量図（1：600）

# 図 版

数字は図面の番号に対応





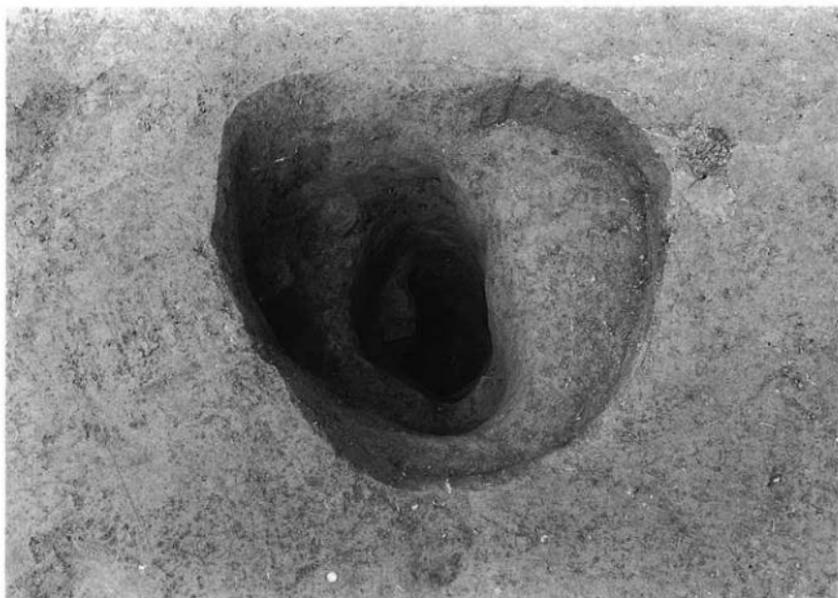
1 岸尾遺跡遠景



2 SB-01・SD-01検出状況



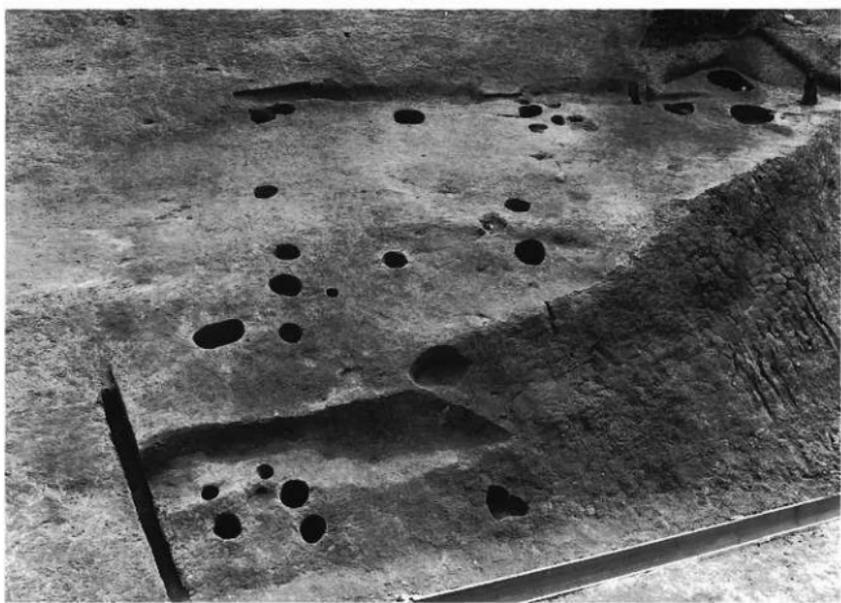
1 SB-01·SD-01完掘状况



2 柱穴 5·土器出土状况



1 SH-01完掘状况



2 SB-01·SH-01·SD-01完掘状况



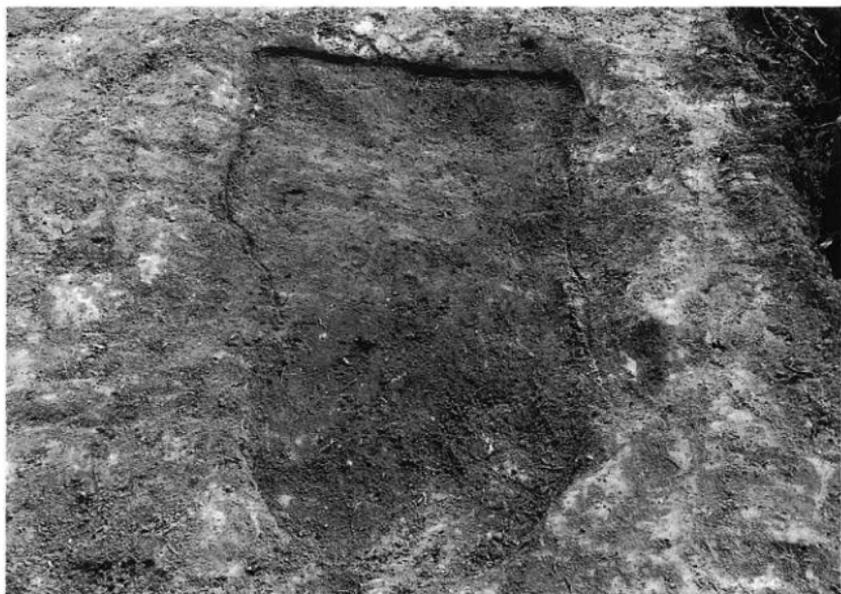
1 SK-01検出状況



2 SK-03検出状況



3 SK-04完掘状況



1 SK-02検出状況



2 SK-02完掘状況



1 SK-05完掘状况



2 SK-06完掘状况



3 SX-04検出状况



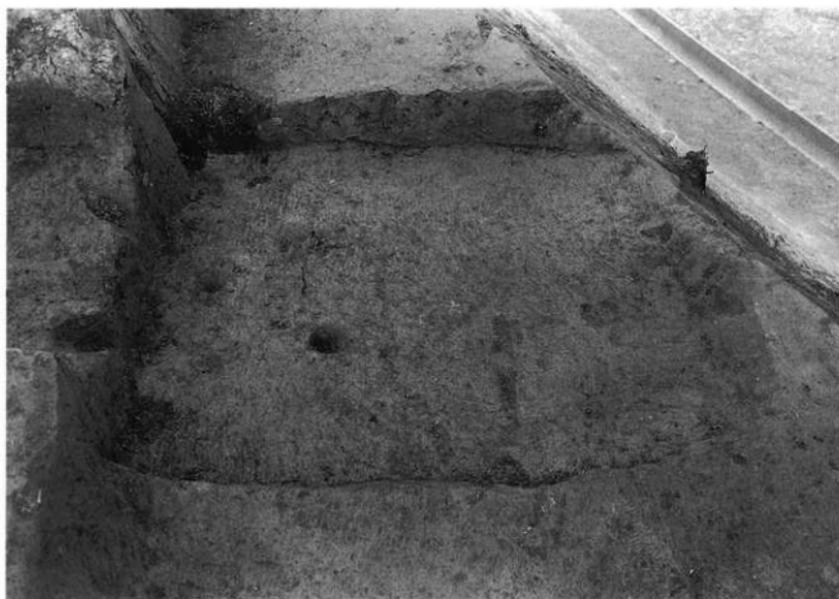
1 SK-07検出状況



2 同 上



1 SK-07土器出土状况



2 SK-07完掘状况



1 SX-01檢出狀況



2 SX-01石蓋檢出狀況



3 SX-01完掘狀況



1 SX-02検出状況



2 SX-02黒褐色土(3層)  
検出状況



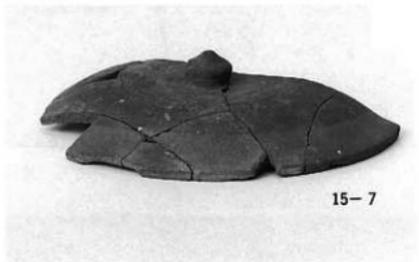
3 SX-02完掘状況



1 落し穴完掘状況



2 土器溜検出状況





15-14



15-15



15-16



15-17



15-18



15-19



15-20



15-22



15-21



15-23



15-24



15-29



15-30



15-31



15-32



15-33



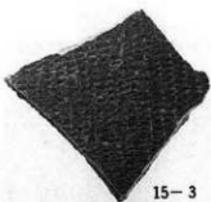
15-34



15-35



15-37



15-3



15-25



15-9



15-26



15-39



15-27



15-28





15-36



15-38



16-1



16-2



16-3



黑曜石碎片 1



黑曜石碎片 2



黑曜石碎片 3



黑曜石碎片 4



黑曜石碎片 5



黑曜石碎片 6



島田遺跡調査前全景（北から）



島田遺跡調査前近景（南から）



島田遺跡調査後近景  
(Ⅲ区東から)



島田遺跡調査後全景(北から)



島田遺跡調査後近景(南から)



N1トレンチ北壁土層堆積  
状況



第3号横穴墓土層堆積状況  
(南から)



第3号横穴墓土層炭窯  
(東から)



Ⅲ区ピット群(SA-5・6)  
完掘状況(東から)



SK-9 検出状況(西から)



SK-9 完掘状況(西から)



SK-4 完掘状況 (東から)



SK-3 土層堆積状況



SK-3 完掘状況



S K - 7 土層堆積状況



S K - 7 作業風景



S K - 7 完掘状況 (東から)



島田遺跡5Bトレンチ土層  
堆積状況 (SK-1付近)



SK-1検出状況 (西から)



SK-1土層堆積状況  
(西から)



SK-1 完掘状況 (東から)



SK-1 完掘状況 (西から)



S K - 8 検出状況 (西から)



S K - 8 石材の状況(南から)



S K - 8 完掘状況 (南から)



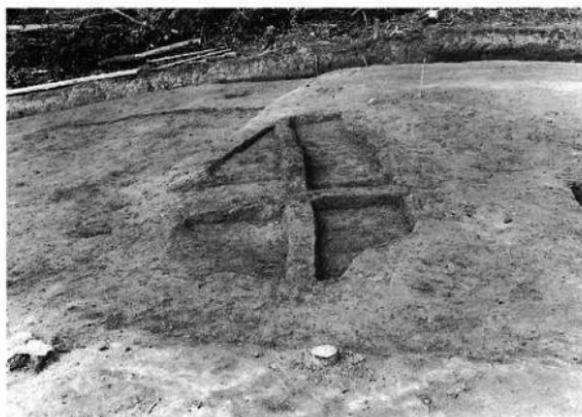
島田1号墳土層堆積状況（主体部付近北から）



島田1・2号墳土層堆積状況（周溝内 南から）



島田1号墳主体部大刀出土状況(南から)



島田1号墳主体部土層堆積状況(東から)



島田1号墳主体部刀子出土状況(南から)



島田1号墳作業風景（北から）



島田1号墳遺物出土状況（東から）



島田1号墳完掘状況(東から)



島田1・2号墳完掘状況  
(東から)



島田3号填土層堆積状況(周溝内 南から)



島田3号填完掘状況(西から)



第1・4号横穴墓（南から）



第1号横穴墓土層堆積状況  
（南から）



第1号横穴墓土層堆積状況  
（東から）



第1号横穴墓付近遺物出土状況(南から)



第1号横穴墓閉塞状況



第1号横穴墓閉塞石除去状況



第1号横穴墓家形石棺



同右から



第1号横穴墓石床



第1号横穴墓玄室天井



第1号横穴墓玄室・玄門



第4号横穴墓土層堆積状況  
(南から)



第4号横穴墓土層堆積状況  
(東から)



第4号横穴墓閉塞状況



第4号横穴墓前庭部



第4号横穴墓後道部



第4号横穴墓玄門～女室内



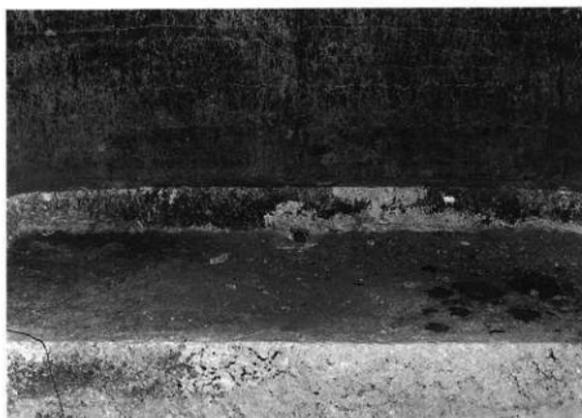
第4号横穴墓玄室内石列検出  
状況



同 (左から)



同 (右から)



第4号横穴墓2号石床上面



第4号横穴墓玄室内右袖付近  
人骨出土状況



第4号横穴墓玄室内左袖付近  
人骨出土状況



第4号横穴墓石床



同 右から



第4号横穴墓玄室内  
天井～壁面